

工ト3N15

明治二十九年一月第三版

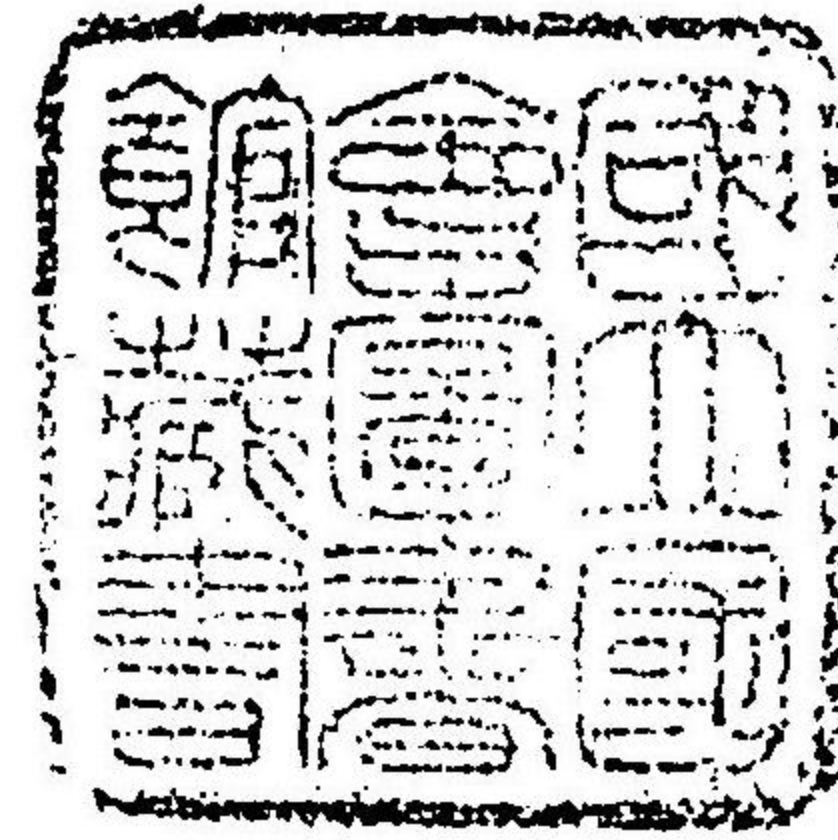
訂正
增補
大日本人名辭書

經濟雜誌社出版

再板大日本人名辭書序



余友鼎軒田口君。夙興經濟雜誌社。稍二
 速才俊。自執牛耳。連作良書。大日本人名
 辭書其一也。頃者再版告竣。君來請余一
 言。余與君有舊好。故不敢辭而序之。曰夫
 短篇小冊。厚不盈寸者。滿都書房爭刻之。
 利在目前也。浩翰大帙。要鉅費者。雖官府
 之大。回避不啻。勞多而功不俄著也。獨經



濟雜誌社毅然自任。曾有斯書及泰西政
事類典日本社會字彙等之舉。並行于世。
不亦偉乎。初斯書之成。在明治十九年。爾
來學者置之座右。隨索隨獲。如探囊中物。
稱為操觚家至寶焉。然原板有限。購求無
罄。至近年市價暴貴。不啻倍蓰。於是乎遂
有再版之役。乃增加前書遺漏。及近時名
流之歸道山者五百餘人。逐次編纂。曷焉

而起功。未裘而卒業。校讐之精且速。可謂
力矣。余於是論之曰。編史洵難。作人名辭
書尤不易。請言其畧。自古史筆兼三長者
幾希。即有之。率不能免不公不精之失。編
史之難如是。若夫人名辭書。不與歷史同。
而其難在宏博並該。網羅不遺。故其所采
錄。注。出乎歷史之外。則上自帝王卿相。
下至閭閻小人。苟有可傳焉者。收而誌之。

其間逢踪蹟湮晦。歲月不明。邈者或質之
故老。或徵之墓石。東西咨詢。必究其端而
止。其業豈易也哉。抑浩翰大帙。官府之
所不敢為。而經濟雜誌社獨力任之。不識
官府之力果絀於經濟雜誌社乎。官府與
經濟雜誌社。其力必有間。至事業之成否。
蓋存乎人云。

明治辛卯十月香亭中根淑題



大日本人名辭書序

經濟雜誌社員田口鼎軒纂大日本人名
辭書成。索余叙。鼎軒嚮著日本支那開化
小史。又論時勢。皆有獨創之見。不可磨滅之
識。猶新鑿地而出。泉他人所已汲。不復汲也。今
此人名辭書。亦我邦所未有。而鼎軒始任其
編纂。遂能完業。余未暇為世人賀其得藝
林之一大利便。而先自喜免于從前搜索之

難也。余自少小好聚書。及踰知命而所藏和漢之書二萬有餘冊矣。以防祝融之故。離居室數十步。踰一池而南。築書庫而藏焉。又固扃重鑰以防之失。故若有欲搜索之事。則腰鍵而出室。風雨晝晦。一手持傘。一手秉燭。啓鑰而入庫焉。東索西求。書冊縱橫如獺祭魚。如此而或有獲。或有不獲矣。然而如漢士人名有萬姓統譜等書。雖未備。而尚可以資

考核。至于吾邦人名。則除帝王將相歌人高僧之表々著明者外。未嘗不以其難搜索故。廢然而返也。今也得此一冊。置諸案頭。吾邦古今各種人物事畧。隨求隨得。易如探囊取物。回想從前搜索之難。不啻若汽車與徒行之相懸絕也。余豈得不先自喜乎。夫汽車始作。而行旅之利便。為昔日所不見。故人不憚于行旅。行旅者日多。而人智益進于開明矣。

凡例

- 一 姓名記載の方法は専ら左の數則に従ひ以て其傳を掲ぐ
 - 一 天子は其の諡を用ふ
 - 一 皇子親王后妃は其の名を用ふ而して聖德太子の如き其諡を用ふ
 - 一 相將以下大抵の士人は其の姓名を用ふ譬へは竹内宿禰、吉備真備、源義家、足利尊氏、徳川家康、本多忠勝の如し
 - 一 學士は多く姓と號とを用ふ譬へは新井白石、荻生徂徠の如し
 - 一 俳人畫工茶人の如き其の姓名かならざるもの及び號のみを以て通じ姓の著はれざるものは單に其の號を用ふ其の姓名かなるものは其の姓を記す
 - 一 俳優力士音曲家は凡て其藝名を用ふ
 - 一 劍客武人の内専ら通稱を以て行はるゝものは其の通稱を用ふ
 - 一 女子の姓詳ならざるものは單に其の名を記す而して別に阿の字を冠せず(例へは萬之方、茶之局、祇王)又名詳かならずして著明のものは單に姓氏若くは其父夫の姓名を書し其女若くは妻と書す
 - 一 僧侶は單に其の名を記するものあり又た號を併記するものあり
- 以上は此書編纂の主要なり畢竟世人の最も知る所の名稱の下に其傳を附するにあ
る也本邦の人古時姓あり氏あり名あり中古以後苗字あり通稱あり實名あり字あり
號あり別字別號あり紛々として混亂す而して歴史雜書記する所又た一定すべから
ず此の書は索引に便にするを主とす故に其の最も世に知らるゝものを執るなり而

今此書始成而搜索之利便實從前所未有。
余故知今後人不憚于搜索。搜索者日多。
而一世之學問均向于進步也。此則余又不
得不為世人賀焉。

明治十六年十月四日

敬宇中村正直撰



も大率別名を掲げて以て索引に便にす
 一 此の書姓名の順序は五十音の順序に従ふ其の躰裁西洋の辭書に異ならず今之
 を畧説すれば左の如し

五 十 音

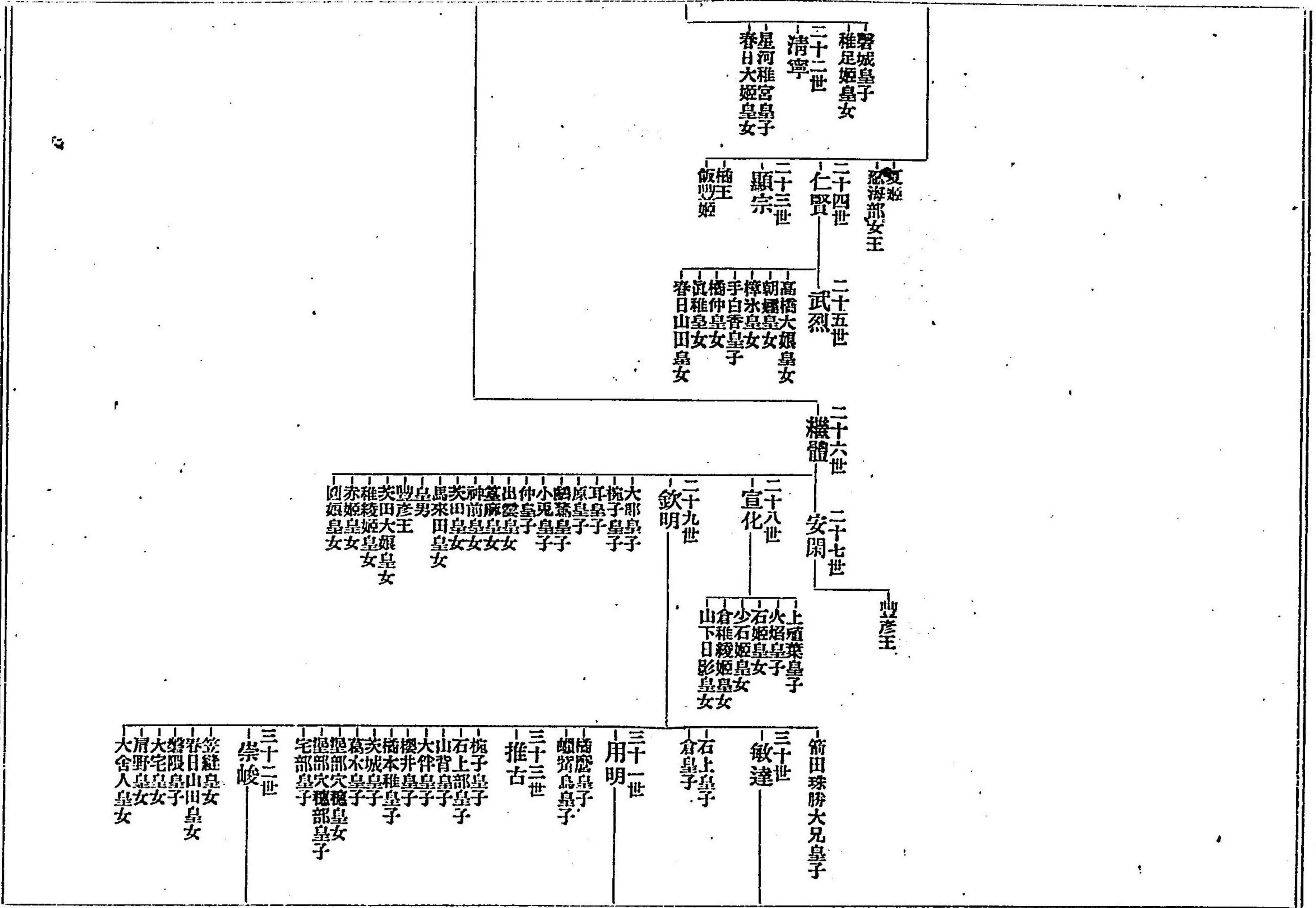
ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
フ	ヘ	フ	ヘ	フ	サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	フ	ハ	ヒ	フ	ヘ	フ
マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	ユ	ユ	ヨ	ヨ

此順序を以てする故に左の如く列記す

以上は三段の場合に於て其例を示したるものなり其の數増加するに於ては此の理
 を推して其の席次を求むべし
 一 ヲの音はムと同音とし其の席に配す
 一 古人の姓名の間ノ字を置くを常とす然ども此書に於て一切之を除けり
 一 假名遣ひに數説ありて決しがたきもの及び同字にして讀方數多あるものゝ如
 きは甲所を檢して無き時則ち乙所を索むべし

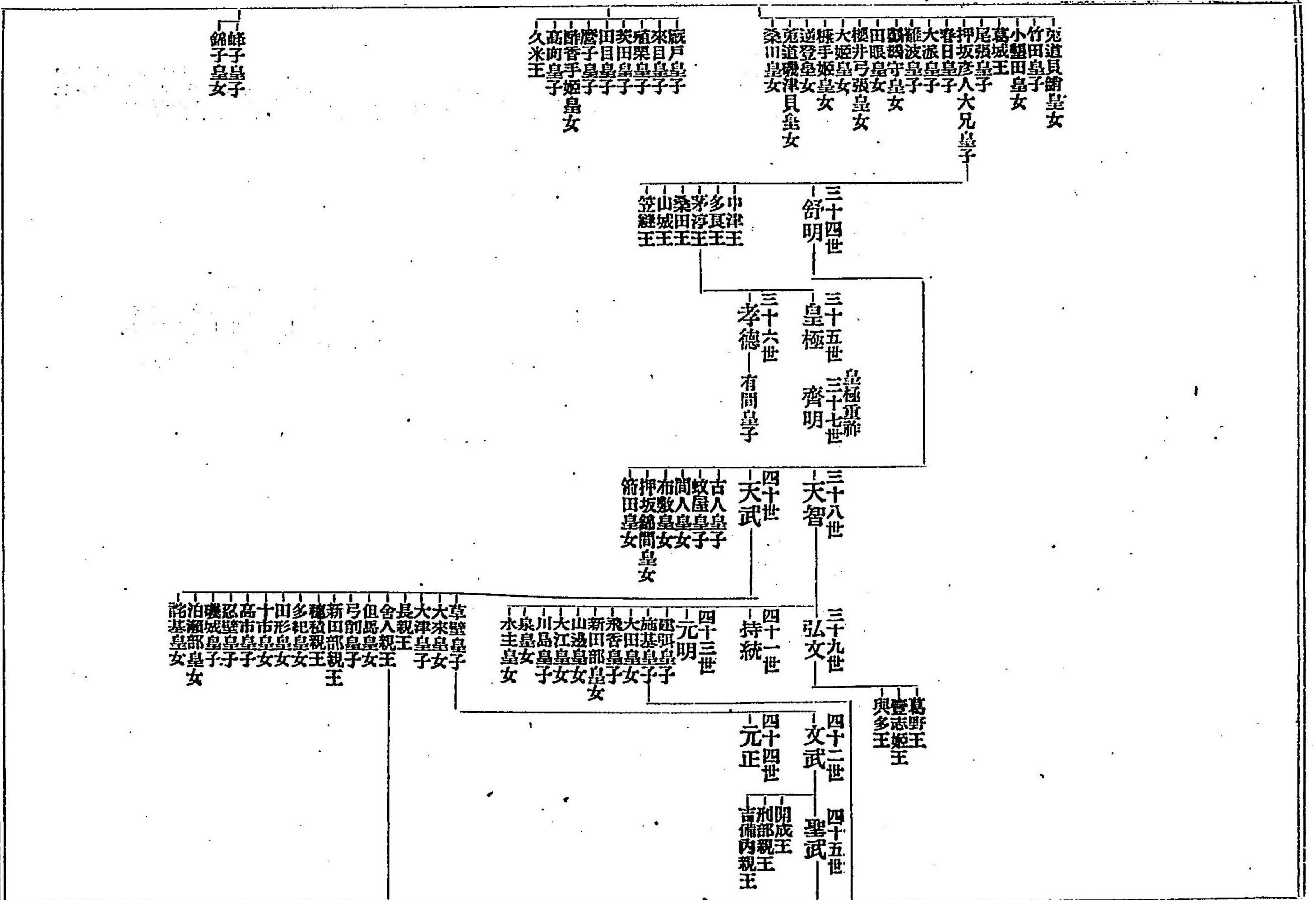
大 日 本 人 名 辭 書 系 圖 目 録

同 系 圖	第 一	皇 統	一 頁
同	第 二	親 王 家	一 五 頁
同	第 三	藤 原 氏	二 〇 頁
同	第 四	平 氏	二 四 頁
同	第 五	源 氏	二 五 頁
同	第 六	北 條 氏	二 七 頁
同	第 七	足 利 氏	二 八 頁
同	第 八	新 田 氏	三 〇 頁
同	第 九	織 田 氏	三 一 頁
同	第 十	豊 臣 氏	三 二 頁
同	第 十 一	上 杉 氏	三 三 頁
同	第 十 二	徳 川 氏	三 四 頁
同	第 十 三	皇 學 家	三 七 頁
同	第 十 四	儒 者 學 派	三 九 頁
同	第 十 五	宗 門 系 譜	四 六 頁
同	第 十 六	醫 師 派 譜 及 鍼 醫 譜	五 〇 頁
同	第 十 七	武 術 諸 流	五 五 頁



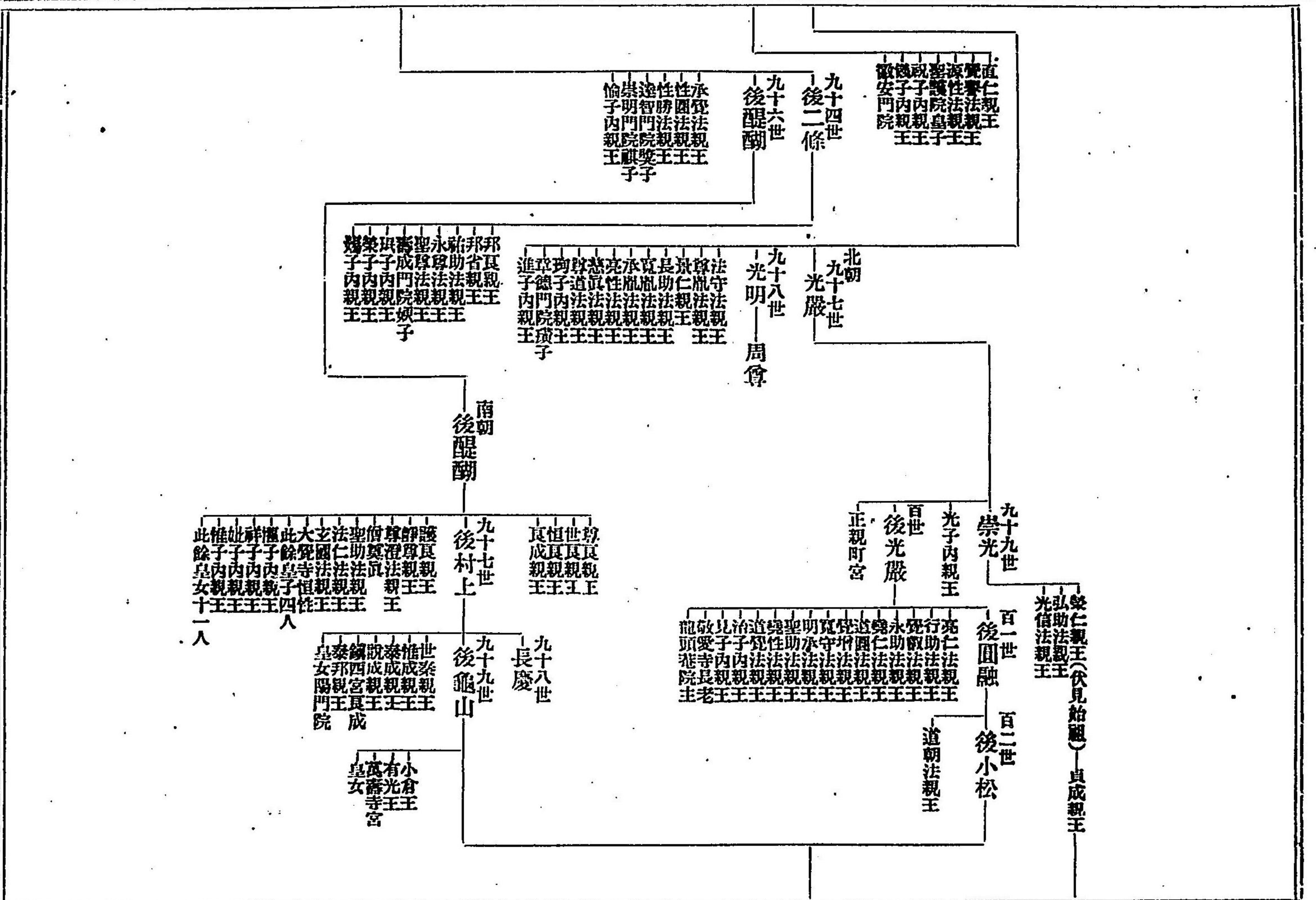
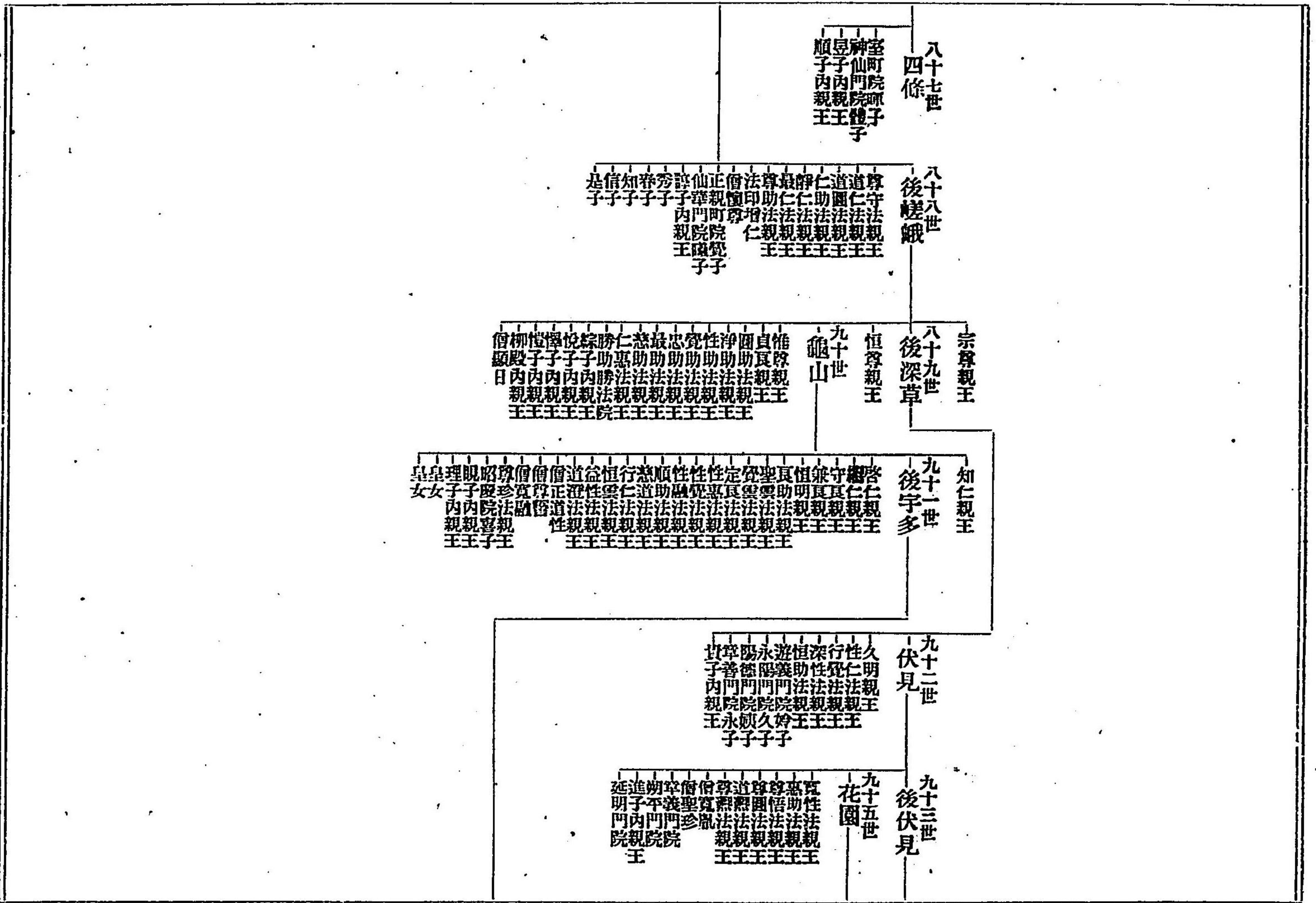
崇峻天皇

崇峻天皇

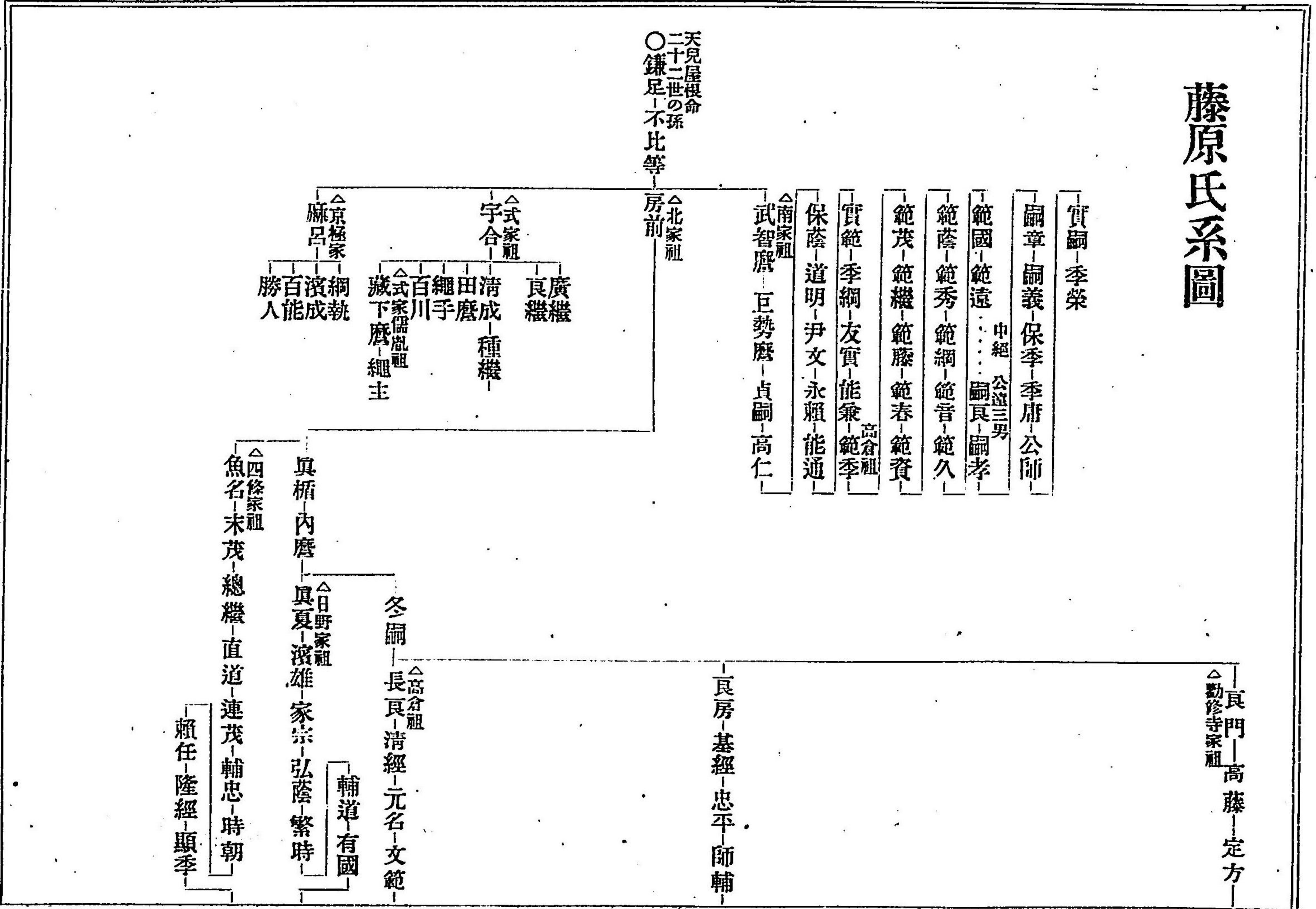


崇峻天皇

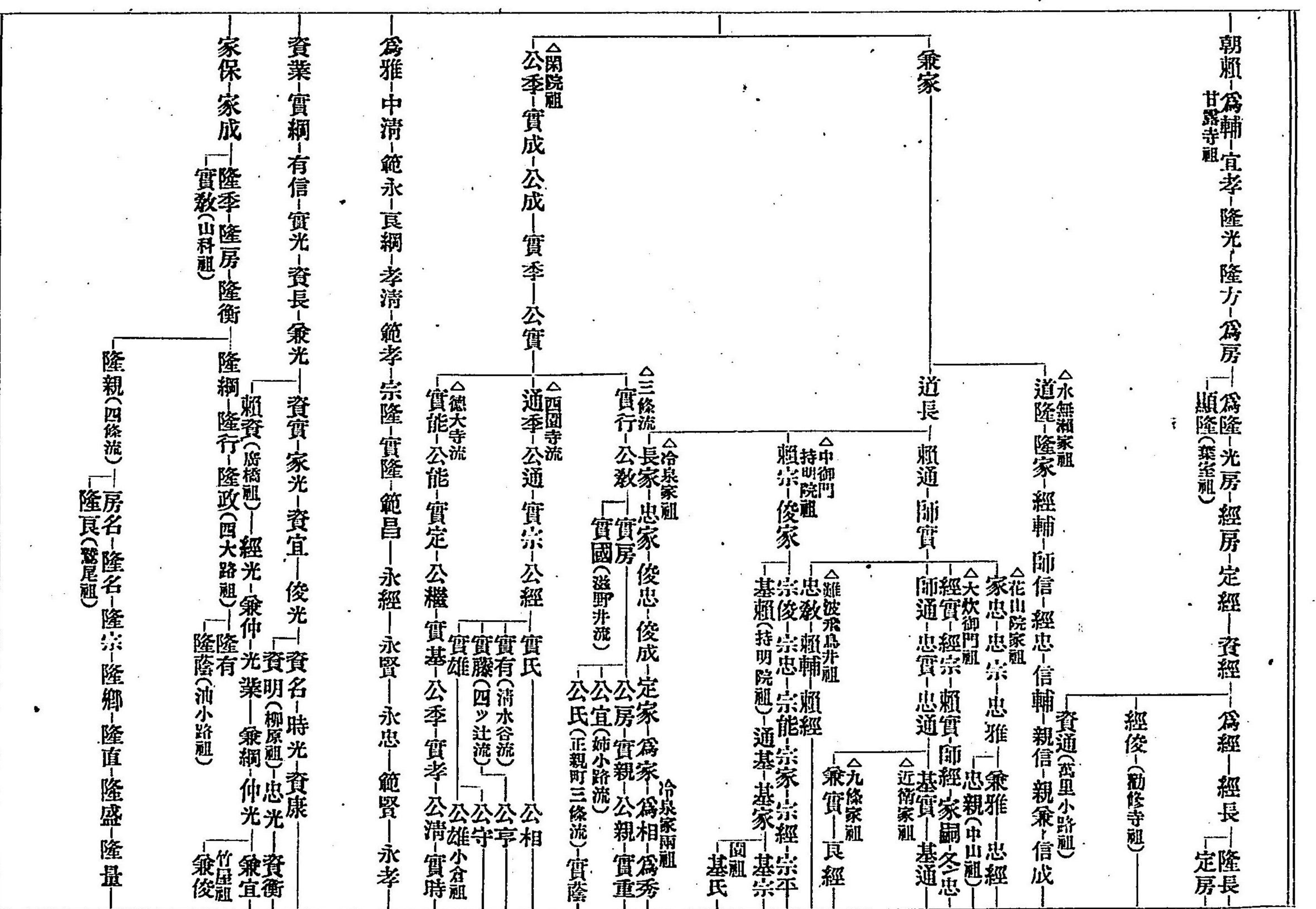
崇峻天皇



藤原氏系圖

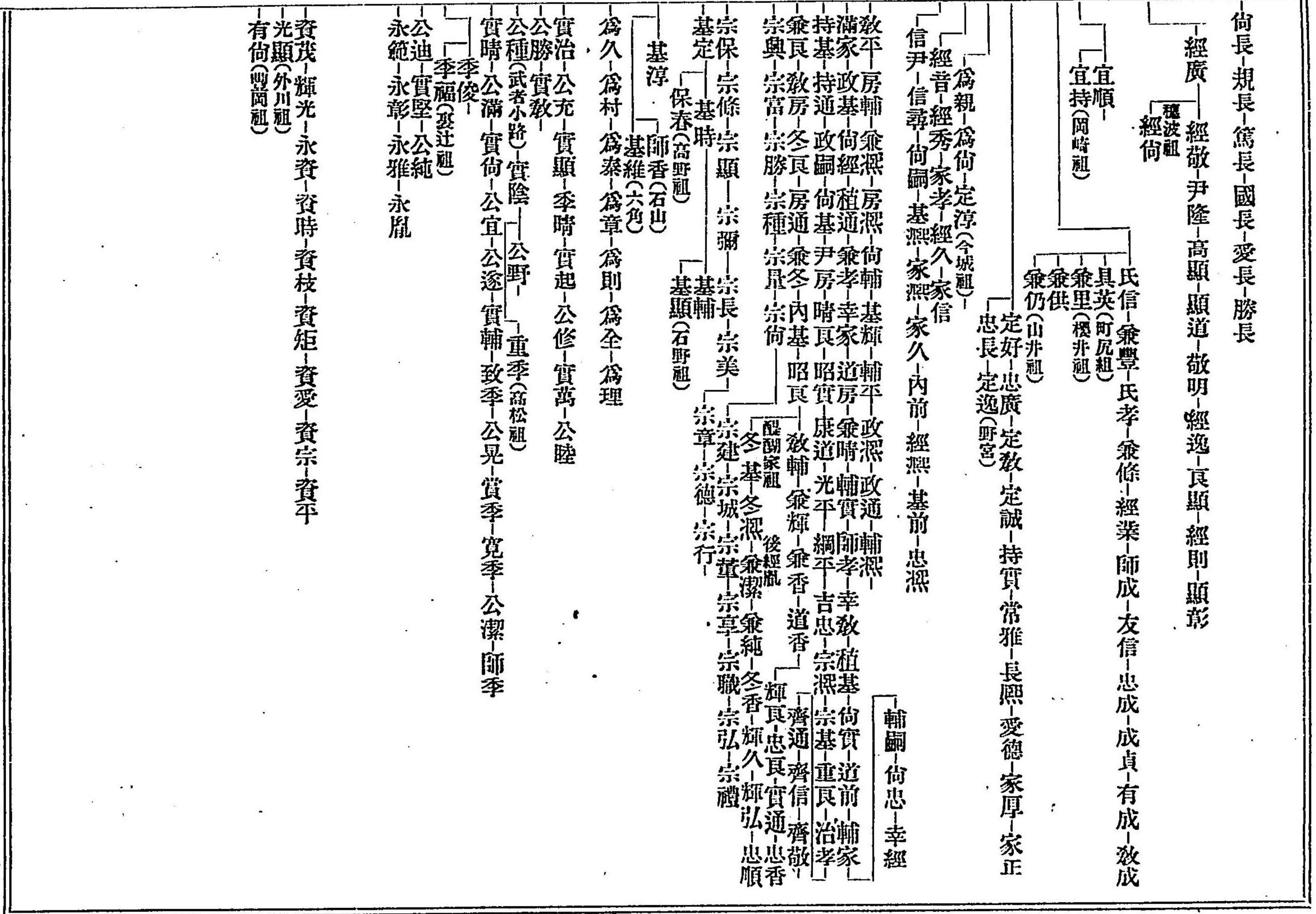
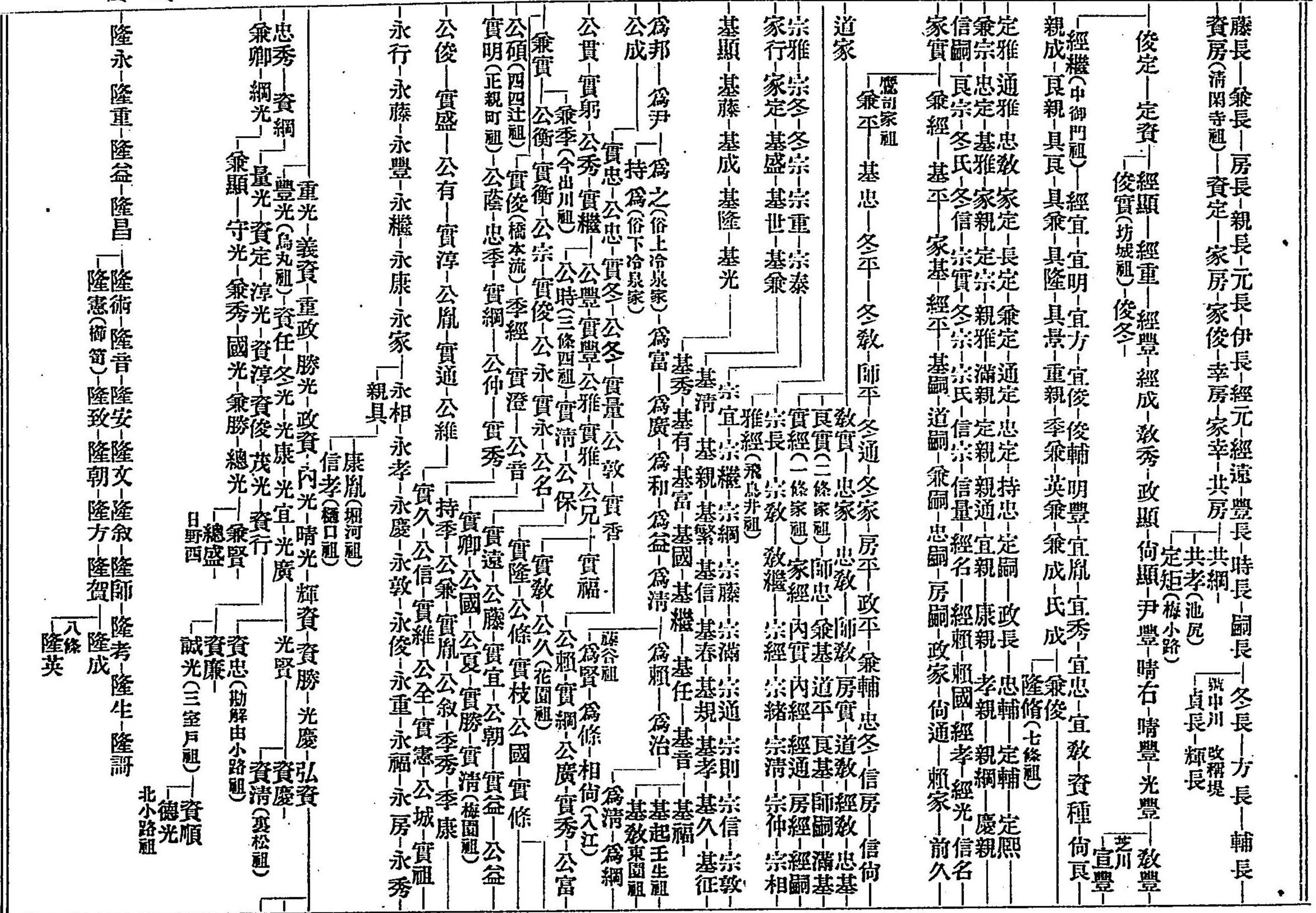


(一〇) 系圖 第參

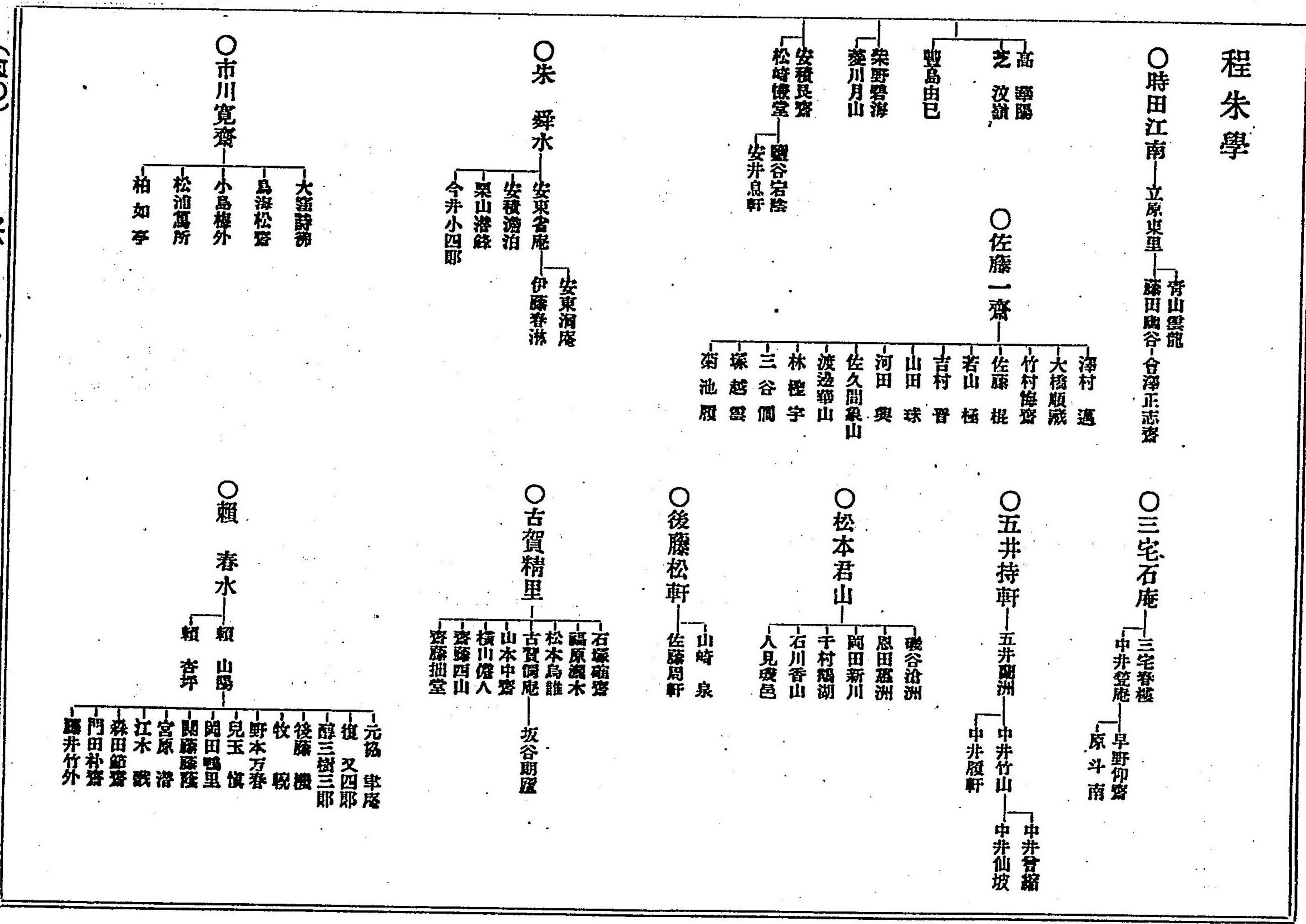


系圖 第參 (一一)

藤原氏

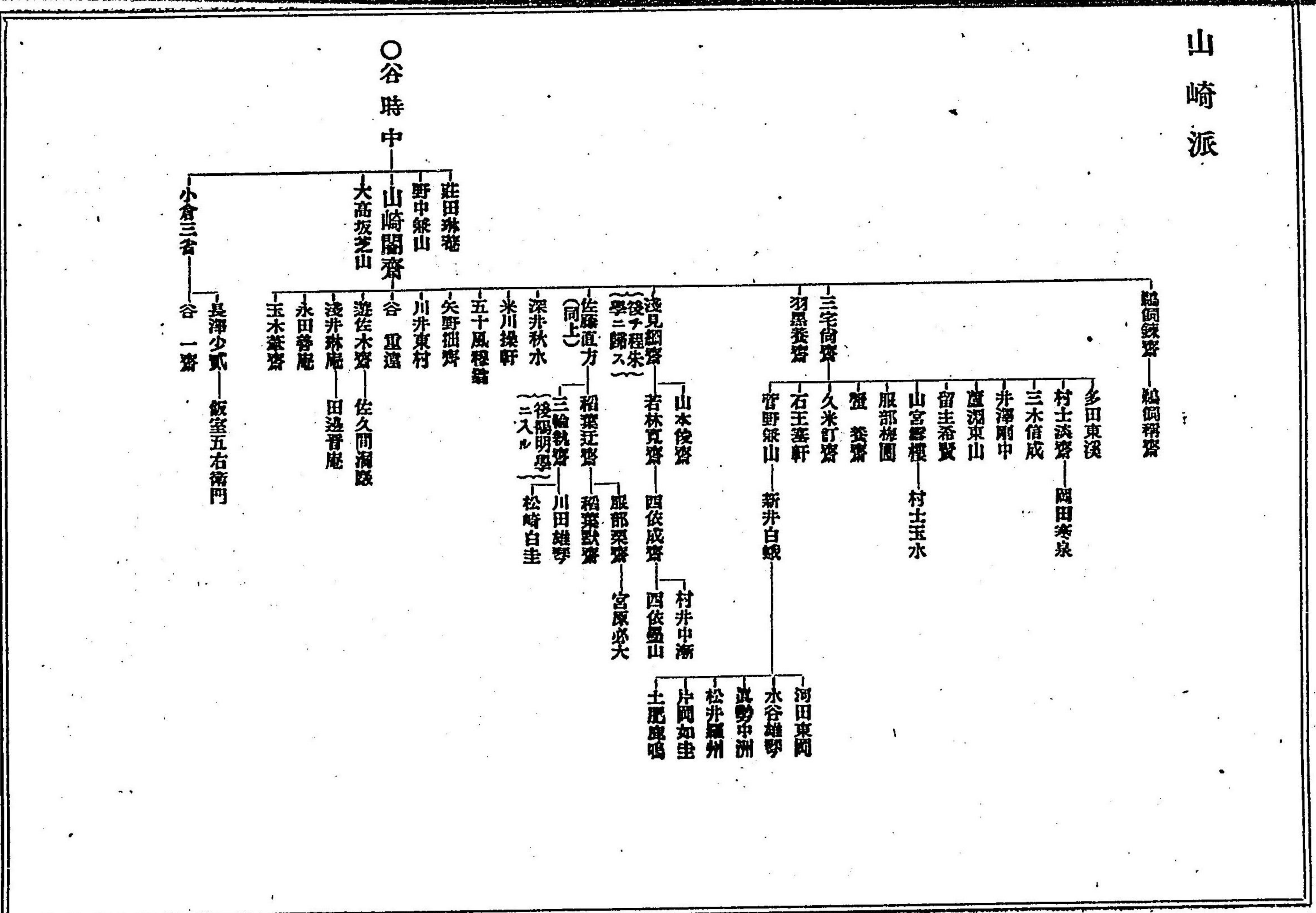


程朱學

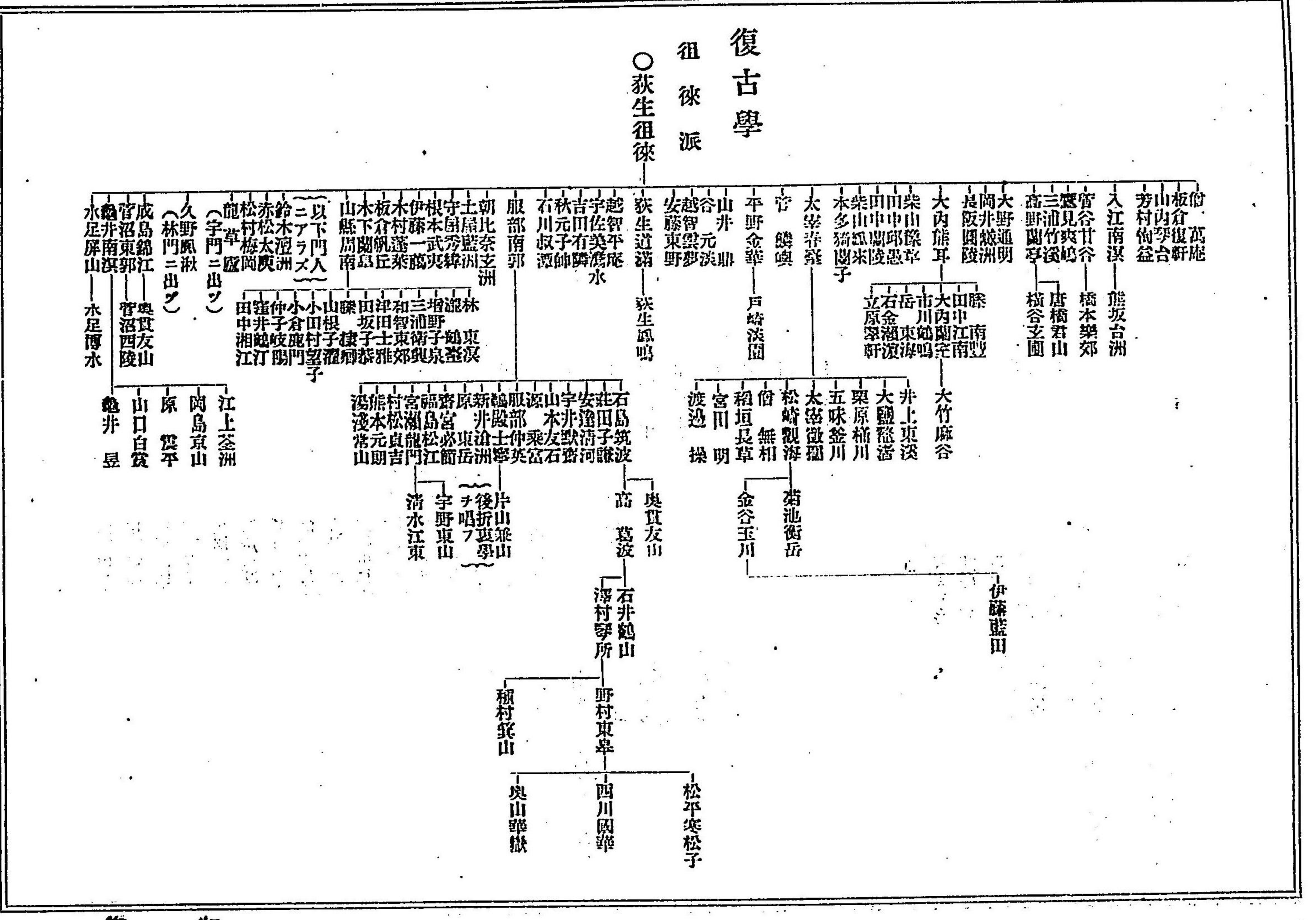
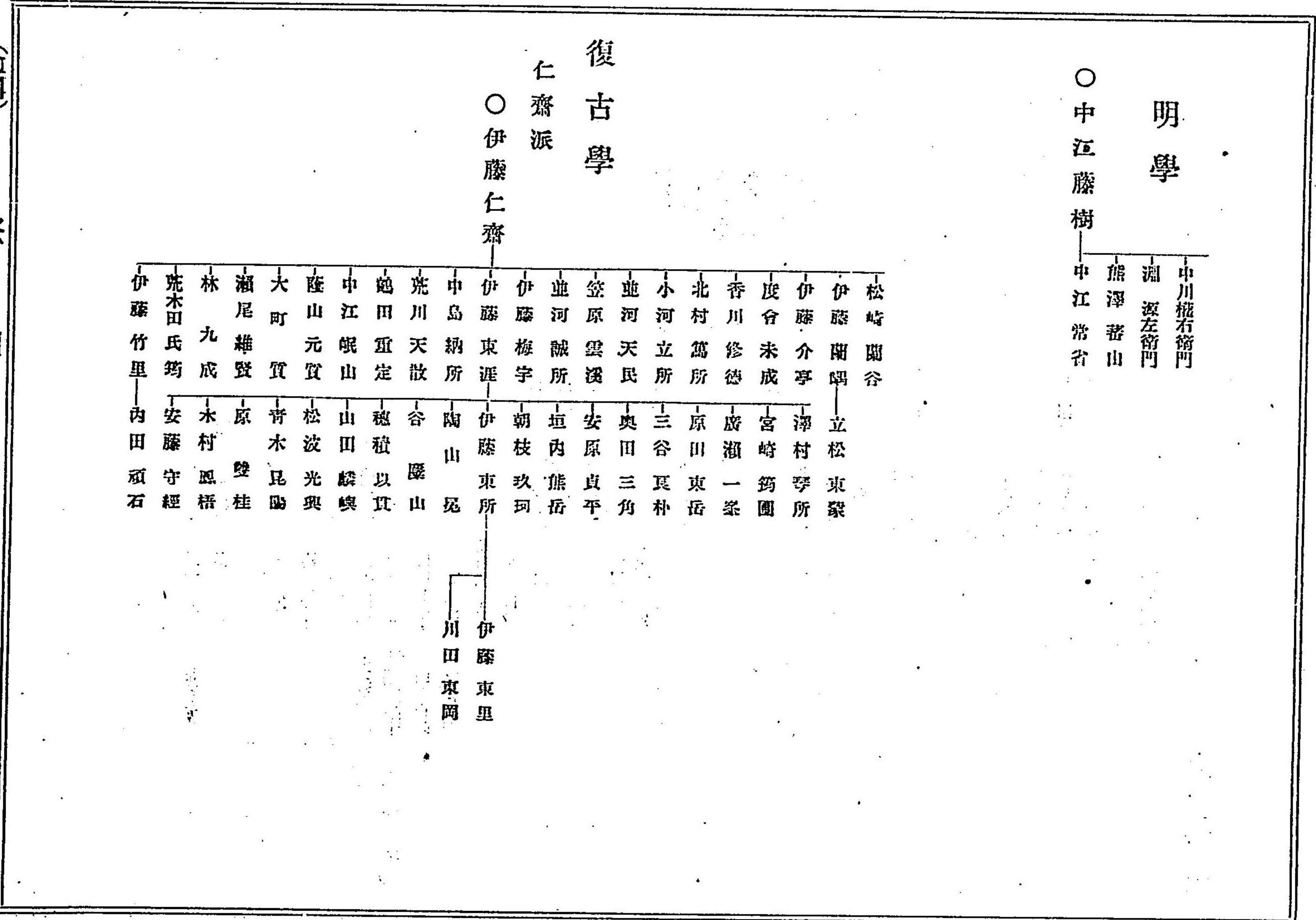


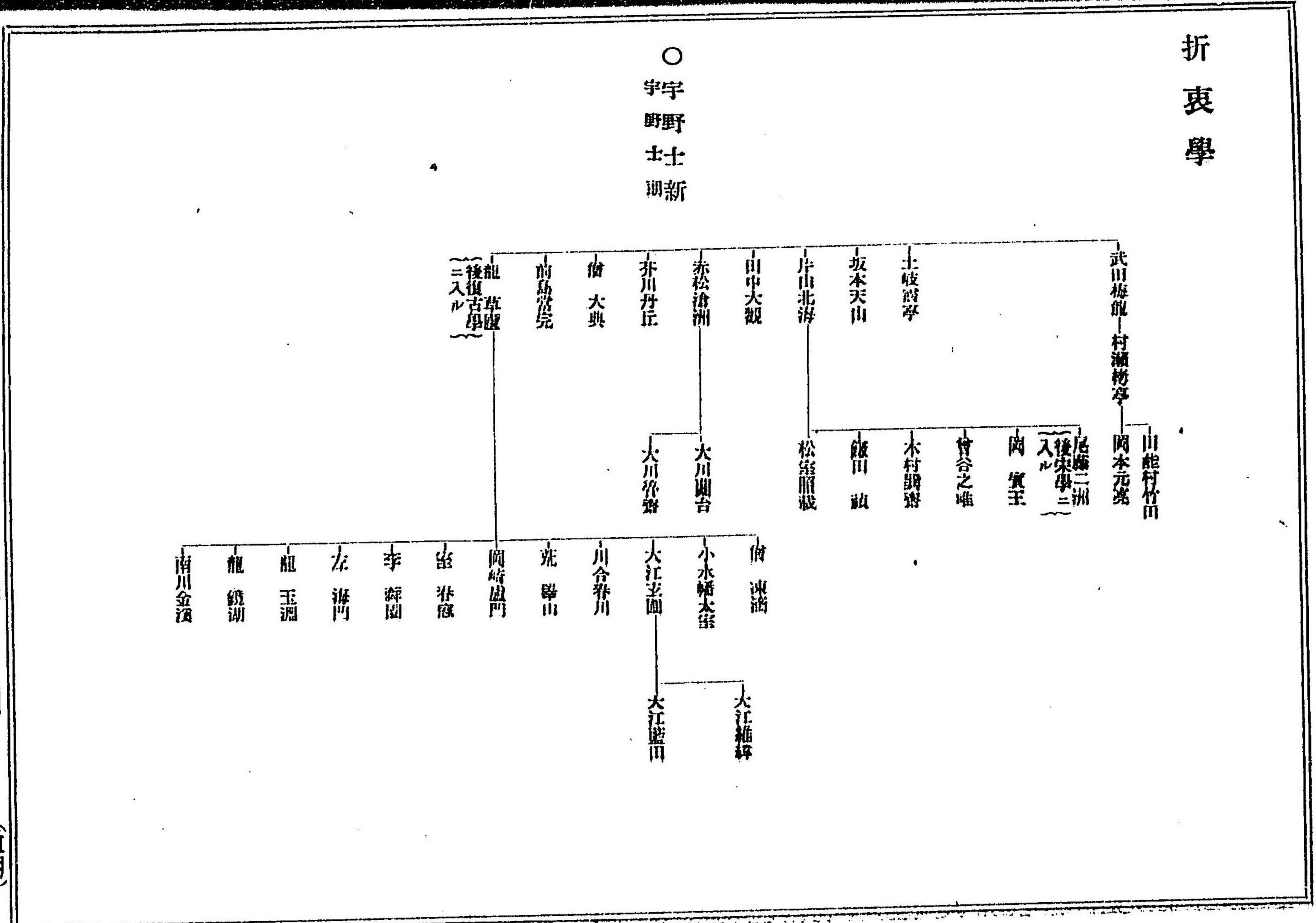
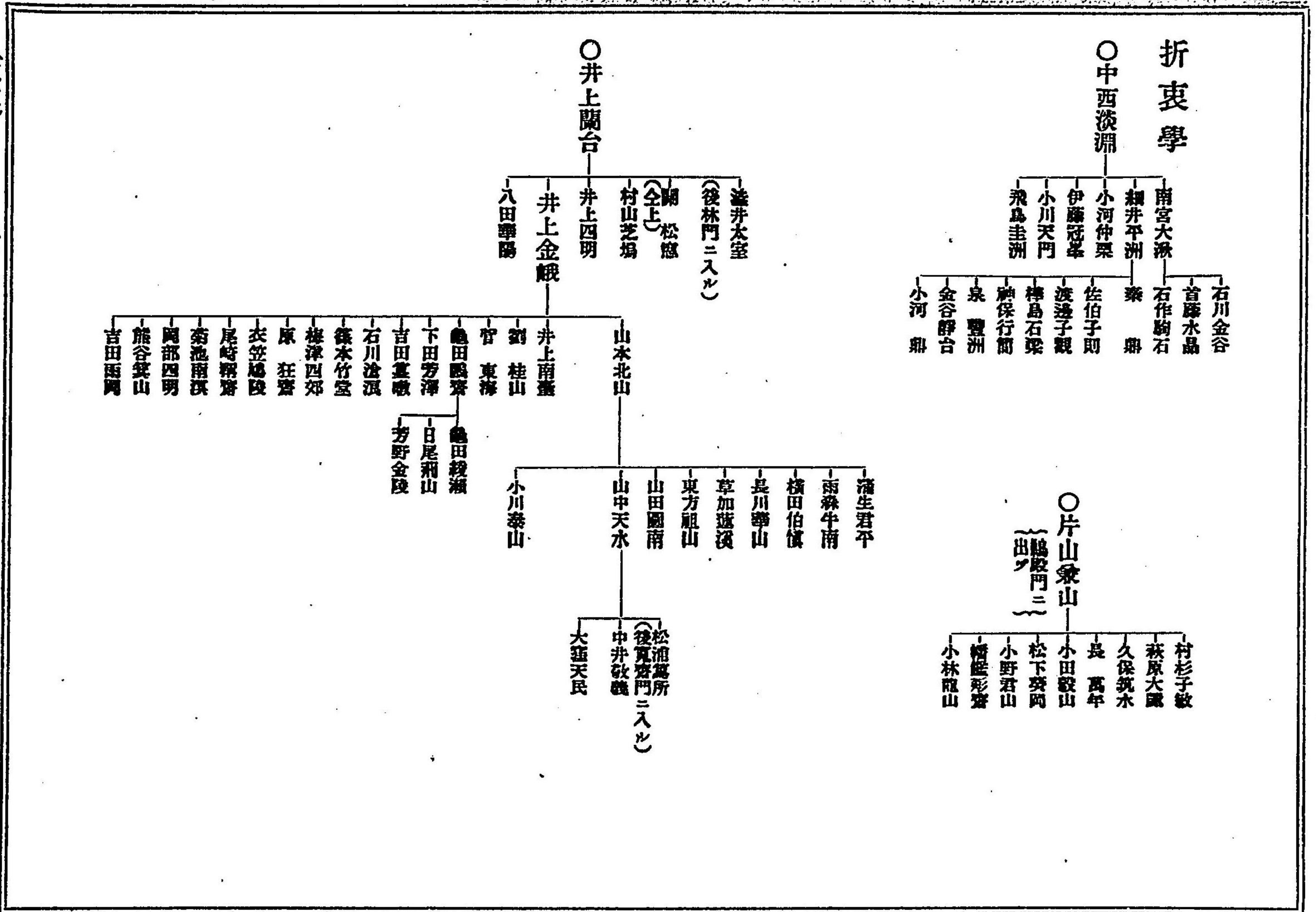
(四〇) 系圖 第拾五

山崎派



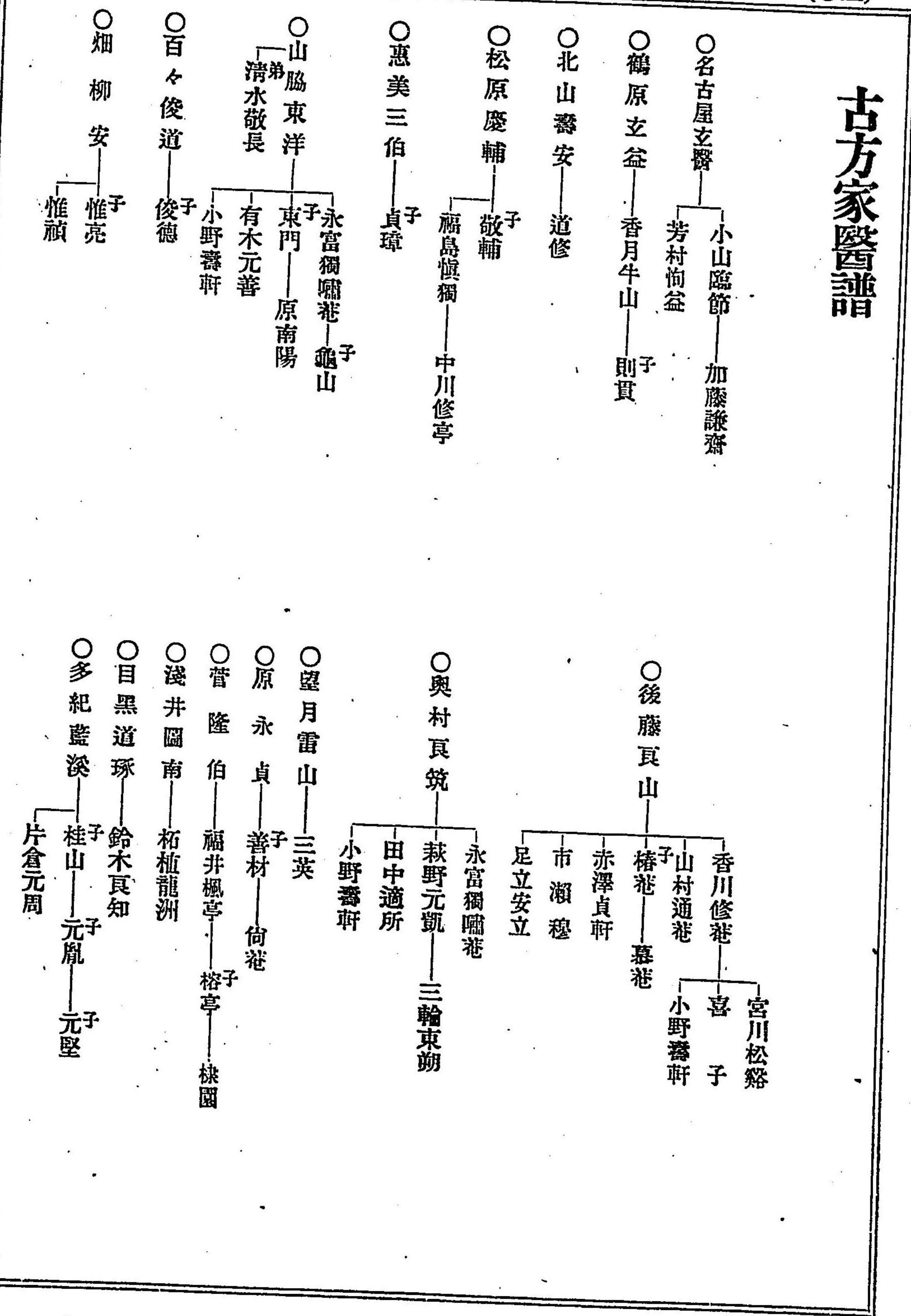
(四一) 系圖 第拾五





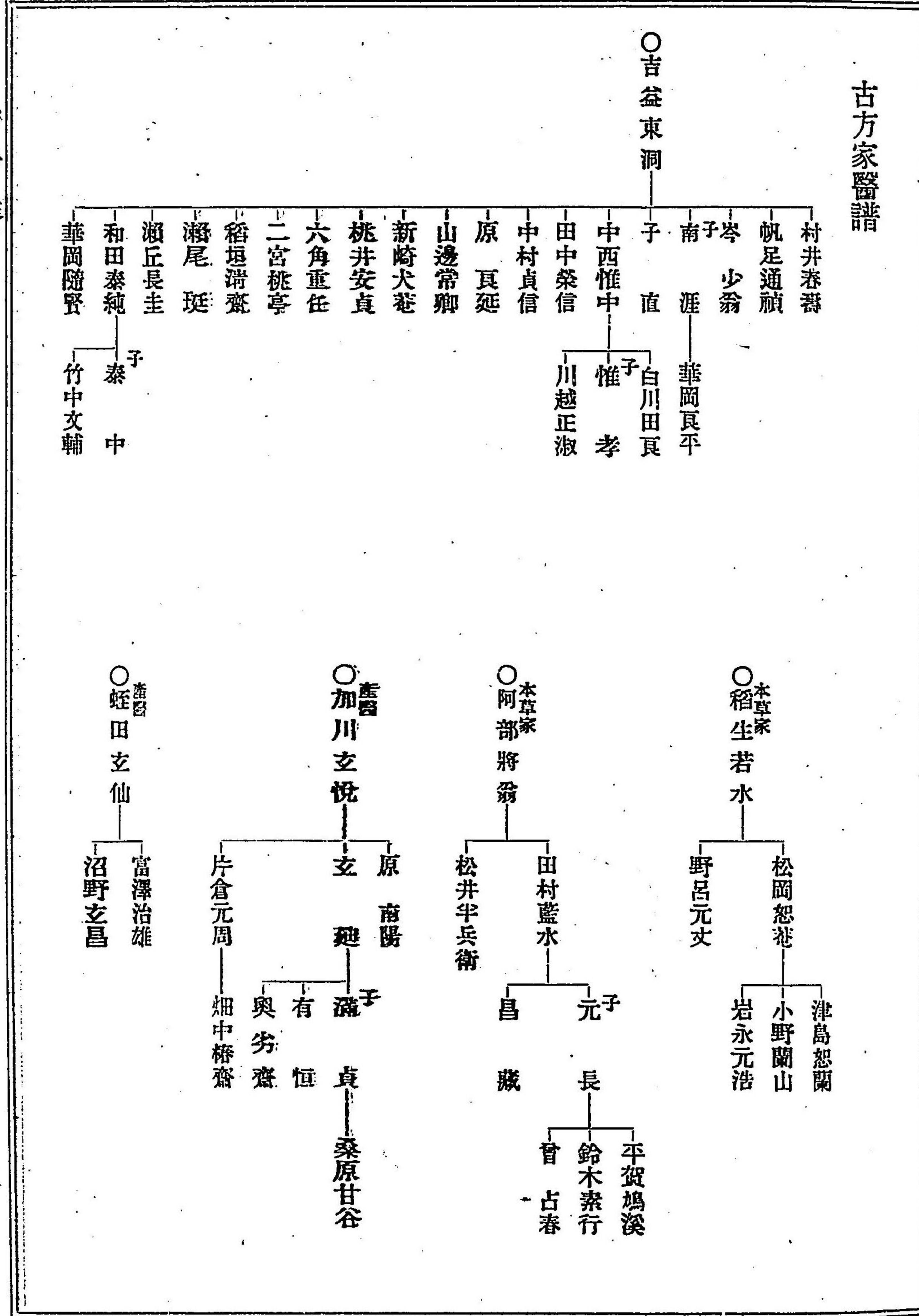
古方家醫譜

古方家



古方家醫譜

古方家



二刀 政名流
二天流

○宮本武藏政名—二刀鐵入流青木城右衛門金家

吉岡流

○祇園藤次吉岡憲法
○鬼一法眼流吉岡憲法

將監鞍馬流

○大野將監

願流

○松林佐馬助

諏訪流

○方波見備前守

京流

○前原備前守

源流

○木曾庄九郎

小田流

○小田讚岐守孝朝—讚岐守治朝—小田應變流

神明無想東流

○東下野守平元治

拔刀中興祖林崎甚助重信—拔刀田宮流田宮對馬重正

對馬長勝—無形流

○門人長野無樂齋權露
○拔刀一宮流一宮左太夫照信
○上泉孫次郎義胤

無明流

○石田伊豆守

念流

○上坂半左衛門安久—中山角兵衛家吉—飯野加右衛門宗正

東軍流

○東軍坊

川崎鑰之助—五世孫川崎二郎太夫—高木甚左衛門
衣斐丹石入道—飯沼牛齋—太郎

丹石流

自源流

○自源坊—瀬戸口備前守

射術之部

貫心流

○穴戶司箭家俊—河野大内藏道昭

拔刀一傳流

○九目主水正

拔刀伯耆流

○片山伯耆守久安

○柳生克己流

○神道流—心形刀流—柳剛流

○宮田流—無海流

○無限流—大束流

馬術之部

○大坪流—上田流佐々木流

○八條流

○新當流

○新八條流

槍術之部



○鎌寶藏院流—下石派旅川流—中村派高田派

○木下流

○穴澤流薙刀

○先意流薙刀

○無邊流—山本無邊流

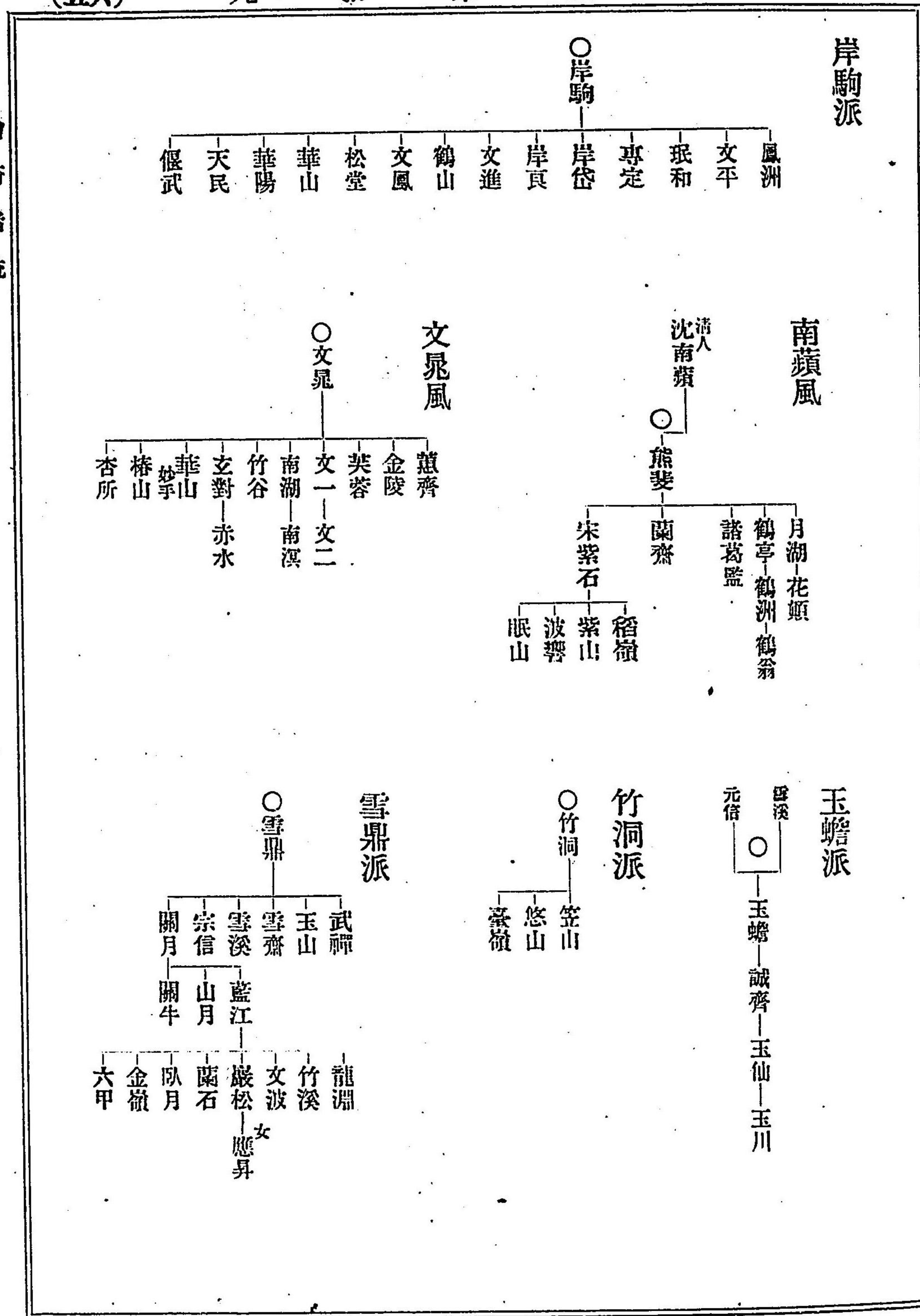
○建孝流—虎尾流田邊流

○富田流—中根流打身流—佐分利流

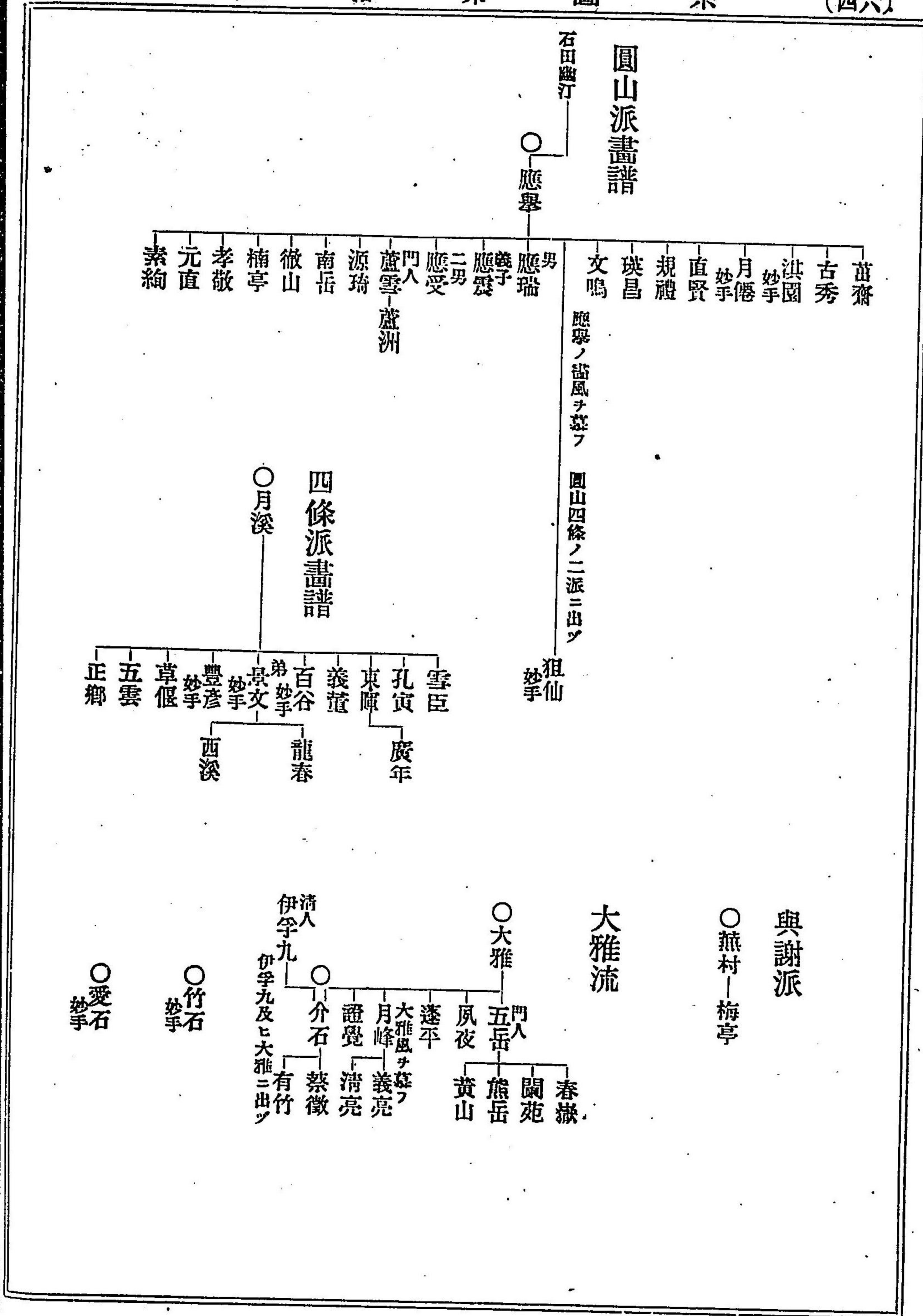
○神道流—本間流樫原流—本心鏡知流—一中派

○大島流—種田流

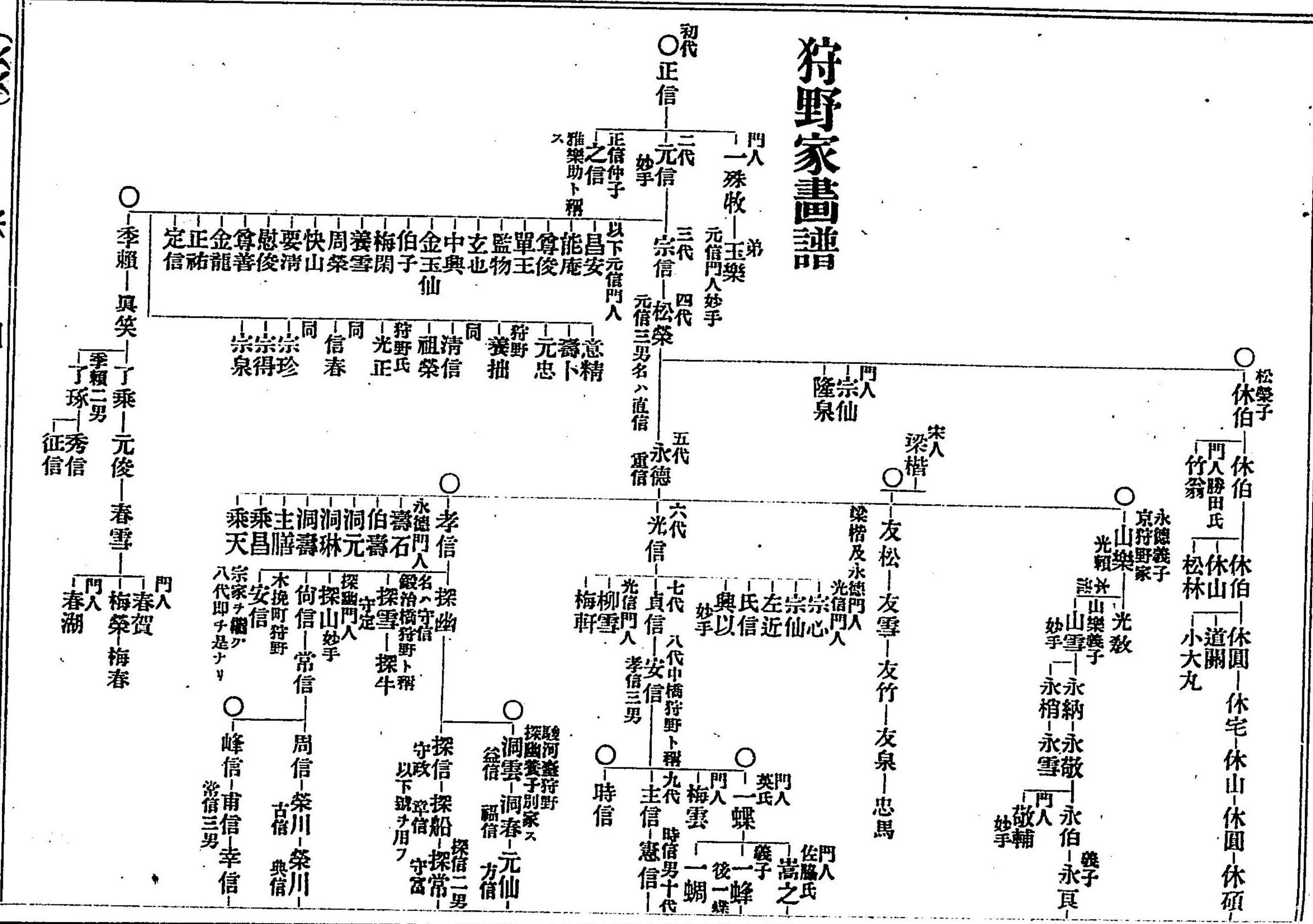
繪畫諸流



繪畫諸流

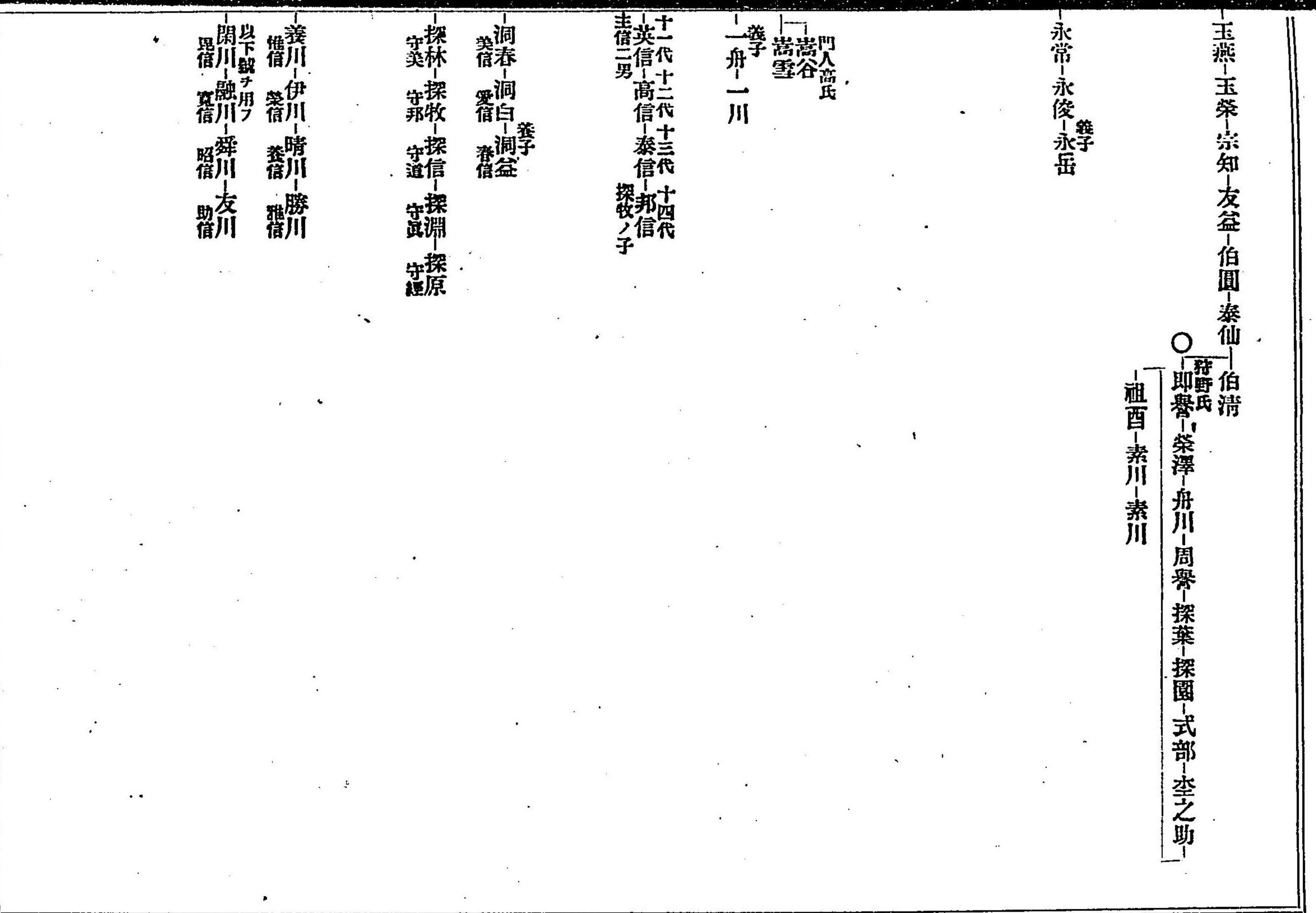


狩野家畫譜



(六六) 系圖第拾九

系圖第拾九 (七六)



系圖第拾九 (七六)

刀劍師系圖

(八六)

備前一流系圖

○亥成—友成—介成—友安—友則—介光—友成—助友—助秀—助近—行秀

右同斷

○倍房—高平—高包—言氏—助平—光宗—國總—貞直

○包平—行光—末行—永富—貞依—宗依—有清

備前國長船物之系圖

○近忠—光忠—安忠—景秀—景則—景安—長則—長重—爲宗—女子—義秀—長義—長清—康光—忠近—忠久—次光

長光—義光—景光—兼光—友光—師光—盛光—盛重—盛久—兼安—有光—忠光—清光—勝光—義光—吉光—光弘—光久—經家—基光—基政—長光—久光—忠光—貞光—光景—重光

信濃多藝鍛冶系圖

○兼定—兼定—兼定—兼常—兼元—兼貞—兼貞

美濃赤坂鍛冶系圖

○忠義—忠香—泉水—國長—國長—國光—長廣—廣長—兼光—兼角—下坂

美濃國西郡系圖

○外藤—長基—女子—壽命—壽命—壽命—宗吉—宗次—助宗—宗吉

大和國當麻系圖

○國行—友清—友綱—友長—友行—未利—利光—有光—俊行—有法—師次—有俊—女子—信長

大和尻懸系圖

○則弘—則長—則長—則長—女子—則貞—弘村

大和手搔系圖

○包永—包永—包利—包行—包俊—包真—包持—女子—包定—包清—包次—包貞

大和保昌系圖

○國光—貞吉—貞宗—貞清—貞光—貞興—女子—貞興

平安城物之系圖

○長光—光長—女子—長吉—吉永—吉則—女子—吉則—吉廣—吉廣—吉次—吉次—重次—定家—長吉

山城國綾小路物之系圖

○永昌—定利—女子—介定—末行—定家—家俊—女子—忠家

(九六)

拾貳第圖系

系 圖 第 貳 拾

備前葦田郡物之系圖

○助國兼行「一乘國吉國乘」
兼安兼行兼光兼俊

和泉和田加賀四郎系圖

○正清正清「政清」
資正資次
○清常常清正清

京三條宗近一流系圖

○宗近吉家「在國」兼永國永

粟田口物之系圖

○國賴國家國友「則國」友末玉
國安國清「有國國綱國弘有國國光」
系國久元
吉光延光「吉正」國純賴家
國定正次正國國真
景長景長景長

備前福岡一文字

○延房「宗吉」吉家「吉平吉守」家俊吉用次家吉友
依安乘安家忠則依助依
延正吉房吉房吉元

系 圖 第 貳 拾 (三七)

備前福岡一文字

○守近「宗家守家」家助
家安真守宗恒守俊經家

備前國物之系圖

○雲生雲同「雲重」
女子雲次雲次

備前大宮物之系圖

○國盛助盛「盛助盛恒盛次盛景」景政
次盛助盛
女子盛則

相摸國鎌倉物之系圖

○國宗國光國重國廣國泰「正宗」
廣光義弘金重國重兼光長義則重左衛門兼氏盛高
貞宗秋廣「吉廣」
秋廣廣光女子正廣廣正隆廣助廣
元重重廣國光

右相傳之系圖

○延真延房延正國真國宗國重國次行光正宗貞宗秋廣

古備前國物之系圖

○正恒「正次正真村守常保真則久則」
正恒近包近村真恒

(四七)

系圖第貳拾

右同斷

○有恒正恒 吉宗宗永 保弘 眞忠 眞定 直綱
恒次 恒遠 遠近 遠政 遠也

古備前一流

○國弘守包 助高 國續 包永 包助 高安 國吉 守光

右同斷

○是助 永包 吉包 助永 基包
助包 助平 貞利 光包

備前福岡一文字系圖

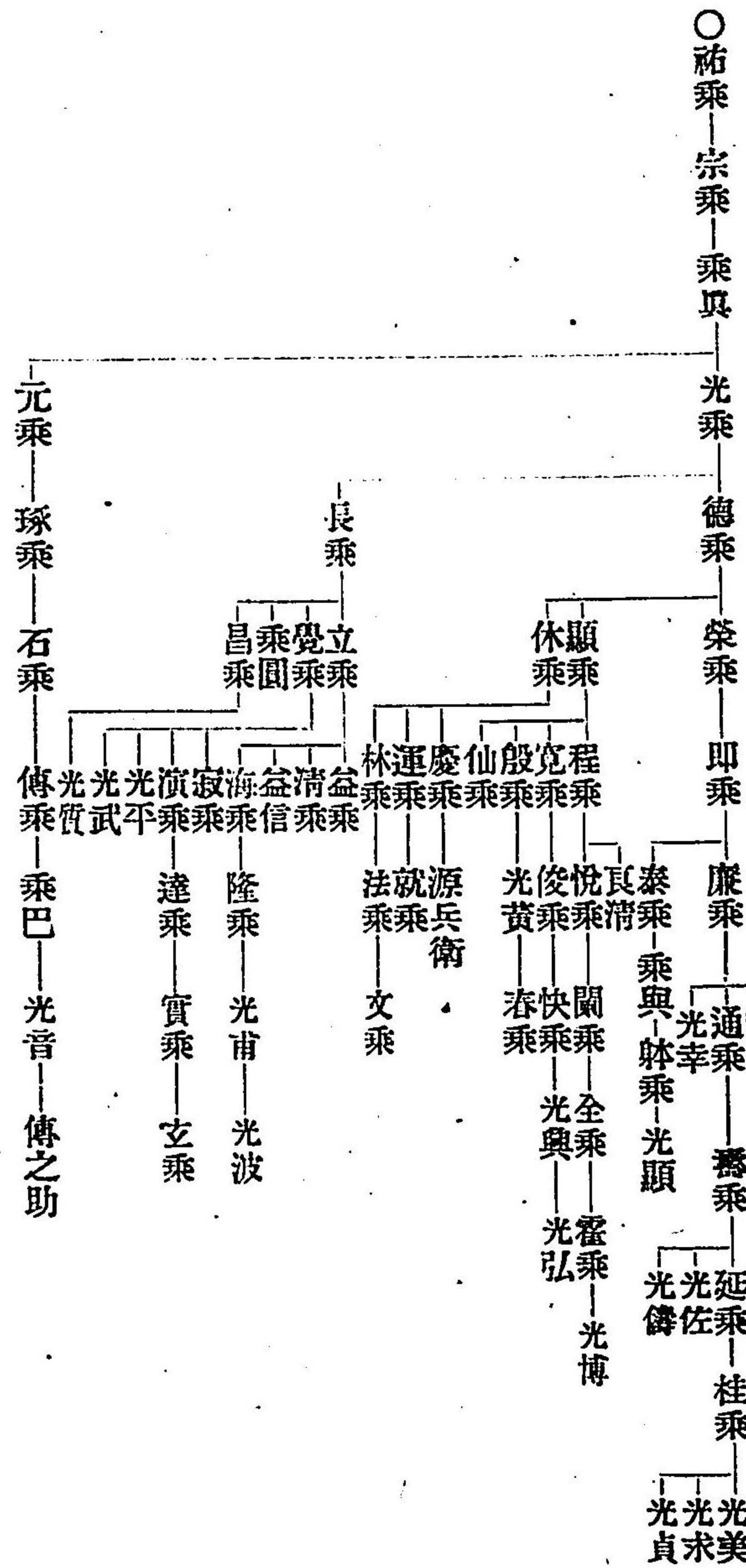
○定則 則宗 助宗 成宗 助房 助義 助茂 助房 助則 助吉 助光
安則 則包 歡喜 長則 長包

備前福岡一文字系圖

○助行 助延 行國 久宗 助貞 行高 助村 助久 助守 助秀

金工系譜

後藤家系圖



吉岡氏系圖

○重次 長次 宗次 近次 滿次 恒次 定次
庄左衛門 久次 重長 重廣 易次 清次 興次 照次

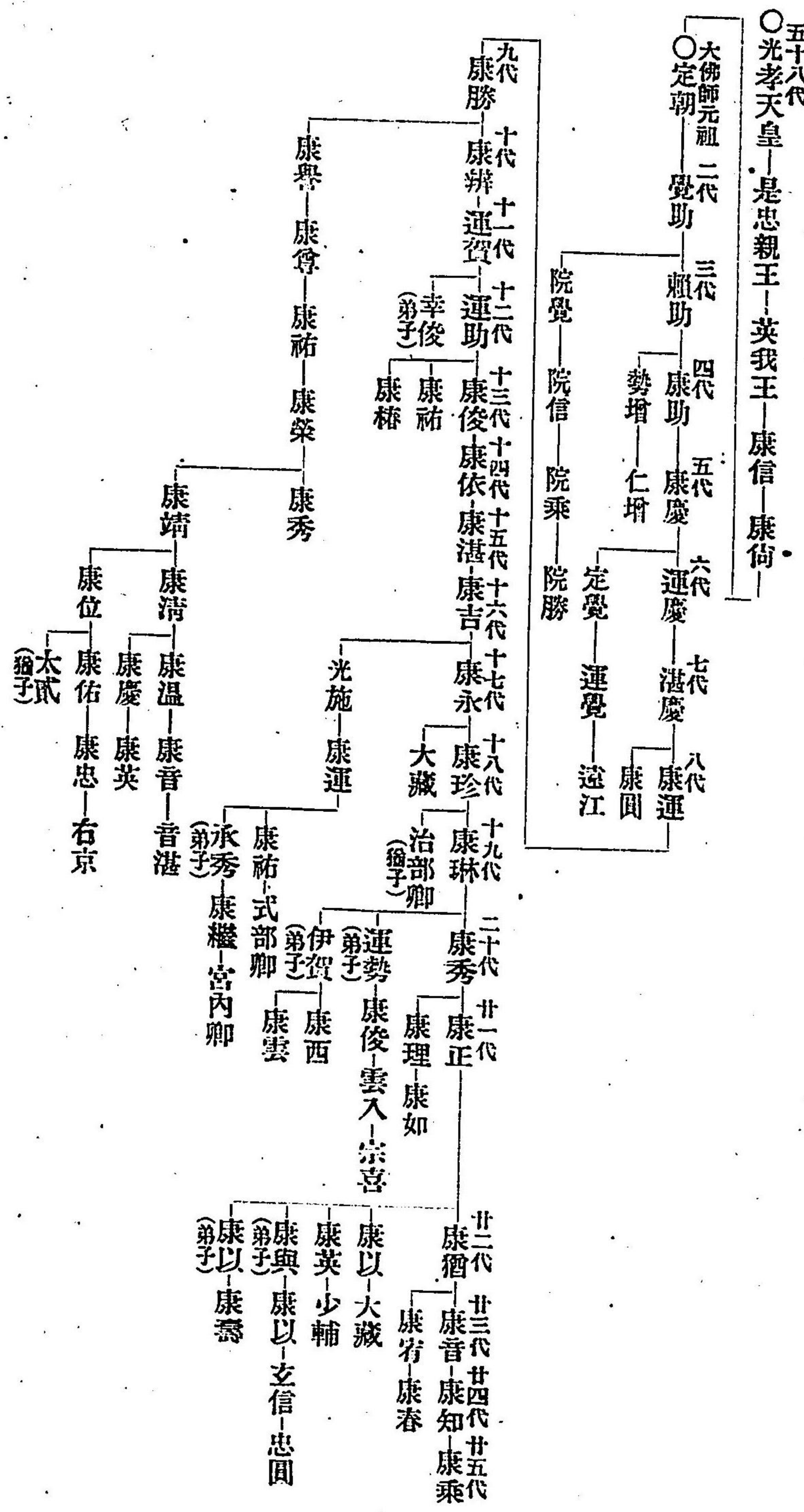
平田氏系圖

○道仁 就一 就久 重賢 就門 就行 就亮 春就

系圖第貳拾壹 (五七)

佛工系圖

(六七)



貳拾貳第圖系

相撲

大關

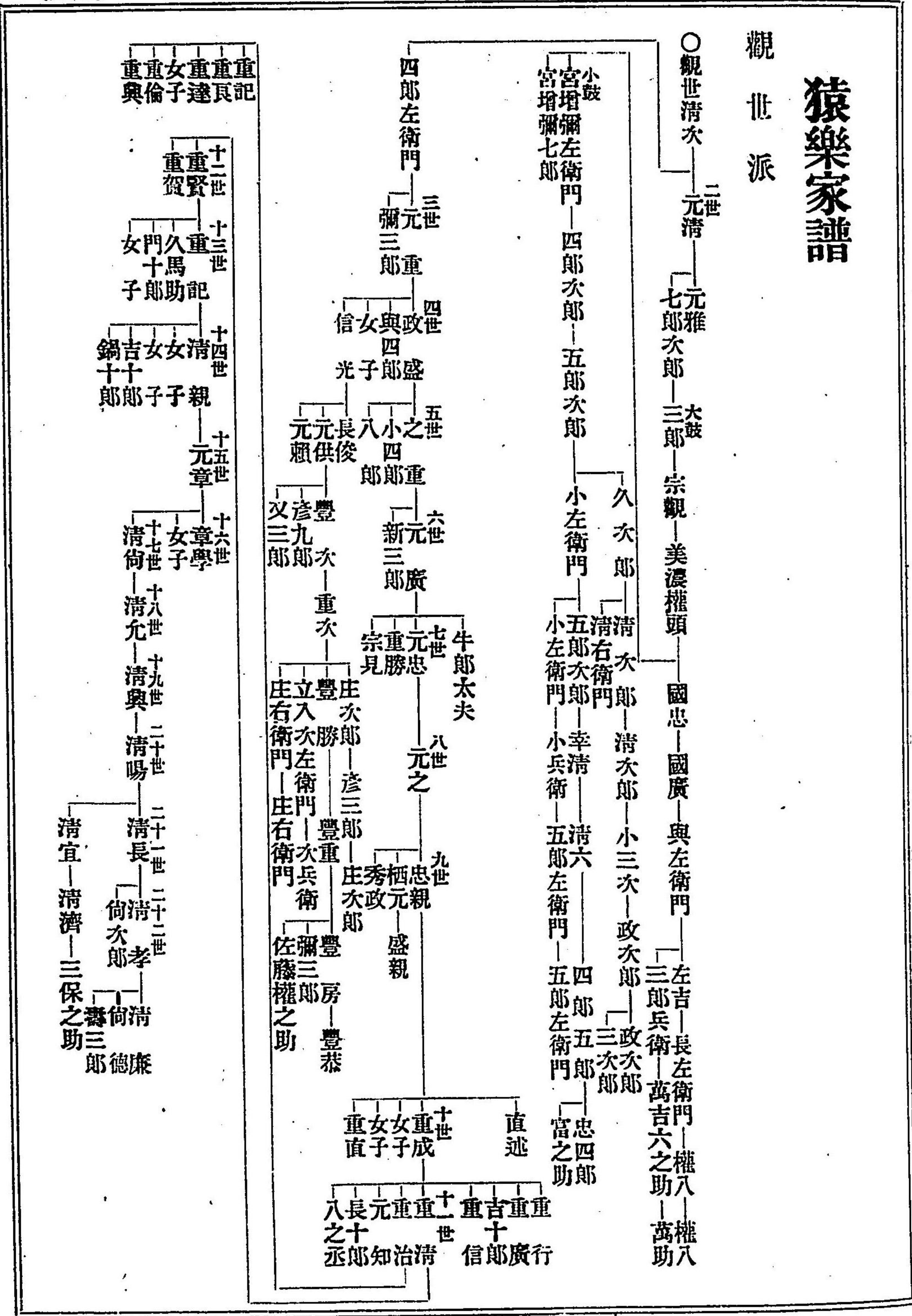
(○印ハ横綱)

參拾貳第圖系 (七七)

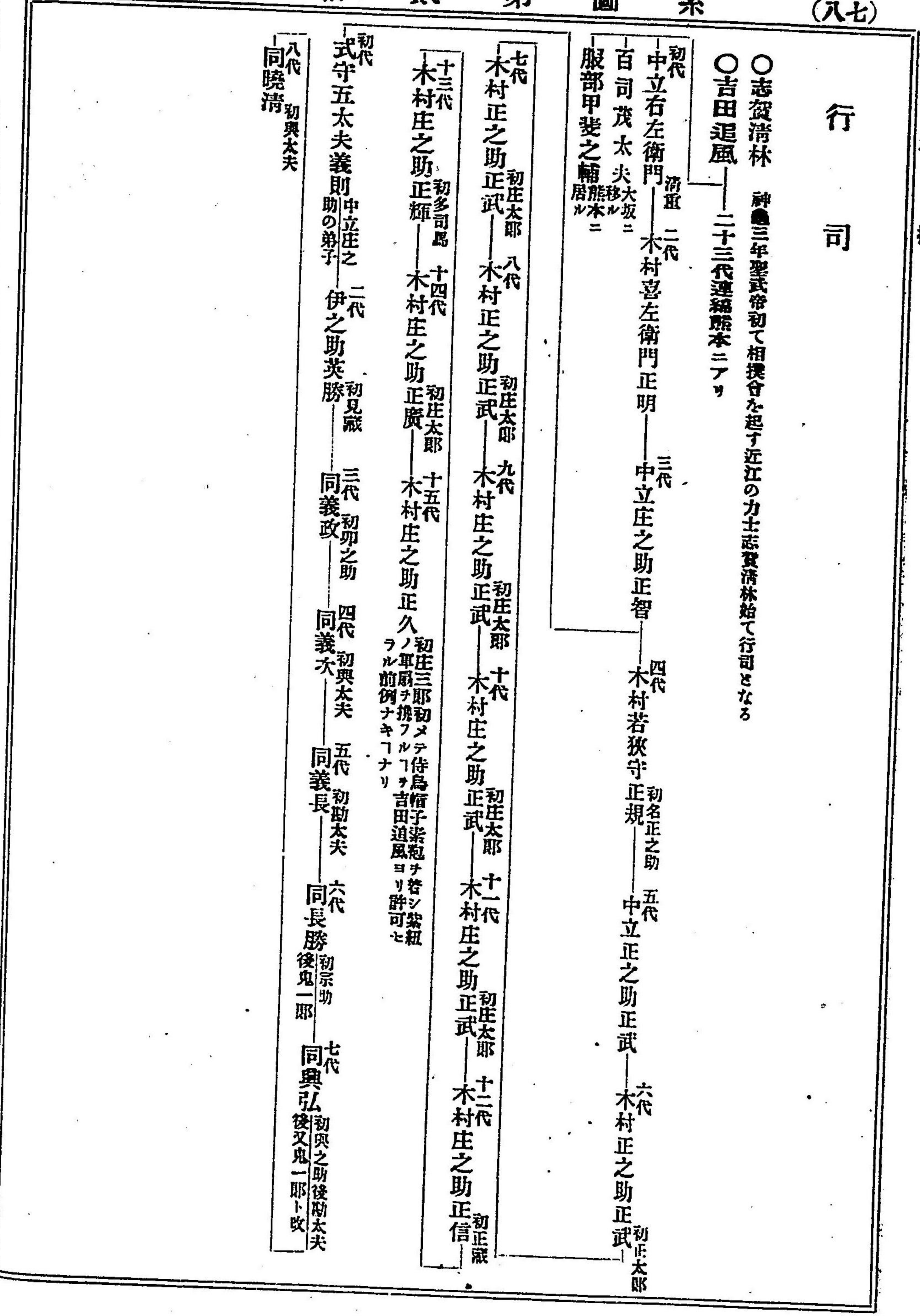
- 明石志賀之助
- 兩國梶之助
- 菅谷勘四郎
- 比良夕嶽志賀右衛門
- 鬼方島礪右衛門
- 今雲灘右衛門
- 鷲ヶ濱音右衛門
- 廣原海濱右衛門
- 吹歸寅右衛門
- 鐵石城五郎
- 千田川音松
- 谷風梶之助
- 陣幕島之助
- 鬼面山與一右衛門
- 玉垣領之助
- 緋威 力彌
- 武隈文右衛門
- 境川浪右衛門
- 境川浪右衛門
- 梅ヶ谷藤太郎
- 小錦八十吉
- 仁王仁太夫
- 御用木無次右衛門
- 大矢島新右衛門
- 駒ヶ嶽儀右衛門
- 源氏森繁右衛門
- 鷲海灘右衛門
- 四海瀉國右衛門
- 押尾川卷右衛門
- 錦木塚右衛門
- 千田川熊藏
- 源氏山綱五郎
- 小野川喜三郎
- 九國山新治
- 大岬丈右衛門
- 源氏山吉太夫
- 追手風喜太郎
- 鏡岩濱之助
- 雲龍 久吉
- 象ヶ鼻平助
- 楯山久三郎
- 大鳴門灘右衛門
- 山嵐嶽右衛門
- 大碓灘右衛門
- 箕島重太左衛門
- 鳴澤音右衛門
- 鷲ヶ嶽瀧右衛門
- 鍛嶽岡右衛門
- 鶴渡國右衛門
- 關ノ戸音右衛門
- 小ノ瀧定右衛門
- 山ノ井鷲之助
- 秋津風音右衛門
- 九紋龍清太夫
- 雷電爲右衛門
- 鉞 音五郎
- 四賀峯東吉
- 劍山谷右衛門
- 小柳 常吉
- 不知火光右衛門
- 綾瀬川三左衛門
- 西ノ海嘉次郎
- 八幡山定吉
- 白山新三郎
- 兩國市太左衛門
- 細石嵯峨右衛門
- 大木戸源太夫
- 繪島瀉灘右衛門
- 二荒山瀧右衛門
- 龍ヶ洞谷之助
- 市ノ上淺右衛門
- 鬼面山與一右衛門
- 有馬山瀧右衛門
- 不動山岡右衛門
- 鬼面山谷五郎
- 平石七右衛門
- 風風谷五郎
- 阿武松綠之助
- 不知火踏右衛門
- 猪王山森右衛門
- 鬼面山谷五郎
- 雷電震右衛門
- 劍山谷右衛門
- 大戸平廣吉
- 鬼勝象之助
- 丸山權太左衛門
- 北國官太夫
- 虹ヶ嶽仙右衛門
- 二所ヶ尾軍太夫
- 筑紫瀉増右衛門
- 木幡山森右衛門
- 大見崎音右衛門
- 白川志賀右衛門
- 荒馬大五郎
- 惠蘇ヶ嶽峯右衛門
- 玉垣領之助
- 柏戸宗五郎
- 柏戸 利助
- 稻妻雷五郎
- 秀山雷五郎
- 階ヶ嶽龍右衛門
- 陣幕久五郎
- 朝日嶽鶴之助
- 大達羽左衛門
- 大碓紋太郎

相撲

猿樂

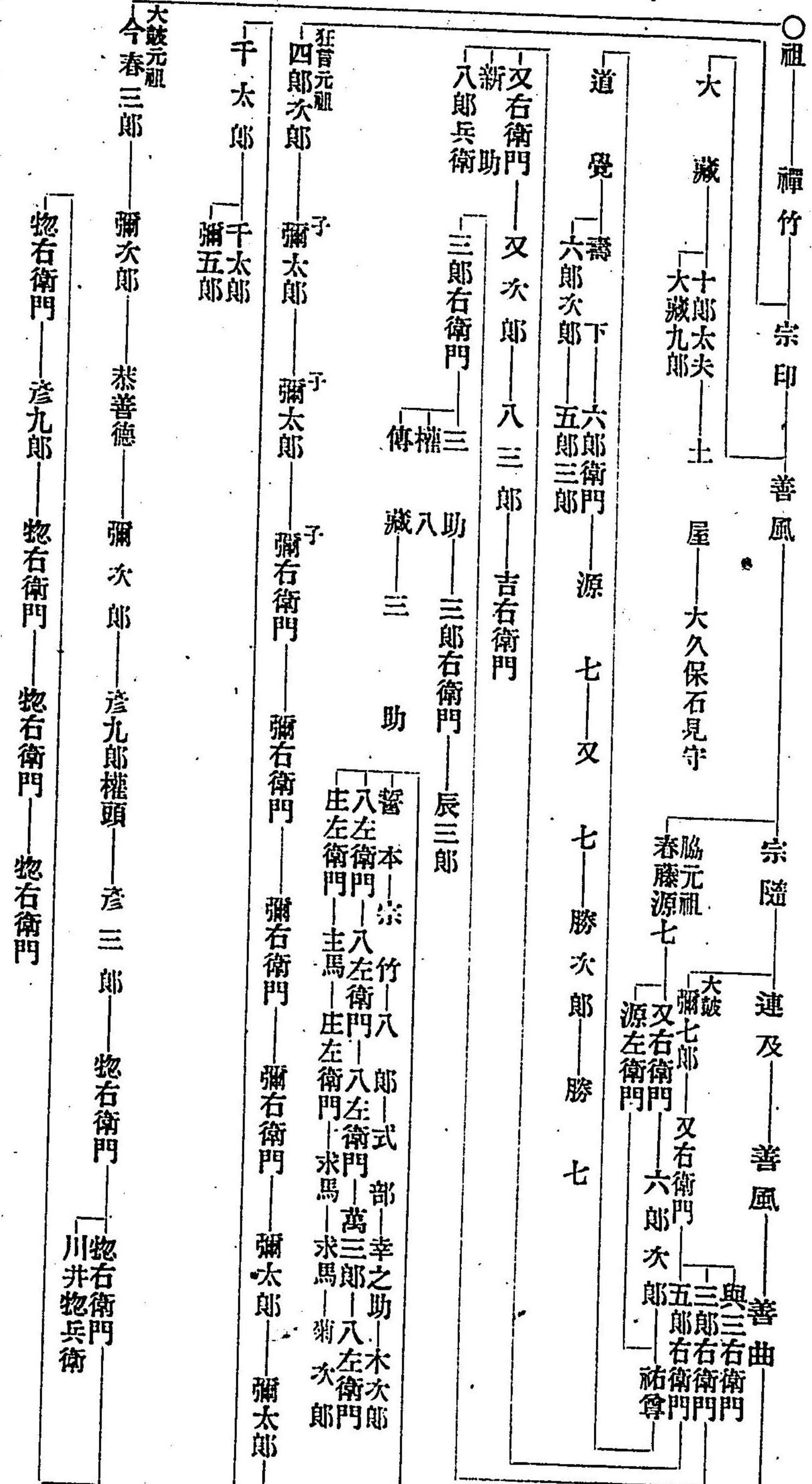


相模



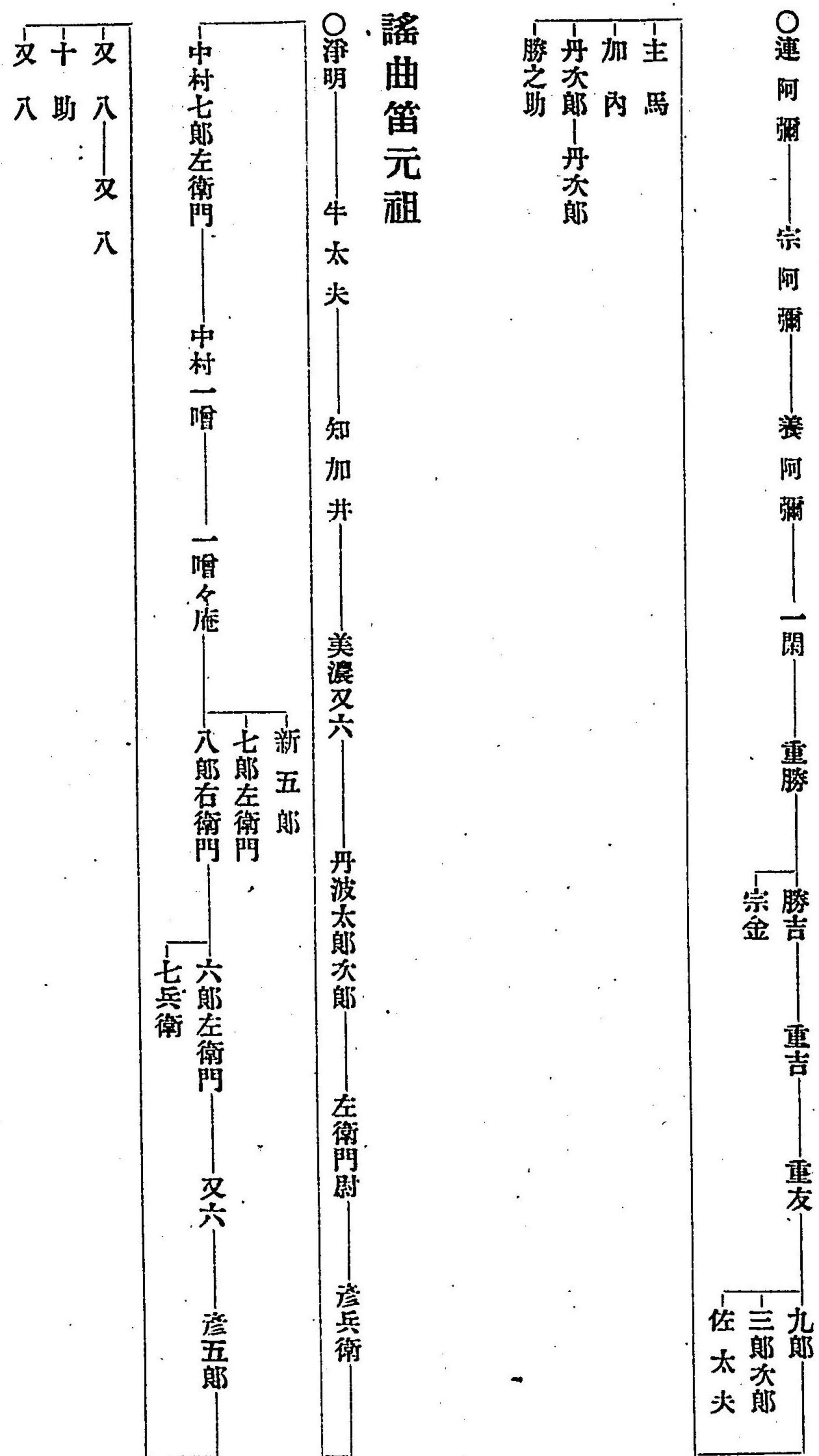
猿樂

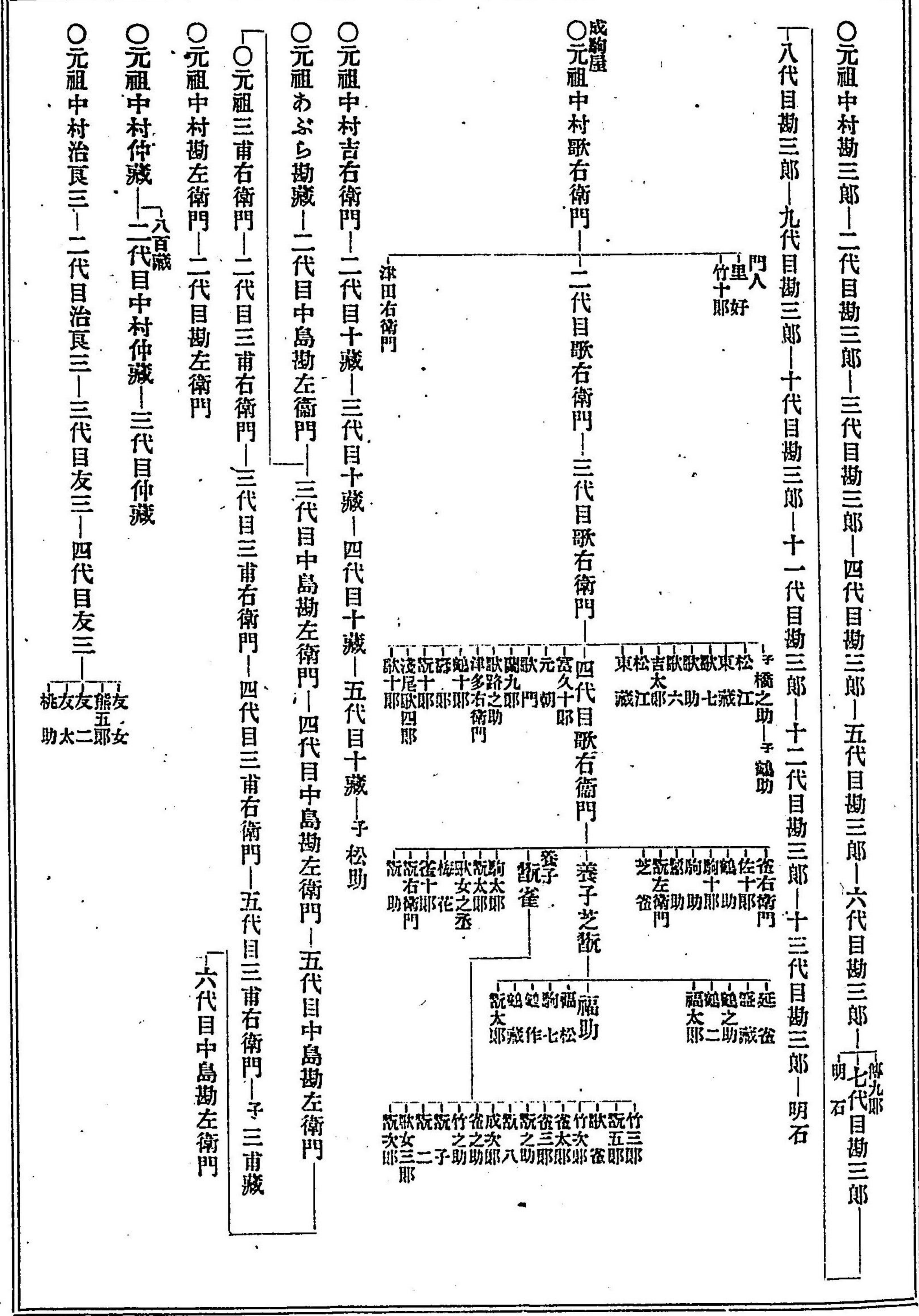
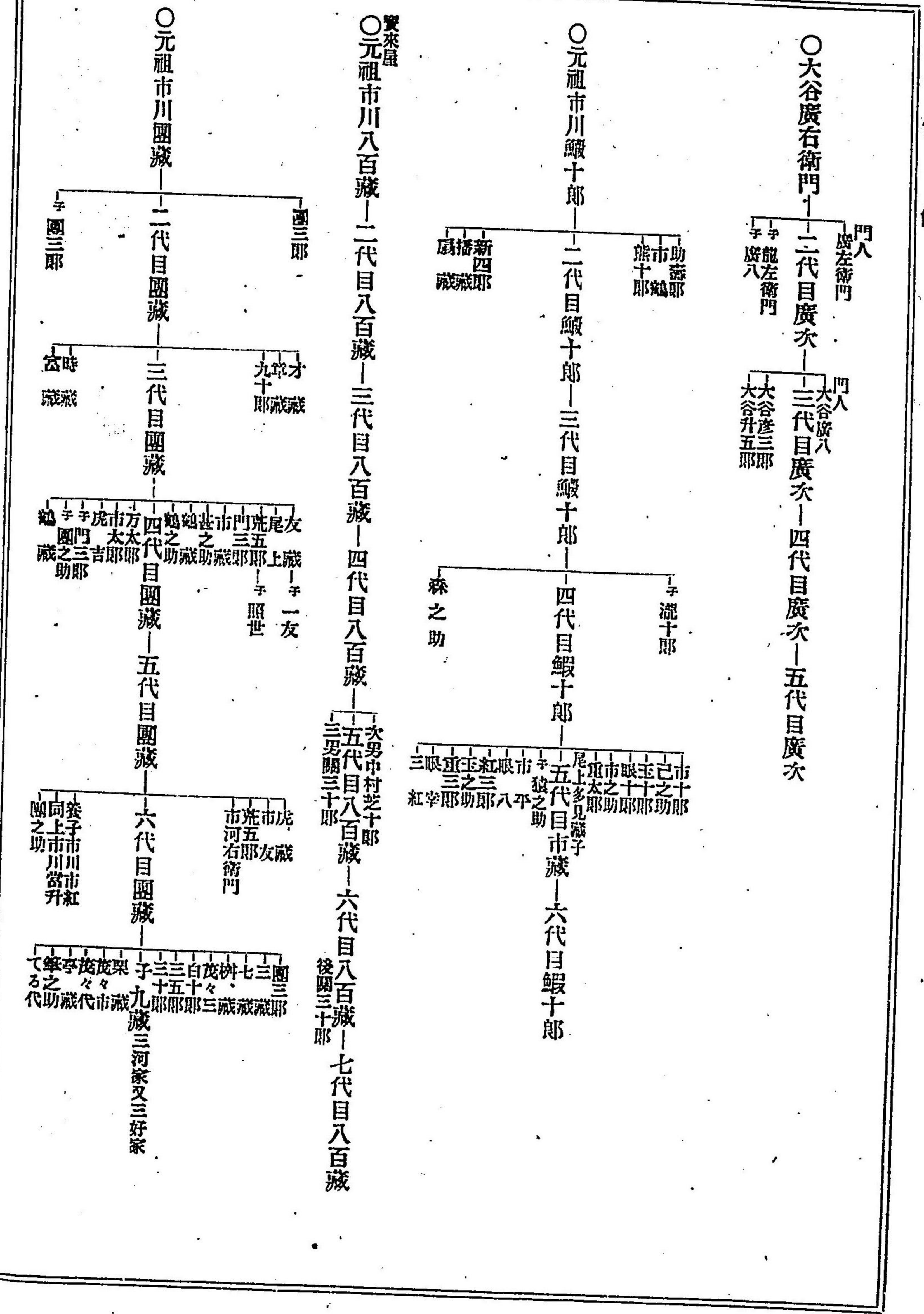
今春派



猿樂

寶生派





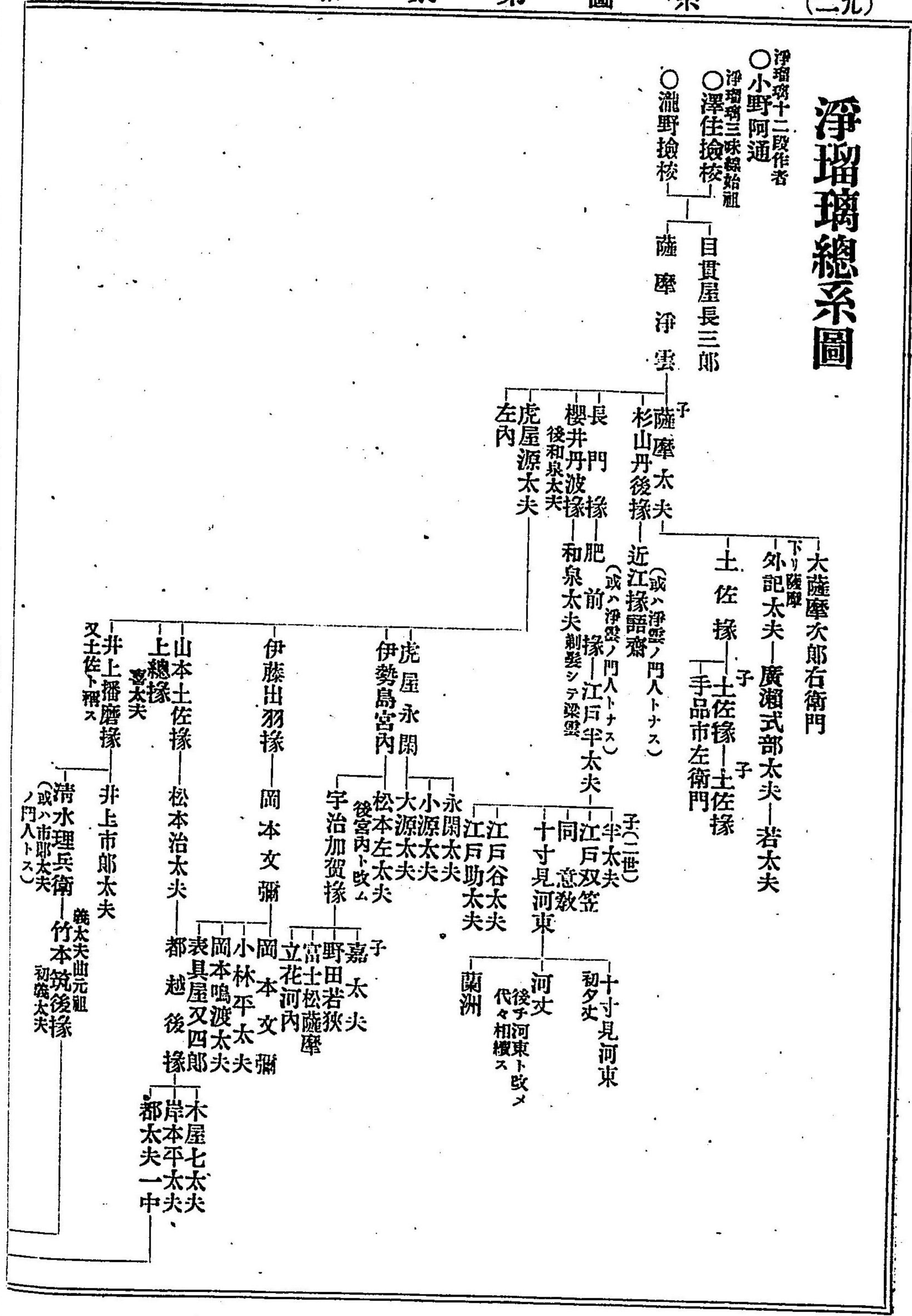
俳優

俳優

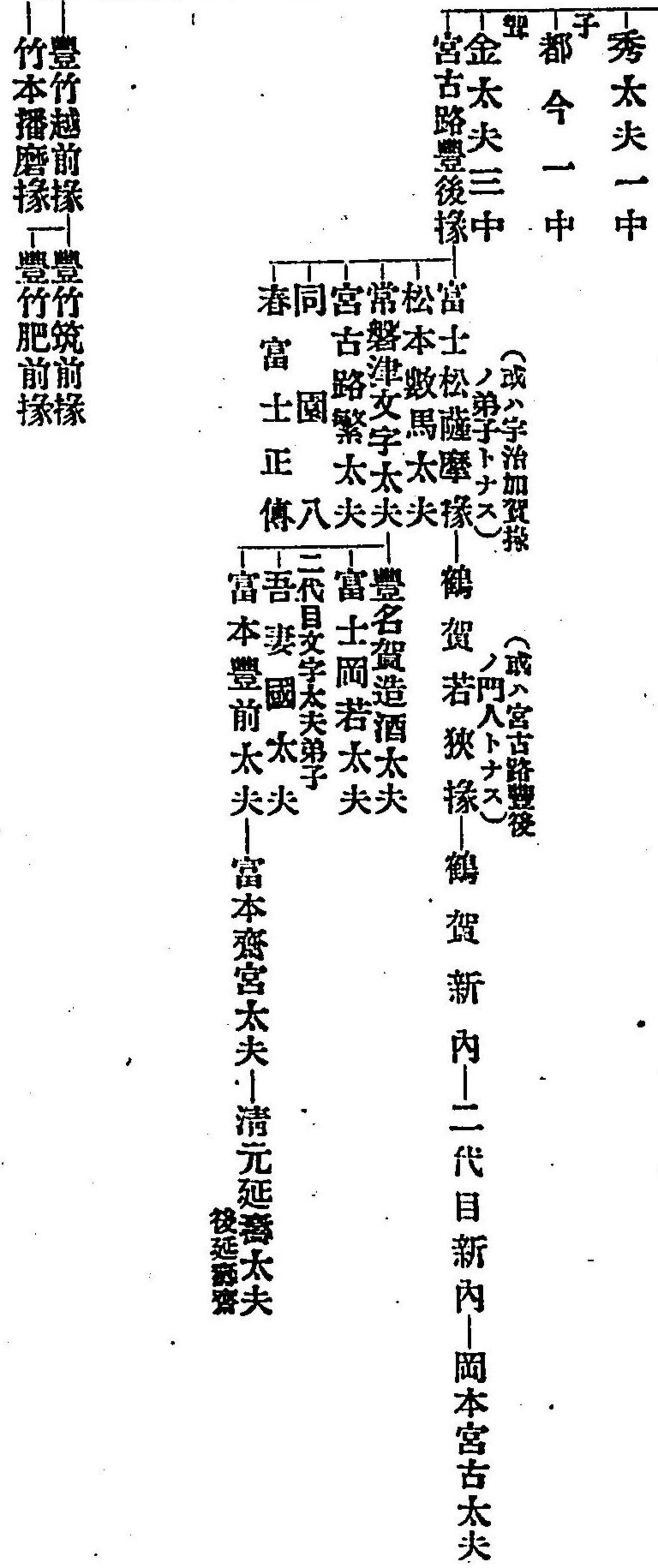
淨瑠璃總系圖

(二九)

系圖第貳拾七

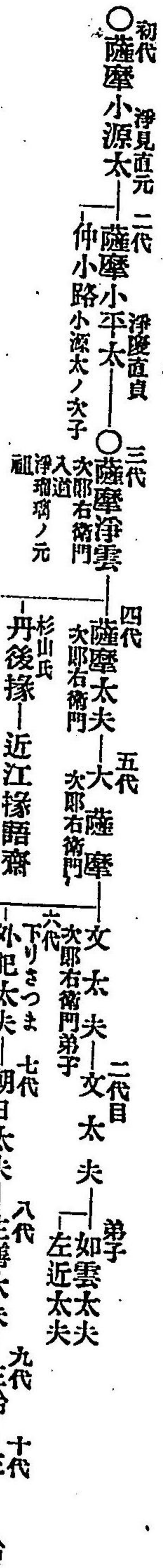


系圖第貳拾七 (三九)

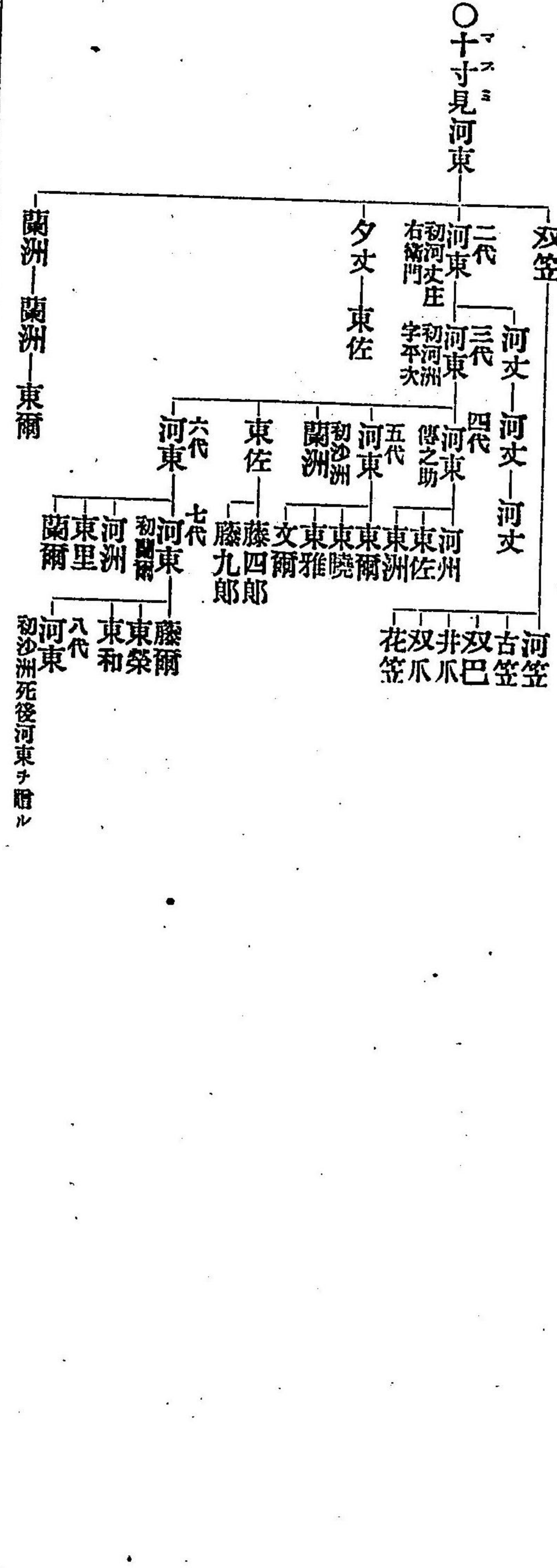


淨瑠璃

薩摩曲系圖

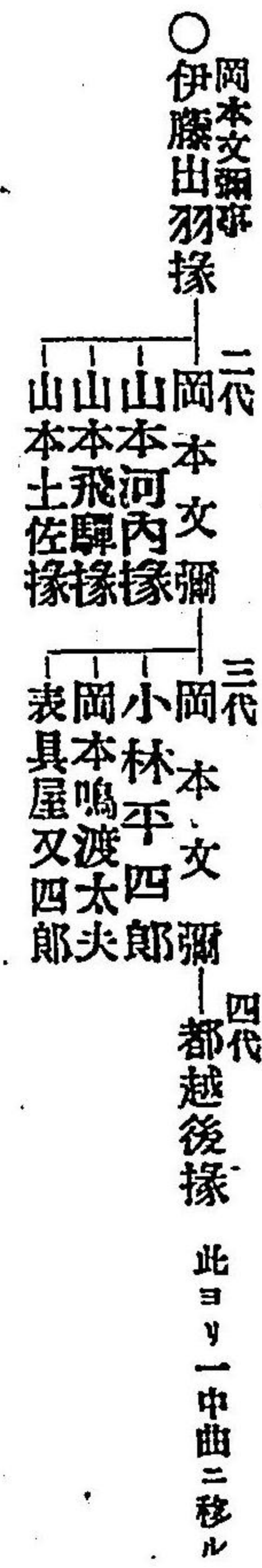


河東曲系圖

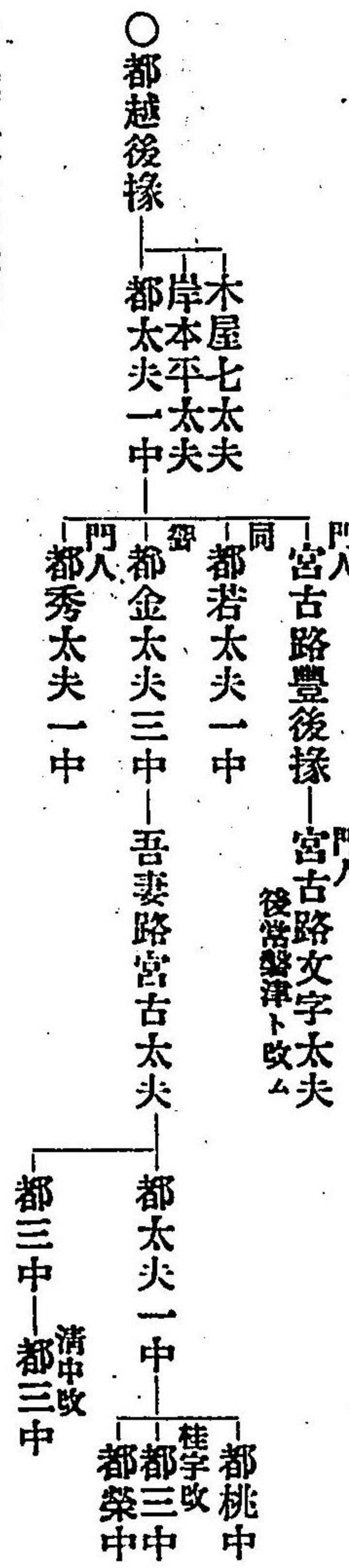


淨瑠璃

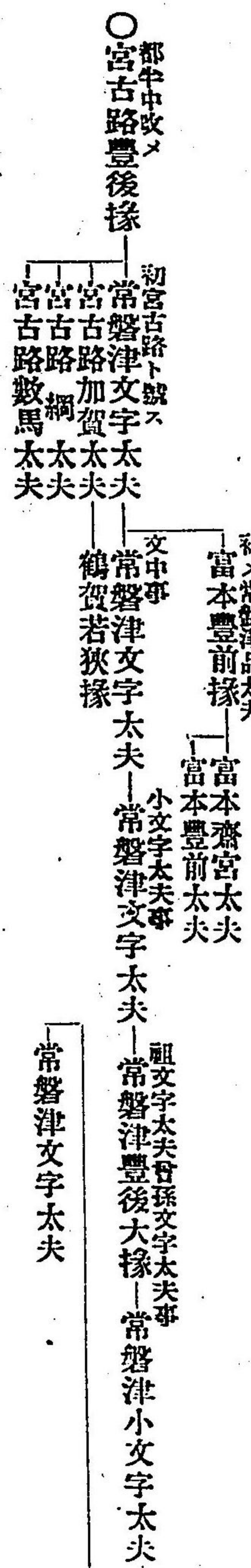
文彌曲系圖



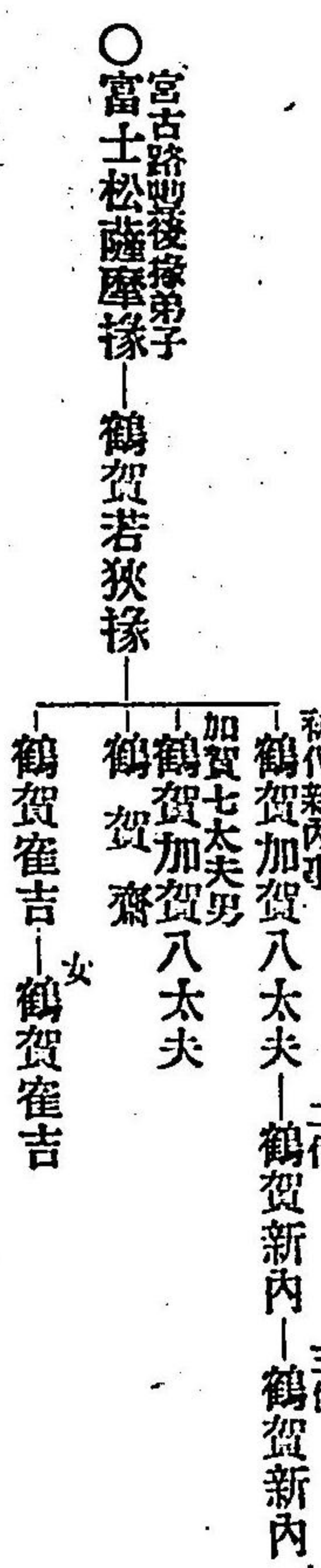
一中曲系圖



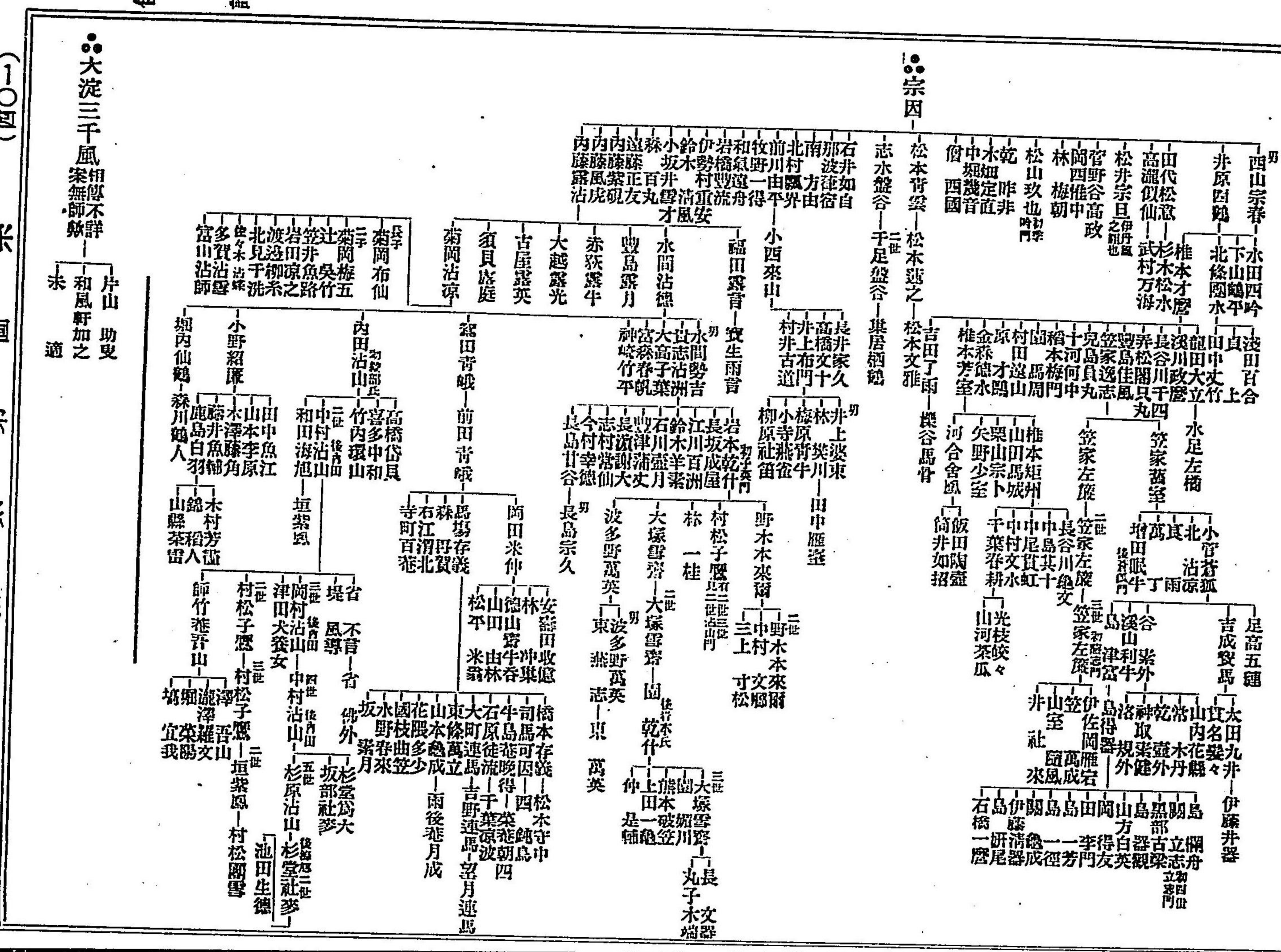
常磐津曲系圖



鶴賀新内曲系圖



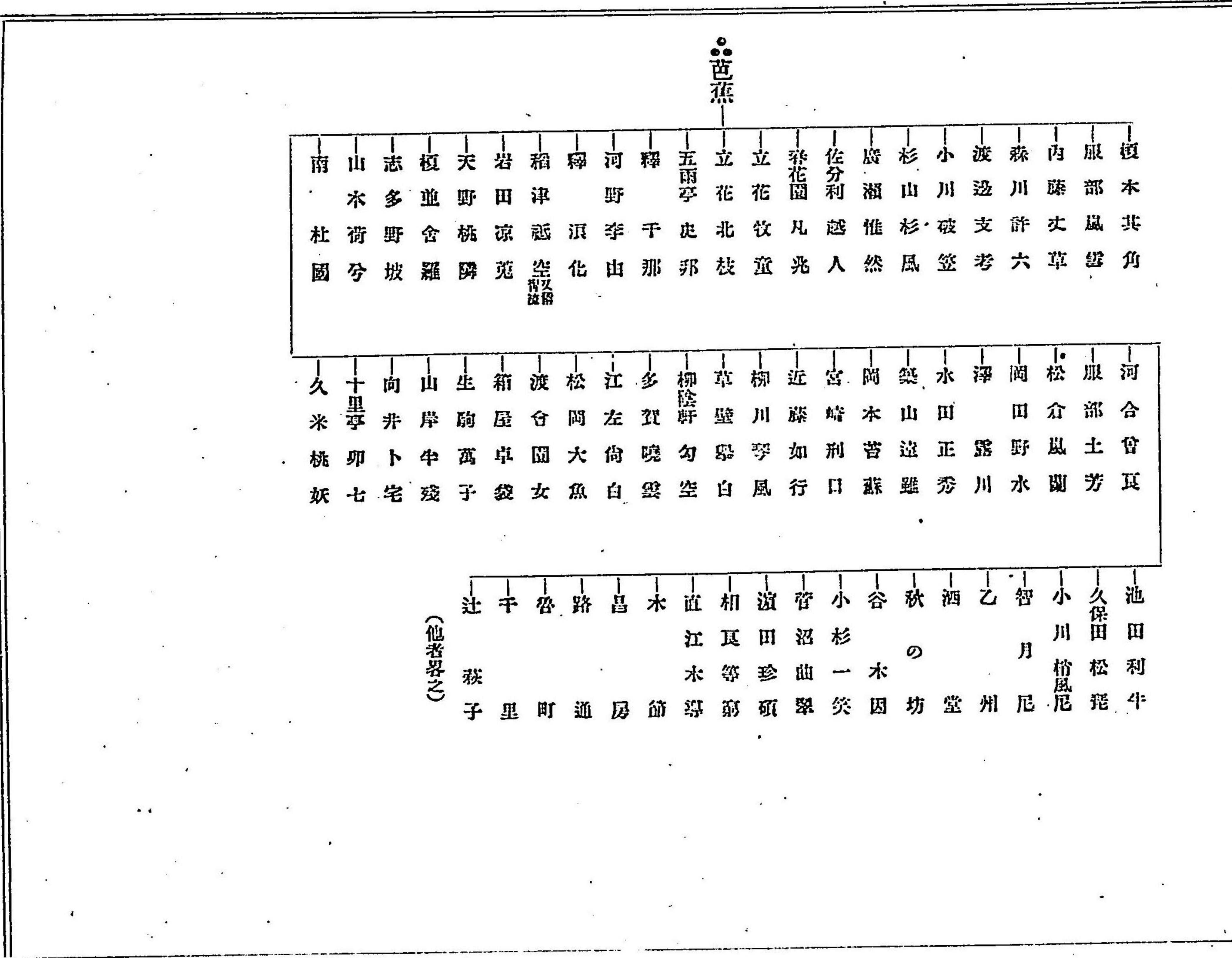
談林派傳系



系圖第貳拾九 (四〇一)

大淀三千風 和風野加之 未適

芭蕉傳系

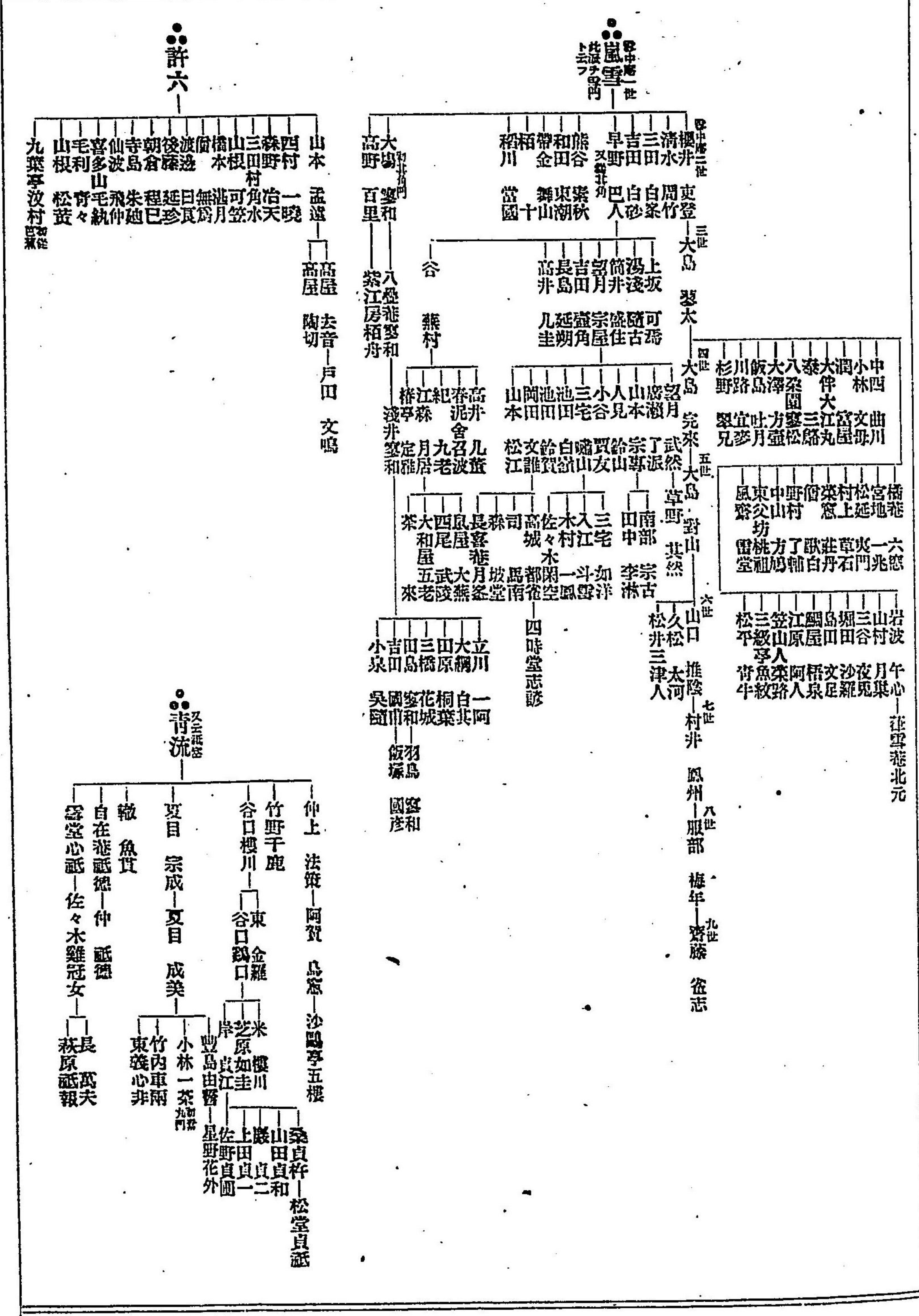


系圖第貳拾九 (五〇一)

(他者界之)

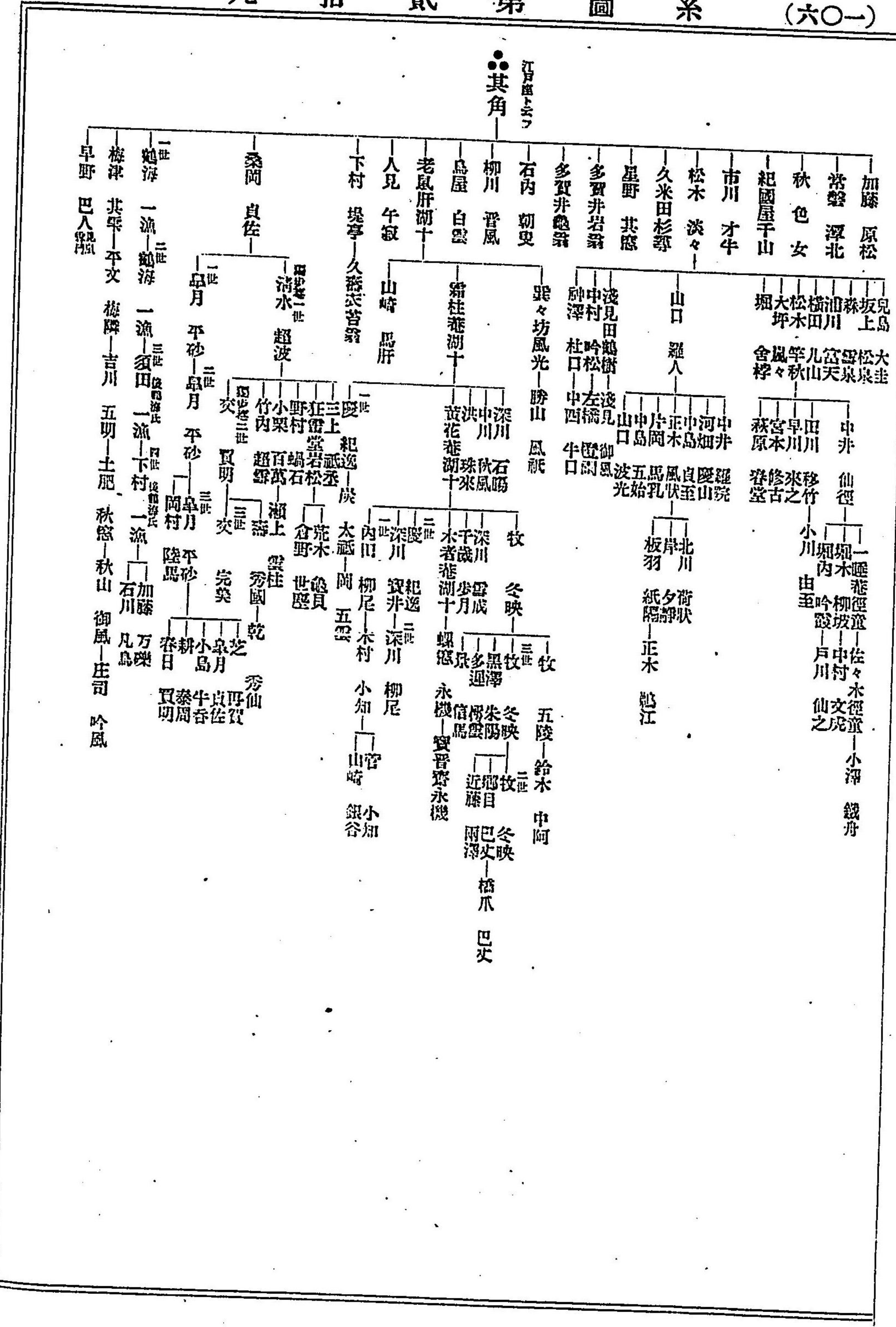
系圖第貳拾九 (一〇七)

俳諧



系圖第貳拾九 (一〇六)

俳諧



偉人年表(紀元自100至170)

紀元	100	110	120	130	140	150	160	170	180
年號									
天子							安寧天皇		
宰相							出雲色命		
將軍									
執權									
將士									
學者									
名僧									
醫師									
畫人									
俳茶人及									
和歌學人及									
武術									
俳優									
浮瑠璃									
戲作者									
金工									
謠曲									
紀元	100	110	120	130	140	150	160	170	180

大日本日人偉人年表 (一一一)

大日本日人偉人年表 (一一一)

紀元	190	200	210	220	230	240	250	260	270	280
年號										
天子										
宰相										
將軍										
執權										
將士										
學者										
名僧										
醫師										
畫人										
俳茶人及										
和歌學人及										
武術										
俳優										
浮瑠璃										
戲作者										
金工										
謠曲										
紀元	190	200	210	220	230	240	250	260	270	280

偉人年表(紀元自100至170)

孝昭天皇
出雲色命
額世命

孝安天皇
出雲色命

偉人年表(紀元自四八〇至五六〇)

表年人偉本日大 (六一一)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	詩人	俳茶人及	和歌學者及	武術	俳優	浮瑠璃	職作者	吟工	歌曲	
四八〇																			
四九〇																			
五〇〇		開化天皇																	
五一〇			大臣大綜押命																
五二〇			大臣武建命																
五三〇			大慈命																
五四〇			伊香色雄命																
五五〇																			
五六〇																			

表年人偉本日大 (七一)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	詩人	俳茶人及	和歌學者及	武術	俳優	浮瑠璃	職作者	吟工	歌曲	
五七〇																			
五八〇																			
五九〇																			
六〇〇																			
六一〇																			
六二〇																			
六三〇																			
六四〇																			
六五〇																			
六六〇																			

偉人年表(紀元自四八〇至五六〇)

五七〇 五八〇 五九〇 六〇〇 六一〇 六二〇 六三〇 六四〇 六五〇 六六〇

崇神天皇
垂仁天皇

近衛心命 多辨命 安毛建美命 大連御諸別命
大臣大新河命 十市根命

大彦命 武甕槌命 吉備津彥命 丹波道主命
五十狹彥命 國狹彥命 非彥命
八綱田命 狹野見宿禰命 狹穗彥命

偉人年表(紀元百六七十至八五〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌學人者及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	謡曲	紀元
六七〇																			六七〇
六八〇																			六八〇
六九〇																			六九〇
七〇〇																			七〇〇
七一〇																			七一〇
七二〇																			七二〇
七三〇																			七三〇
七四〇		景行天皇	武內宿禰 建武利根命																七四〇
七五〇																			七五〇

大日本偉人年表 (八一)

偉人年表(紀元百六七十至八五〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌學人者及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	謡曲	紀元
七六〇																			七六〇
七七〇																			七七〇
七八〇																			七八〇
七九〇																			七九〇
八〇〇																			八〇〇
八一〇																			八一〇
八二〇																			八二〇
八三〇																			八三〇
八四〇																			八四〇
八五〇																			八五〇

大日本偉人年表 (九一)

成務天皇
武內宿禰
物部聯吐

偉人年表(紀元自八六〇至一〇四〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌學人者及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	謡曲
八六〇		仲哀天皇	武内宿禰 大友武以															
八七〇		神功皇后	武内宿禰 多遲麻連															
八八〇			物部武持															
八九〇																		
九〇〇																		
九一〇																		
九二〇						蘇我 蝦夷王												
九三〇		應神天皇	武内宿禰 多遲麻連															
九四〇			葛城蘇我 命				阿直岐											

大日本書紀(一〇一)

偉人年表(紀元自八六〇至一〇四〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌學人者及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	謡曲
九五〇																		
九六〇																		
九七〇																		
九八〇		仁德天皇	武内宿禰			大山守皇子 平群水尾	菟道稚郎子 王仁											
九九〇																		
一〇〇〇																		
一〇一〇																		
一〇二〇																		
一〇三〇																		
一〇四〇																		

大日本書紀(一〇二)

紀元	一四八〇	一四九〇	一五〇〇	一五一〇	一五二〇	一五三〇	一五四〇
天子	聖明天皇	淳和天皇	仁明天皇	文德天皇	清和天皇	陽成天皇	
宰相	藤原內膳 藤原冬嗣	藤原冬嗣 藤原安世	藤原冬嗣 藤原實房	藤原實房 藤原常房	藤原實房 藤原宗房	藤原實房 藤原宗房	藤原實房 藤原宗房
將軍							
將士	坂上田村麿 文室綿歷	藤原吉野		坂上淨野 和氣仲世	藤原高房	藤原其繩	紀夏井 藤原保則
學者	菅原清公 藤原衡	春澄香繩 藤原常嗣	和朝野鹿取 和氣真繩	藤原關雄	菅原福成 山田春城	南淵年名	紀安雄 菅原基春
名僧	安澄法師 永忠 義真	果空圓 麟海行	明西實安 福安慈願	恒寂	圓長實經 明訓敏祥	智真教光 澄濟待定	常真澄安 曉紹演慧
醫師	吉田書主	海直淡路	大村福吉 守野門印		竹田千繼 物部廣泉	藤原香宗 藤原野成	五百木部全
畫人			巨勢金若	空光			
俳茶人及							
和歌學人及				大江音人		在原行平 大伴黑主	紀有常
武術	藤原大津	執興道 藤原家雄	葛井親王				
俳優							
淨瑠璃							
戲作者							
金工	大原真守	大原為清					
諸曲							
紀元	一四八〇	一四九〇	一五〇〇	一五一〇	一五二〇	一五三〇	一五四〇

大日本偉人年表 (八二一)

大日本偉人年表 (九二一)

紀元	一五五〇	一五六〇	一五七〇	一五八〇	一五九〇	一六〇〇	一六一〇	一六二〇
天子	仁明天皇	文德天皇	清和天皇	陽成天皇	光孝天皇	宇多天皇	醍醐天皇	天曆天皇
宰相	藤原冬嗣	藤原實房	藤原實房	藤原宗房	藤原宗房	藤原宗房	藤原宗房	藤原宗房
將軍								
將士								
學者								
名僧								
醫師								
畫人								
俳茶人及								
和歌學人及								
武術								
俳優								
淨瑠璃								
戲作者								
金工								
諸曲								
紀元	一五五〇	一五六〇	一五七〇	一五八〇	一五九〇	一六〇〇	一六一〇	一六二〇

偉人年表(紀元自一六三〇至一六八〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌人及	武術	俳優	浮瑠瑠	戲作者	金工	謡曲	紀元
一六三〇	應和康保安和	冷泉天皇 圓融天皇	源高明 藤原實賴 藤原師忠 藤原有平	藤原實賴 藤原在衡 藤原伊尹		源延光	橘直幹 藤原雅村 加茂保憲	應和淨尊 藏家 仲寬 算空照				紀内侍							一六三〇
一六四〇	天祿天延貞元天元永觀寬和		源範明 源雅信 藤原兼家	藤原實賴 藤原在衡 藤原經通		平貞盛		藤原滋秀 尊		巨勢公室		源順							一六四〇
		花山天皇		藤原實賴 藤原兼家 藤原信實		藤原惟成 藤原義成		藤原輔正 大江匡衡 安部晴明	尋禪								備前實成 備前正恒		

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌人及	武術	俳優	浮瑠瑠	戲作者	金工	謡曲	紀元
一六五〇	永延永祚正曆長祿長保寬弘長和寬仁治安萬壽	一條天皇	藤原兼家 藤原為光 藤原信實	藤原實賴 藤原道隆 藤原實光		源滿仲	藤原元輔 清原元輔	勤僧陽生 餘真 慶義 增寬 賀朝											一六五〇
一六六〇			藤原道隆 藤原實光			源賴朝	藤原為時 大江時棟	藤原為時 大春日長德		巨勢弘高		伊勢大輔 和泉式部							一六六〇
一六七〇			藤原道長 藤原實光 藤原實資			源賴光	加茂光榮 大江以實	源賴朝 阿部吉平 阿部吉昌				小式部内侍 紫式部							一六七〇
一六八〇		三條天皇 後一條天皇					源賴朝 阿部吉平 阿部吉昌	河内博道											一六八〇
								丹波忠明											

偉人年表(紀元自一六三〇至一六八〇)

大日本年表 (一三〇)

大日本年表 (一三三)

偉人年表(紀元百一八八〇至一九一〇)

大日本年人偉人表 (八三一)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳人及	和歌人及	武術	俳優	淨瑠璃	職作者	金工	諸曲	元紀
一八八〇	建曆	順德天皇	藤原家實 藤原兼房	藤原賴經		北條時房 三浦義村 源有雅 山田重忠	藤原光親	榮四郎 圓覺	空林			藤原雅經					一寄背 江正恒 文字康次 栗田口國友 文字助行 文字助宗 文字吉元		一八八〇
一八九〇	貞應 元仁 嘉祿 安貞 寛喜 貞永	後堀河天皇	藤原家實 藤原公繼 藤原忠經 藤原兼房 藤原經	藤原賴經	北條時時			海慈 續行 遊		宅磨良實							文字依宗 文字真光 文字真行		一八九〇

大日本年人偉人表 (九三一)

一九〇〇	天福 文曆 嘉祿 貞仁 延應 仁治 寬元 實治 建長 康元	四條天皇	藤原教實 藤原經家 藤原實氏 藤原實經 藤原實經	藤原賴朝 藤原賴朝	北條時賴 北條時賴	三浦泰村	和氣貞經	道元 辨圓 辨然 長阿 義空 法任 善慧 榮朝 道範			藤原家隆	藤原定家	石川廣成 忌部黑磨				栗田口國清 文字家後 文字家吉 文字家信	文字家信 文字家安 文字家信	文字真利 栗田口國綱 文字吉房	一九〇〇
一九一〇		後嵯峨天皇 後深草天皇	藤原經家 藤原實氏 藤原實經 藤原實經 藤原實經	藤原賴朝 藤原賴朝	北條時賴 北條時賴												文字家信 文字家安 文字家信	文字家信 文字家安 文字家信	一九一〇	

偉人年表(紀元百一八八〇至一九一〇)

偉人年表(紀元自一九一〇至一九六〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌學者及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	謠曲	紀元
一九二〇	正嘉正元	龜山天皇	藤原兼平 藤原公相 藤原實雄	藤原實經 藤原實隆	北條長時		壘照親鸞			巨勢有行							千手院行信來國行 一文字吉用		一九二〇
一九三〇	弘長文永	後宇多天皇	藤原長實 藤原基忠 藤原家經	藤原基經 藤原家經 藤原通雅	北條政村		性悟 信念			藤原信實 土佐邦隆		藤原為家 和氣長世					備前宗國 一文字恒宗		一九三〇
一九四〇	建治弘安	伏見天皇	藤原忠家 藤原基忠 藤原兼平	藤原家經 藤原通雅 藤原公基			佛日聖 光慈一 湛祖信記			藤原長隆 土承長隆		藤原為世					栗田口吉光 一文字則長		一九四〇
一九五〇	正應永仁	伏見天皇	藤原師忠 藤原忠教 藤原兼基	藤原師忠 藤原忠教 藤原兼基	北條貞時		普大正寂 門明念覺			巨勢光康							來國長 一文字宗俊		一九五〇

偉人年表(紀元自一九一〇至一九六〇)

一九六〇	正安乾元	後伏見天皇 後二條天皇	藤原兼忠 藤原公守 藤原兼基	藤原冬平 藤原實家	守邦親王		賴瑜 忍性 順信顯 繼日意 大覺照大僧正 順空 儀演 覺法親王 德儉祐 覺鏡 圓			藤原公衡									一九六〇
一九七〇	治延應長	花園天皇	藤原冬平 藤原實家	藤原冬平 藤原實家						土佐光秀							近江光色 來丁戒		一九七〇
一九八〇	保元應元	後醍醐天皇	藤原信綱 藤原實泰 藤原公顯	藤原信綱 藤原實泰 藤原公顯	北條高時					土佐隆相 土佐隆相							栗田口國光		一九八〇
	元亨		藤原實重 藤原實定 藤原房實	藤原實重 藤原實定 藤原房實						巨勢有行 土佐隆相 土佐隆相							保昌吉重 來國行		

偉人年表(紀元自一九一〇至一九六〇)

偉人年表(紀元自1050至1110)

紀元	年號	天子	宰相	年號	天子	宰相	執權	將軍	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌人及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	謠曲	紀元
1105	弘和元	中							楠正元勝		義堂周信 妙融時發		土佐寂濟 宅磨淨宏		花山院長親					關兼行	關兼吉	1100
統 一 北 南																						
1106	明德	應永							源政義 山名氏清 大内盛弘		玉冠一天 定快林滿 金快林滿	壽阿彌	土佐光重 粟田口經光 文光		紀俊長					佐伯真景 一文字守俊		1100

紀元	年號	天子	宰相	年號	天子	宰相	執權	將軍	將士	學者	名僧	醫師	畫人	俳茶人及	和歌人及	武術	俳優	淨瑠璃	戲作者	金工	謠曲	紀元	
1110	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿														觀世元清 觀世元雅	1110
1107	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿	足利持氏 島山滿家		明長 見死		土佐光國 如雪										1100
1106	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿	足利持氏 島山滿家		明長 見死		土佐光國 如雪										1100
1105	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿	足利持氏 島山滿家		明長 見死		土佐光國 如雪										1100
1104	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿	足利持氏 島山滿家		明長 見死		土佐光國 如雪										1100
1103	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿	足利持氏 島山滿家		明長 見死		土佐光國 如雪										1100
1102	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿	足利持氏 島山滿家		明長 見死		土佐光國 如雪										1100
1101	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿	足利持氏 島山滿家		明長 見死		土佐光國 如雪										1100
1100	正長	永享	嘉吉	文安	寶徳	享徳	康正	長祿	足利持氏 島山滿家		明長 見死		土佐光國 如雪										1100

偉人年表(紀元自1050至1110)

大日本年表(一四一)

大日本年表(一四一)

偉人年表(紀元百一十三〇至二二七〇)

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	茶人及 俳人	歌人及 武術	俳優	淨瑠璃	職作者	金工	歌曲	紀元
一一三〇	寬正文正應仁	後土御門天皇	藤原教房 藤原持通 藤原通尚	足利政知	足利義尚	德川親氏 山名宗全 太田道灌	幾部剛立	正融 義月一休和尙 實牛泉性印尙		土佐房親 花房誠主 芝慶輝	石黑道提 珠光	飛鳥雅康 飛鳥雅康 飛鳥雅康						一一三〇
一一四〇	文明長享延徳		藤原政光 藤原政平 藤原政忠	足利義隆	足利義隆	里見義賢 德川信光		義快 明兼 遊壽		狩野正信							觀世元重	一一四〇
一一五〇	明應文龜永正	後柏原天皇	藤原政通 藤原政光 藤原政隆	足利義隆	足利義隆	德川親正 三好長輝		高旗祖定 祥行之正貞徳				宗証 肯柏				加賀正清	石長松祐定 後藤祐常	一一五〇
一一六〇																		一一六〇
一一七〇																		一一七〇

紀元	年號	天子	宰相	將軍	執權	將士	學者	名僧	醫師	畫人	茶人及 俳人	歌人及 武術	俳優	淨瑠璃	職作者	金工	歌曲	紀元
一一八〇	享祿天文弘治	後奈良天皇	藤原實家 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	三好元長 北條時康		喜州支秋 鳳州支秋		狩野和泉		宗長	塚原卜傳					一一八〇
一一九〇	永祿元龜		藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	足利義隆 北條時康		以法親王 奇伯親王		土佐千代		東常和 山崎宗鑑	津田布盛 津田直物			早乙女家次		一一九〇
一二〇〇	永祿元龜		藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	北條時康 三好元長		喜山宗祈 國師宗隆		狩野永徳		東常和 山崎宗鑑	上泉伊勢守			三世祐定		一二〇〇
一二一〇	元龜長祿	正親町天皇	藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	毛利元就 毛利隆景		安藝定俊 安藝隆景		狩野宗信		宗長	柏原成重 富田九郎			明珍信家		一二一〇
一二二〇	天文正徳	後陽成天皇	藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	松浦宗家 毛利元就		安藝隆景 安藝隆景		狩野宗信		宗長	上泉伊勢守			後藤宗俊		一二二〇
一二三〇	文祿慶長		藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	松浦宗家 毛利元就		安藝隆景 安藝隆景		狩野宗信		宗長	上泉伊勢守			後藤宗俊		一二三〇
一二四〇			藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	松浦宗家 毛利元就		安藝隆景 安藝隆景		狩野宗信		宗長	上泉伊勢守			後藤宗俊		一二四〇
一二五〇			藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	松浦宗家 毛利元就		安藝隆景 安藝隆景		狩野宗信		宗長	上泉伊勢守			後藤宗俊		一二五〇
一二六〇			藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	松浦宗家 毛利元就		安藝隆景 安藝隆景		狩野宗信		宗長	上泉伊勢守			後藤宗俊		一二六〇
一二七〇			藤原實隆 藤原實隆	足利義隆	足利義隆	松浦宗家 毛利元就		安藝隆景 安藝隆景		狩野宗信		宗長	上泉伊勢守			後藤宗俊		一二七〇

偉人年表(紀元百一十三〇至二二七〇)

大日本年表(六四一)

大日本年表(七四一)

Table of famous figures from 1300 to 1390 AD, categorized by profession (e.g., 紀元, 諸曲, 金工, 織作者, 淨瑠璃, 俳優, 武術, 和歌人及, 俳茶人及, 畫人, 醫師, 名僧, 學者, 將士, 執權, 將軍, 宰相, 天子, 年號, 紀元).

Table of famous figures from 1340 to 1390 AD, continuing the categories from the previous table.

大日本年表 (八四一)

大日本年表 (九四一)

Table with columns: 紀元 (Year), 天子 (Emperor), 宰相 (Prime Minister), 將軍 (General), 將士 (Warrior), 學者 (Scholar), 名僧 (Famous Monk), 醫師 (Physician), 畫人 (Painter), 俳人 (Haikai Poet), 武術 (Martial Arts), 俳優 (Haikai Actor), 淨瑠璃 (Jingurui), 戲作者 (Playwright), 金工 (Goldsmith), 謡曲 (Noh Drama), 紀元 (Year). Rows list historical figures and events from 2400 to 2450.

Table with columns: 紀元 (Year), 天子 (Emperor), 宰相 (Prime Minister), 將軍 (General), 將士 (Warrior), 學者 (Scholar), 名僧 (Famous Monk), 醫師 (Physician), 畫人 (Painter), 俳人 (Haikai Poet), 武術 (Martial Arts), 俳優 (Haikai Actor), 淨瑠璃 (Jingurui), 戲作者 (Playwright), 金工 (Goldsmith), 謡曲 (Noh Drama), 紀元 (Year). Rows list historical figures and events from 2460 to 2510.

大日本年表 (一五二)

大日本年表 (一五二)

Table of famous figures from the Genroku era (1693-1733). Columns include Name (姓名), Rank (官位), Birth (生年), and Death (没年). Rows list figures like 藤原経宗, 藤原経国, 藤原経基, etc.

偉人年表(紀元自二五二〇至二五五〇)

大日本人名辭書上卷

ア之部

アイ 愛の方... 戸塚五郎大夫忠春... 愛の方... 愛日齋... 愛吾廬... 愛日樓... 愛雀軒... 愛洲移香... 愛洲陰流の祖なり九州の人、子七郎其の統を嗣く(武術流祖)

アイ

アカガハ ダイゼム

アイセキ 愛石は書僧なり名は真瑞、愛石は其の號、紀州の人、書を野呂介石に學ぶ... アウシウ 奥州は東都吉原三浦屋の名妓なり元祿中の人... アウジユ 櫻樹院水齋は紀州高野山の僧なり...

悪業極まず遂に伊豫の國藤が原と名つくる山中に入りて山賊
となる須臾の間に附き従ふもの三十五人享保十一年正月五日
天一坊(其の時吉兵衛と稱す)偶々四國の沖に暴風に遇ひ辛
うじて死を免れ彷徨其の家に來りて寝食を求む大膳其の七百
餘金を懐にするを察し其の寐を窺ひて刺さんと欲す其の寢室
に至れば則ち天一坊在らず之を搜索すれば天一坊既に奥室に
在り泰然として高座に坐す風躰凡ならず而して大言傲語毫も
臆する色なし大膳其の豪膽に驚く遂に其の隠謀を聞きて主従
の約を結ぶ是より其の悪計を佐け同年十一月江戸に於て天一
坊と共に謀に伏す時に年四十五と是れ世上の口碑に傳ふる所
なりしが今徳川時代の裁判宣告を蒐録したる尤も信據すべき
温故實錄に據れば左の如し
無宿浪人 赤川 大膳
此者儀先年不届ノ儀有之候ニ付主人ニテ門前拂ニ相成夫ヨリ
所々ニテ人殺ノ上盜賊致シ其上當時無宿浪澤ト申合江戸ニ出
テ公儀ヲ偽多クノ金銀ヲ欺取候段重々不届至極ニ付町中引廻
ノ上於品川獄門ニ行フ者也
アカガハ フウケイ 赤川楓溪は文祿中の書家なり名
は俊章後一年字は涼々、熊太郎と稱す楓溪は其の號、播州安
志藩の人江戸に住す(廣益譜家人名録)
アカガリ ダイダ 厩太は豊後の士なり相傳ふ母某は
農家の女なり近里の美少年と感戀を通す而して少年の由て來
る所を知らず大に恠んで一日其の去る所を蹤す山腹に大洞あ
り少年蛇に化して其の中に入り女大に驚く已にして生む所の
子背に鱗を生じ其の躰常に厩あり故に厩名して厩太と曰ふ
停力あり文治中の人(平家物語)
アカサカ クニナガ 赤坂國長は美濃赤坂の鍛工なり
泉水の子、道印と號す長享中の人其の子亦國(萬寶全書)
アカサキ カイモン 赤崎海門は昌平賢の儒官なり名
は植翰字は彦齡一に源助と稱す本と薩摩の士なり學識操行

アカガハ フウケイ

アカタイヌカヒ オホトモ

共に名あり寛政の初め幕府の徵に應じ頼春水と共に經を昌平
堂に講し大に程朱の學を唱ふ文化中歿す年六十餘(墨堤傳覽、續
譜家人物志)
アカザ ナヲノリ 赤座直則は七郎右衛門と稱す美濃
浪人なり足利義昭に仕ふ其本國寺の假居を伺ひ三好松永等遠
に之を襲ふ直則寺中に馳入り寄手と戦ひ勇闘す本國寺七本鎗
の一人なり功を以て織田氏に仕ふ本能寺之變苦戦して明智勢
の爲に死す(天正外記)
アカシ カムザブラウ 明石勘三郎は二代猿若勘三郎
にして名優なり初代勘三郎の子、父と上京して朝廷より明石
と云ふ名を拜領し大夫元を勤むること十七年此時弟子市村竹
之丞菅屋町にて芝居相續す依て勘三郎より紋所鶴の丸を譲り
勘三郎市村座にて竹之丞引合せの口上を勤む此の紋所は鶴の
所あり竹之丞が家の紋橋に改む今に顔見世入り替はり新役者
附格臺輪に中村座は舞鶴を市村座は鶴の丸を付るは昔の遺風
なり(燕石十種)
アカシ シガノスケ 明石志賀之助は寛永中の角力者
なり寛永元年一説には寛文元 寄相撲と名つけ江戸四谷鹽町に於
て晴天六日の間諸國相撲を興行す是れ江戸勘進相撲の始めな
り又京都四條河原に上覽の相撲ある時に志賀之助當時の名手
丸山仁太夫と撲て勝を得たりしかば其の名都下に噴々たりし
と云ふ(相撲大全、遊遊笑覽)
アカシ ジャウレウ 明石城了は歌人なり名は城了、
後覺一と改む後醍醐帝の時總檢校に補す足利氏の支族なり性
和歌を嗜み「旅宿聞雨」の一詠天聰に達し後雨夜の號を後小
松天皇より受け又紫衣を賜はる之を盲人賜紫の始と爲すと云
ふ其の聞雨の歌に曰く「夜の雨の、窓をうつにも、碎くれは心
はもろき者にぞありける」應安四年播州明石に没す(野史)
アカシ モリシゲ 明石守重は宇喜多秀家の臣なり父
を三郎左衛門景親と稱す初め備前美作の領主浦上景宗に仕ふ

宗景の臣宇喜多直家其の國を奪はんことを謀る景親之に與し
て宗景を逐ひ直家を立て、主となす後直家の子秀家繼て立
つに及びて守重も亦父の後を承け秀家に仕へ掃部助と稱す邑
二萬石を食む關原の戦に西軍の先鋒となり三百の兵を率ひて
池尻より福田驛を經進んで中村忠一と戦ひ之を破りしが西軍
卒に敗るゝに及び秀家奮然として此に戦死せんとす守重諫め
て曰く假令ひ大藩重臣皆大阪に叛くも幼主を輔けて時を待つ
は主公一人にして足らん備前美作は殷富の地なり宜しく據り
て時機を俟つべし若し志を得ざれば岡山の城を枕とし天下の
兵を逸へて死を決するのみと秀家之に従ひ即左右數騎を以て
逃る守重先ちて岡山に歸る然るに留り居るもの既に城を棄て
て逃れ土寇之に乗じて其の資糧を奪ひ城壁を毀てり守重遂に
其の守るべからざるを知り備中蘆森に遁れ潜居すること數年
會々大坂の殘兵同志を糾合して再舉を謀る守重乃ち之に應じ
元和元年五月七日の戦に眞田幸村と相ひ謀りて東軍の後を撃
ち之を取らんと思はしが時機を失して幸村戦没し天王寺口敗れ
東軍城に逼るに及び守重遂に退走す是より匿居流落三年を經
て赦に遇ひ後病んで死す(野史)
アカシヤ サムキヨ 明石屋三去は俳歌を能くせり東
都四日市の人、三去は其の號、一に遊居の號あり喜八と稱す弘
化中の人、其の俳歌に曰く「只一木いひ盡されす初さくら」(俳
諧海内人名録)
アカシヤ リヤウシヨウ 明石屋涼松は俳歌を能くせ
り大坂の人、涼松は其の號、一に花隣亭の號あり壽次郎と稱す
弘化中の人其の俳歌に曰く「湯上りの場廣うすわるすゝみか
な」(俳諧海内人名録)
アカシ ヨジベエ 赤石與次兵衛は播磨の舟夫なり文
祿元年征韓の役秀吉與次兵衛の船に駕して安藝に航す與次兵
衛其の船底に竅して之を沈めんと欲す露はれて殺さる或は曰
ふ與次兵衛征韓を非とするの將其の命を承けて秀吉を害せん

アカガハ フウケイ

アカタイヌカヒ オホトモ

と謀れるなりと(太閤記)
アカシ ヨダイフ 明石與太夫は水府金工の元祖な
り(藝工傳覽)
アカゾメ エモム 赤染右衛門は有名の歌人なり大隅
守時用の女或は曰く平の兼盛の女なりと右衛門の母初め兼盛
の妻たりしが懷妊中離縁となりて女子を擧ぐ後之を携へて再
たひ檢非違使赤染時用に嫁す時用養ひて己が子とす因て赤染
右衛門と稱すと右衛門初め攝政道長の妻倫子に仕へ後大江
匡衡に嫁す才思あり和歌を善くして和泉式部と聲名を齊うす
傳へ云ふ其の子擧周曾て重病に罹り久しく癒えず右衛門之を
愛ひて住吉神社に祈り己が命を以て代らんことを請ふ三本の
幣を奉りて各々之れに和歌を附す其の歌の一に曰く「はらむる命
幣し 其の夜白髪のお翁出で來りて此の幣を社内に納むと夢む
後ち幾もなくして病平癒すと藤原公任將に中納言を辭せんと
欲して當世の名儒紀齊名大江以言に屬して辭表を作らしむる
に皆其の意に合はず因りて更に匡衡に依頼す匡衡家に還りて
爵愜の色あり右衛門怪んで問ふ匡衡實を告げ且曰く齊名以言
の才學を以て猶ほ其の心を満たす能はず私に恐る吾が文亦其
の望に愜ふ能はざらんことをと右衛門曰く此の公矜飾の意多
し今盛に其の門地の貴きを述へて隠に官位沈滞の意を露はす
べしと匡衡之に従ふ公任果して悦んで其の表を用うと右衛門
の穎悟なること此の如し女あり江侍従と曰ふ亦和歌を以著は
る(大日本史、本朝列女傳、歌道人物志、十訓抄)
アカタイヌカヒ イラツメ 縣犬養娘子は萬葉作者の
一に列し和歌を善くするを以て其の名を知る詠歌は載せて
其の第八卷に在り(萬葉集作者履歷)
アカタイヌカヒ オホトモ 縣犬養大伴は壬申の亂に
天武帝に從て東國に赴く事平いで功を論じ一百戸に封せらる
八年疾あり帝其の第に幸して之を視る位直廣壹に至る大寶元

大日本人名辭書 (四)

アガタイヌカヒ キヨヒト

年卒す淨廣肆夜氣王等を遣して第に就て詔を傳へしめ正廣壹を贈り封四分の一を其の子に賜ふ(大日本史)

アガタイヌカヒ キヨヒト 縣犬養淨人は和歌を善くして萬葉作者の一に列す詠歌は載せて其の第二十卷に在り勝寶七年下總少目に任ぜられ從七位下に叙せらる弘仁十四年從六位に進み十五年從五位下に至る(萬葉集作者傳)

アガタイヌカヒ ヒトガミ 縣犬養人上は天平寶龜間和歌を善くするを以て其の名を知らる秀歌は多く萬葉集等に載せたり(萬葉集作者傳)

アガタイヌカヒ ヒロトジ 縣犬養廣刀自は聖武帝の夫人なり讚岐守唐の女、帝儲たりし時納れて夫人となす安積親王、井上内親王、不破内親王を生む正三位に叙す寶字五年都を保良に遷す稻四萬東を賜ふ明年十月薨す(大日本史)

アガタイヌカヒ ミチヨ 縣犬養三千代は葛城王の母なり和歌に工みなるを以つて知らる養老元年從四位上を授けられ三年從三位に累進し五年正三位に叙せられ食封資人を賜はる三千代固辭す優詔して聽さず天平五年薨す從四位下高安王等を遣はして喪事を監護せしめ從一位を贈らる(萬葉集作者傳)

アガタイヌカヒ ヨシヲ 縣犬養吉男は神魂命八世の孫佐居大郡命の後なり和歌を善くして萬葉作者の一に列す其名頗る人に知らる詠歌は載せて其の第八卷等に在り寶字二年六位を歴て從五位下に叙せられ三年從五位上に進み肥前守と爲り八年伊豫守に轉じ内舍人に至る(萬葉集作者傳)

アガタイヌカヒ ヲジ 縣犬養男耳は光仁帝の妃なり初め女孀と爲る從五位下に叙せらる帝龍潜の日の之を幸す廣根諸勝を生む(大日本史)

アガタ ソウチ 縣宗知は遠州流の茶人なり江戸の人、上柳甫齋に從ひて學ぶ玉泉子と稱す享保六年六月十二日没す或は云ふ廿七日に歿すと法號見性宗知居士と曰ふ(茶所一覽茶人系傳全集)

アガタ ロゲム 縣魯彦は儒家也字は子模、通稱は秀八、淺川と號す山縣周南の門人にして俊才あり(諸家人物誌)

アガタ井ノオキナ 縣居翁「カモマンチ」

アカツキノカネナリ 曉鐘成「キムラケムカダウ」を見よ

アカニフダウ 緒入道「ヤマナモチトヨ」

アカ子ヤ ソウサ 苗屋宗佐は泉州堺の茶人なり茶道を武野紹鷗に學びて其の法を善くせり家に漢器の茶入を藏す鶴頸と稱する名器なり(茶人系傳全集)

アカ子ヤ ハンシチ 苗屋半七は歌妓美濃屋三勝と情死せるを以て有名なり半七は五條新町の者にて豆腐屋を業とにし三勝は大阪長町四丁目美濃屋平左衛門が女房の妹にて三と呼び三勝は其藝名にて元禄八乙亥年十二月七日西成郡難波村の墓地にて咽喉を突て情死したるなりとぞ其豆腐屋の看板及び書置き代官所より檢視の記録等は今尚同地の舊家宗田猪太郎の家に保存しありて半七の家屋は同地新町十五番地の岡本きくといへるが住する家なり同地極樂寺の石碑は寛政三年に建てしものにて尙大阪の舊千日寺の墓地にも俳優の建てし石碑あり江戸の某寺にも寛政八年に俳優岩井半四郎の建てたるものありと又大阪法善寺中に南無阿彌陀佛の名號と梅と桐の紋を彫りたる石碑あり昔しより之を三勝半七の墓なりといへど然らず

アガノ キザウ 上野喜藏はもと朝鮮の人名を尊階といへり慶長五年細川忠興封土を豊前に受けし時尊階を招き其國の上野村に居られしめ尊階の名を上野喜藏と改め俸祿を與へて瀬戸風の茶壺を製造せしむこれを上野焼といふ寛永九年忠

大日本人名辭書 (五)

アガタイヌカヒ キヨヒト

再封土を肥後國に移さる喜藏も亦從て移り同國八代郷に於て再封土を開き陶器を製出す其地の工人業を傳へて今に至れり(上野喜藏傳)

アガハ デムバ 阿川玄蕃は和學者なり名は義廣伊勢の人

アカバシ モリトキ 赤橋守時は嘉曆中北條高時に代つて執權と爲り相模守と稱す妹を以て足利尊氏に妻はす元弘三年新田義貞鎌倉を攻む守時兵六萬に將として出で、巨福呂阪に拒ぐ戦ふこと數十合士卒死して零々盡く乃ち餘衆に謂つて曰く軍は固と百敗の後一勝以て全利を制するとあり今我軍敗ぶると雖も北條氏の命豈に必らず此に竭きん乎然れども我は尊氏の姻戚なり恐くは相模守我を疑はん義當さに速かに死して武心なきを示すべしと乃ち自殺す從ひ死する者九十餘人(大日本史)

アカハニ シゲカガ 赤埴重賢は赤穂四十七士の一人なり源藏と稱す淺野長矩に事へて馬廻と爲り二百石を食む後姓名を變して高畑源野右衛門と曰ふ既に仇を復し矢田助武と水を爐に灌ぎ火災を豫防し去る死する時年三十五、世相ひ傳ふ重賢は播州龍野の城主脇坂侯の藩士鹽山伊左衛門の弟にして淺野家の臣赤埴氏に養はれて其の後を繼ぐ淺野氏祀を絶ち源藏浪士となりしより常に酒を好み故衣泥醉數々兄伊左衛門の家に行きて酒を請ふ伊左衛門の妻及び奴婢皆之を見て指彈す元禄十四年十二月十四日赤穂の遺臣將に事を擧げんとす源藏白雪を胃し頭に破笠を戴き身に故套を着け伊左衛門を訪ふ意暗に永訣を爲さんと欲す是の時伊左衛門猶ほ未だ公より退かず乃嫂に見えんとを請ふ嫂病と稱して見ず是に於て源藏撈へ來りし所の古徳利を出して曰く余去年三月浪士となりしより兄の高情を受くる一ならず今幸に西國の一諸侯に聘せられ將に國に就かんとす故に之を携へ來りて聊か離別の意を表す唯た兄の未だ歸らざるを憾む兄歸らば之を供せよと自ら數杯

を傾け餘る所を置て去る翌朝に及んで赤穂遺臣復讐の聲聞喧し伊左衛門昨夜源藏の來りしは之れが爲めならんと疑ひ竊かに僕を遣はして遺臣の通路を窺はしむるに果して源藏あり背に兜頭巾を負ひ白布を以て顔巻とし鎗を曳き威風凛々として風林往日と異なり僕大に驚き歸りて急に之を主人に報す是に於て人源藏が昔日の舉動は全く人をして己れが大望の在る所を知らざらしめん爲なるを知り其の忠義の名一般に顯はれ伊左衛門爲めに一層の面目を加ふと云ふ(赤穂四十七士傳并口傳)

アカバ ヘイタラウ 赤羽平太郎は舊唐津藩士多賀某の子にして幼年の折舊會津藩士赤羽氏の養子となる幼より學を好みて數學を善くし曾て東京外國語學校に入りて佛語を學ひ其後參謀本部の選に預り朝鮮へ留學を命せられ渡韓せしは明治十三年三月にして時に年齢僅に十六爾來同國に在ると五年屢々同國地方を巡回して地理風俗人情を視察し明治十七年秋又巡回の命を蒙り十月廿七日磯林真三と共に江原道地方に出發せしが歸途十二月廿八日頃京城近傍へ來りし際偶々暴動の事聞き直に京城へ入らんとして暴徒の爲めに殺害せらる時に明治十八年一月なり

アガフ トキハル 淡河時治は北條時房の孫なり父時盛掃部權助越後守と爲り六波羅南方に判たり家佐介に在り因て佐介氏と稱す後今之氏に改む後醍醐帝北條高時を討つに及んで時治適々越前牛原の地頭たりしが兵を集めて北軍を防ぐ六波羅敗ぶるに及んで部下逃散する者多し平泉寺の僧徒敵に乗じて來り攻む時治勢ひ敵せざるを知て其の妻と訣れ二子を水に沈め潰腹して死す妻も亦水に赴て死す(大日本史)

アカボシ アリヌカ 赤星有隆は三郎入道宗忠といふ其女は菊池武時之妻たり元弘三年三月十三日武時と共に博多に於て王事に斃る(菊池軍記)

アカボシ ソウハム 赤星宗範は天草の反徒なり肥前天草島に住し鐵鑿を業とす寛永八年五月佳節に天草甚兵衛入を

アカボシ ソウハム

アカボシ タケツラ

招く宗範に至らず蘆塚忠左衛門千々輪五郎左衛門天草玄察等其の會せざるを憾とし共に宗範を訪ふ宗範家に在て香を薫じ經を誦じて佛を念す衆見て其の由を問ふ曰く本日會を欠くは甚だ遺憾とす實に此佛供あればなり余が祖主膳織田秀信に仕へ君を諫めて死す父内膳逐はれ秀頼に仕へて城に據りて戦死す今其の命日を以て之を祭るなりと五郎左衛門之を聞き己の父の亦秀頼に仕へたるを語り意相投ず蘆塚大矢野亦皆な徳川氏を怨むるの人たるを語り終に反を謀る名を耶蘇宗に藉て島民を服従せしめ蘆塚の謀計に據り領主寺澤兵庫頭の代官を襲ひ益田時貞を奉じて島原城に據る十五年正月下旬某夜兵を擧げて官軍を襲ふ宗範兵三百人を率ひ出で寺澤氏の兵に向ひ擧て敵兵を破り自ら其の隊長松下半之丞を殺す敵將三宅藤右衛門勇名あり來り闘ふ宗範遂に爲めに殺さる(天草騷動記)

四壁のみ遊人と爲り既に此くの如し而して篆法益々正しく刀法益々熟し變化百出愈々出で愈々正だし毫も狂怪に涉ることなし文化五年に歿す年五十二後子方の子士禮其の居に就て印紙を得編して三巻と爲す其餘の寸楮此の編に入らざる者多し(眉公印譜序)

アカマツ サウシウ

アカボシ タケツラ 赤星武實は掃部允といふ有隆の孫肥前守遠基の子なり菊池武時と共に九州に於て義を唱へ各所に戦ふて勇剛の譽高し正平十三年八月筑後に於て少貳大友の大軍と奮闘し菊池武信其子武明等と共に戦死す(菊池平記)

アカマツ ウチウ 赤松氏範は姓は源氏、則村の子、人と爲り勇悍にして臂力あり彈正少弼と爲る父歿して諸兄と睦まじからず因て南朝に歸順す攝津中島及び有馬、備前馬屋郷を賜ふて食邑と爲す正平八年中納言藤原隆俊に従ひて足利義詮を京師に攻む義詮兵敗ぶれて走る氏範己が軍を抽んで追ひて北白河に至る敵兵長山頼基勇を待み櫓を緩めて徐ろに退く氏範騎を馳て之に及ぶ頼基馬を旋らし大斧を擧げ奮つて氏範を搦つ、氏範身を側たて少しく御きて其の柯を攪り振折して之を奪ふ頼基懼れて退き去る氏範泰ふ所の斧を執りて追て走る者を擊殺すると甚だ多し十年山名時氏と足利直冬に従て復た足利義詮を神南に攻む足利尊氏の東寺に逼る氏範桃井直常と出て戦ふ利あらずして退く敵後を蹶んで之を攻む氏範の従士小牧五郎左衛門傷を被りて歩むこと能はず氏範將に扶けて去らんとす直冬之を慮て敵を防がしむ氏範乃ち小牧を門内に擲り力戦して敵を御く斬殺算なし十五年畠山國清來りて行在を犯す氏範吉野十八郷の兵に將として藤良の子陸良親王に従ひて之を禦ぐ既にして反して足利氏に附す後村上帝前關白師基を遣して之を討たしむ十八郷の兵戦はずして散走し殘兵幾ばくもなし氏範曰く危きを見て去るは義にあらざると二十五騎を率て師基と戦ふこと一晝夜身數創を被り力盡きて降る尋で播磨に還る廿四年兵を中島に起す足利義満氏範の兄則祐光範を遣して之を取らしむ氏範天王寺に走る元中三年播磨の清水に戦ひて敗れ子氏春家則祐春秀則及び從兵百餘人と皆自殺す年五十七家子伊藤藤民部今村五郎少子乙若丸を扶けて薩摩に走る(大日本史)

アカボシ タケツラ

アカマツ クワツキム 赤松鶴年は京師の畫人なり字は玄装、鶴年は其の號、岸駒に學んで畫を善くす(畫乘略扶桑畫人傳) アカマツ コサヅラウ 赤松小二郎は信州上田の藩士なり諱は友裕宇宙堂と號し本姓は蘆田氏幼名を清次郎と曰ふ後出て赤松氏を繼ぐに及んで小三郎と改稱す父を勘兵衛友故と云ひ上田藩の世臣にして廣間番役を奉す兄を柔太郎諱は新、小洲と號し、和歌并に畫を能くす藩の句讀頭取兼軍事世話役たり廣瀬後撰を以て佐久那中賢の教頭に擧げられ學務の爲めに盡力奔走す幾許ならずして病歿す小三郎天保二年に生る人となり磊落不羈にして經綸の材あり性文事を嗜み月術に通し數理に精し然れども特に長する所なり幕吏内田彌太郎により數學を攻む又佐久間象山に従ひ天文地理格物生理歴史政治を學び又勝海舟の門に遊ぶ後長崎に往き蘭人某氏に就き更に兵學及び數學航海術語學等の諸科を學び歸て改進の説を主唱し藩人をして洋兵式を習練せしむ上田藩の他諸藩に率先し夙に洋式に則りしは實に小三郎の力預りて其多きに居ると云ふ然れども人の憎む所となり去て京師に家塾を開き生徒を教授し持論を吐露して毫も憚るところなし時に京師在營の諸大藩も漸く洋式兵法の採用せざる可からざるを知り各自其先導者を求むるにあり薩、大垣、會津、肥後、郡山、岡山等の諸藩小三郎の雷名を聞き互に争ふて招聘す乃ち薩藩の懇招に應ず諸藩の子弟凡そ八百有餘人伊知地、伊集院、桐野、村田等其中に在り此時に方先譯述せる英國歩兵練法を改譯す目今本邦の兵制の基礎は多く此書より出づる處なりと云ふ而して大に攘夷家の注目する所となり危難に遇ふこと其の幾回なるを知らず屢々將軍慶喜に建言し大に幕、薩の間に周旋し佐幕勤王の主義を以て天、幕一和を彌縫し國權を伸張し天下を經綸するに努力し薩の西郷隆盛水戸原仲寧幕士梅澤孫太郎永井玄蕃等と往來し謀る所あり時に會津藩小三郎が技倆

を欽仰し招聘頻なり由て之に應ぜんとするに際し突然藩主より歸省を命す已むとを得ず將に歸程に就かんとす薩藩爲めに餞せんと送別會を某樓に開く門人桐野利秋曰く士たるもの一旦師弟の誓を爲すとも西東國を異にし論議相反し君命に依り何時戰端を開くとなしとも云ふ一からす其の期に臨み敵軍に師弟あるを懐ひ君命を辱かしむるとあらば是れ士人の大耻とする所なり故に冀くは師弟の盃を返戻し誓を破るに如かずと小三郎曰く同感なりと痛飲愉快を盡して去る適々歸程兩三日に迫り歩いて東洞院五條通りに到る忽然兇徒二人要撃し之を刺す(薩人某曰く當時維新革命の企圖最中にて赤松氏東に歸り幕府を補佐して千軍萬馬を指揮せば薩長其の他の大妨害を爲し實に天下の大事なり故に止むことを得ず故に謀りて斃したるなりと夫れ或ひは然らん) 實に是れ慶應三丁卯九月三日なり時に年三十有七薩藩殊に壯大なる葬儀を營み遺骸を東黒谷光明寺に納む(福澤吉通報載)

アカマツ サウシウ

アカマツ サウシウ 赤松滄洲は赤穂侯の儒員なり名は滄洲字は國鸞、滄洲は其の號、又靜思翁と號す通稱良平、播磨川耕齋の爲めに養はる因て其の氏を冒す大川舟渡曾州の望族赤松氏より出づ故に亦赤松と稱す滄洲弱冠にして平安に遊び方技を香川修菴に學び經義を宇野明霞に受く而れども醫を欲せず専ら心を書籍に留む赤穂侯之を聞きて専ら其の欲する所を修めしむ延享四年三月侯擢て、儒員と爲す時に歳二十七、滄洲既に用ひられ乃建議して學舎を起し文教を張る又自ら經史を講説し實踐躬行を以て士風を鼓舞す遂に累遷して家老に至る是に於て典刑を修め賦役を調し其の他救濟する所少からず滄洲身要職に居ると雖も敢て此を以て人に誇るの色なし子弟に語るに大器晚成の事を以てし其の早く心を仕途に用ひざるを勸む故を以て遊從の士自然其の風習に化し各々其の氣を壯潤にせざるはなし滄洲職を奉する十四年寶曆十年老を告

アカマツ サオウ

け再び平安に出で、學を講ず。晩に赤穂に反る。享和元年没す。年八十一。滄洲容貌魁偉、鬚髮美なり。特に天性豪直、惡を疾む。こ...

アカマツ サオウ 赤松沙鷗は江戸の儒者なり。名は蒼...

邦、字は新甫。沙鷗は其の號。播磨の人。其の先は赤松則祐より...

アカマツ サダノリ 赤松貞範は則村の子なり。筑前守と...

稱す。建武二年足利尊氏に從ひて東、北條時行を征す。時行軍破...

アカマツ サダムラ 赤松貞村は圓心入道の二男。美作守...

貞範の曾孫なり。伊豆守に任す。嘉吉の變、諸將と赤松滿祐を白旗...

アカマツ ノリスケ

を播州に發し、滿祐に對して一矢を繼つ。式裝華麗に過る。遠しと...

アカマツ シユムアン 赤松春菴は醫儒なり。名は惟義、...

入道滿政の子也。三郎と稱す。貞村、愛死して後、赤松氏の一族一...

アカマツ ダイユ 赤松太庚は江戸の儒者なり。名は弘、...

又通稱に用う。字は毅甫。太庚は其の號。又赤草と號す。述齋、...

アカマツ サオウ

あらず。讀者嘆服す。太庚常に名教を以て己が任と爲す。其の自ら...

アカマツ トモノリ 赤松朝範は則祐の末子、肥前權守...

たり。正平十年足利義隆の山名時氏と神南に戦ふ。朝範父と共...

アカマツ ナホヨリ 赤松直頼は範資の二子也。足利尊氏...

の弟直義と兵を構へ、取れて松岡城に逃る。や直頼年甫めて十...

アカマツ ノリサネ 赤松範實は範資の三子、叔父則祐...

の爲めに子とし養はる。彦五郎と稱す。足利義隆に從ひて吉野を...

アカマツ ノリスケ

を起す。や常に從ひて力戦す。功を以ちて信濃守と爲る。延元元年...

アカマツ ノリスケ 赤松教祐は則村の長子、則村の義...

直に從ひて補正行と譽田林四條驛に戦ふ。幾ばくもなく尊氏弟...

アカマツ ノリスケ 赤松則祐は則村の第三子。初め僧と...

爲りて延暦寺に居り、護良親王に給事し。權律師に任せられ、帥律...

て吉野に奔る途に敵の爲めに扼せらる則祐等心を悉して扶持し僅に免るゝことを得たり親王大に喜び平賀三郎村上義光と並びに三傑と稱す親王吉野に赴き義徒を募集するに及びて則祐も亦た令旨を請ひて播磨に歸り則村に勸めて義を擧げしめ俱に摩耶城を守る賊來り攻む則村迎へ撃ちて之を破り將に兵を飲めて城に歸らんとす則祐曰く賊兵を悉して來り攻む今已に敗れ歸る卒勞れ馬疲る我れ勝に乗じて追撃せば誰れか能く之を拒がん六波羅立どころに取る可しと、則村之を然りとし乃ち進んで桂河に至る賊の新兵二萬、岸に臨んで陣を爲す則祐馬を躍らして將に渡らんとす則村之を止む則祐聽かずして曰く敵は多くして我は寡なり利、急に戦ふに在りて單騎流を絶ちて先づ渡る則村の兵三千之に雖も賊風を望んで潰走す則祐貞範四騎を従へて北へを逐ひ徑より六波羅西門に至りて後軍の至るを候つ時に日已に暮る賊兵四もに至る則祐貞範便ち微號を徹して賊に混ず賊之を覺り令して曰く赤松の兵水を渡りて來る其の鎧馬沾濕する者は悉く執へて之を斬れと則祐等脱す可らざるを料り乃ち大に叫んで奮戦し從騎皆な死し又た貞範と相失す則祐身を挺んで本軍に脱し歸り復た散兵を收めて進んで七條に戦ひ又敗らる王師凱旋の後幾ばくもなく足利尊氏に從ひて反す、則村死して播磨守護職を襲ぎ備前美作の守護職を兼ぬ正平六年高師直に從ひて光明山を攻む會き美作に兵起ると聞き乃ち還りて白旗城を守る尋て南朝に歸順し護良親王の子陸良を奉じて尊氏を討つ明年復た叛して足利義詮に降り陸良を京師に幽す陸良脱して高山寺城に入り兵を集めて則祐を討つ則祐迎へて高山に戦ひ之を取る十年佐々木高氏と義詮に從ひて山名時氏を神南に拒ぐ義詮軍敗ぶれて將に自殺せんとす則祐高氏諫めて之を止む時氏勝に乗じて競ひ進む則祐輒ち起ちて幕を棄げ衆に令して曰く汝等力戦して死を效し主に報じて名を竹帛に垂れよと衆競ひ進んで奮戦し大に時氏を敗る、備前福岡を加賜せらる十六年時氏兵に將とし

アカマツ ノリナホ

アカマツ ノリムラ

て美作を署し將に倉懸城を攻めんとす則祐貞範等と兵二千を率めて倉懸を援く山名師義別に八百騎に將として之を待つ則祐等其の兵の寡きを見て將に進んで之を撃たんとす會へ阿保眞禪等歸順して將に播磨を襲はんとす則祐法華山等五城を築きて之を守り使を讃岐に遣はして援を細川頼之に求む頼之備前に抵り兵寡きを以て進まず城遂に陥る後諸將と義詮の萬里小路第を助作し功績に坐して一莊を削らる二十四年姪光範等を率て弟氏範を天王寺に擊ちて之を走らす建徳二年建仁寺大龍庵に死す其の子義則、義祐、將則、師範、朝範あり(大日本史)

アカマツ ノリナホ 赤松則尙は滿祐の第二子なり彦五郎と稱す嘗て兄教祐と與に兵を起して意を得ず備前の甲島に奔りて肥後郡に自殺す(野史)

アカマツ ノリフサ 赤松則房は義祐の子、幼字彌三郎、幼より織田信長に仕ふ天正十一年羽柴秀吉に賤ヶ嶽に從ひて五位下に叙し上總介に任ず十三年五月食邑を阿波一萬石に徙す關原の亂大阪に黨し軍潰を林藪に潜匿して與平信昌の兵に殺さる(野史)

アカマツ ノリムラ 赤松則村は初め次郎と稱す父を茂則と曰ひ具平親王の後なり世々播磨に居す祖久範始めて赤松を以て氏と爲す則村夙に禪教を崇み雅量して圓心と號す性狹豁にして大志あり事々人の下に出づるを欲せず元弘の亂に子則祐兵部卿護良親王の令旨を斷らして至るや則村深く以て榮と爲し本國佐用莊若山に城きて義を擧ぐ奔附する者千餘人乃ち兵を出して杉阪山を守り以て山陽山陰の二道を経つ三年春中國の兵六波羅に赴き援ふ則村貞範を使はして之を舟阪山に拒ぎて伊東惟群等二十餘人を擒にす悉く其の死を免るし之を待つこと更に厚し惟群恩に感じ還りて三石山に據り以て則村の爲めに守る是に由つて兵勢益々振奮進んで摩耶山に城きて之を守る北條仲時兵を遣して來り攻む則村敵を險處に

誘ひ則祐等をして高きに乗して連射せしむ敵軍擾動す因て兵を縱ちて突戦し大に之を取る仲時等復た兵一萬を發して之を攻む則村城を出で、迎へ撃つ途に敵軍の行程を料るに其の至るは當に明日に在るべし會へ急に雨至る民家に入て之を避く敵兵奄ち至る則村突出して血戦す左右纒に五十餘人衆寡敵せず兵漸く殲きて唯だ六騎を餘す則村便ち笠號を巻きて敵の兵中に混ず適く敵將將に馬に上らんとせり則村伴りて賊者の爲ぬして馬より下りて試みに扶けて之を乗す敵將悟らす是に於て復た騎して敵衆を目し戦に赴く狀を爲して之れを欺き馳せて本軍に還る明日進んで敵を瀬川に攻め大に之を破りて數百人を殺獲す勝に乗じて夜京師に向ひ火を民家に縱ちて進む敵兵二萬桂川に臨んで陣す則祐單騎先づ渡る則村乃ち衆を麾し悉く渡る敵兵氣を奪はれ戦はずして走る則村長驅して京師に入る光嚴帝之れを六波羅に避く時に日已に昏る則村兵寡く且つ疲るゝを以て軍を按して前まず俄かにして敵騎を縦ちて後ろより掩撃す我が軍大に敗る陣を整へて復た戦ふ又た敗る遂に山崎に走りて更に散卒を集め詐りて左近衛中將源定平を以て聖護院宮と稱し男山及び山崎に營し以て水陸兩路を扼す仲時兵を遣はして來り攻む則村之れを聞き兵を率ゐて先づ發し京師を距る三里許りにして道に沿ひて伏を三所に置く敵至れば則ち伏發し楯を擁して射る敵戰はずして過ぐ第二伏發し縱横衝突す第三伏將に其の後ろを繋斷せんとす敵駭き顧みて大に潰ゆ尋て源定平僧良忠等と六波羅を攻めて利あらず時に後醍醐帝移りて船上に幸し源忠顯に詔して則村を助けしむ則村名越高家と久我暲に戰ふ部下射て高家を殺す敵軍崩潰す則村進みて東寺に陣し源忠顯足利尊氏等と三面より逼まり遂に進んで俱に六波羅を圍む北條仲時益光嚴帝を奉じて東に走る道にして皆な誅せらる則村の功勳最も多きに居る尋きて諸子を將て車駕を兵庫に迎ふ帝蹕を駐めて自ら之を勞して曰く恢復の功は汝の忠效に依ると錦直垂を賜ふ從ひて京師に入

アカマツ ノリナホ

アカマツ ノリムラ

る時に護良親王志貴山に在り則村往き從ひて京師に還る時に朝廷功臣の爵封を定むるに異議紛紜として與奪常なし則村の功を論じて播磨守護職を賜ひ未だ幾ばくならざるに故なく職を被ひ獨り佐用莊を食ましむ是に於て則村大に歎望を懷き心を常に樂ます、足利尊氏東征するに及びて子貞範之に従ふ尊氏反跡稍々露はる則村陰かに之に附す會へ丹波に兵起る守護確非盛景援を求む則村應ぜず遂に尊氏の命を以て近郡の兵を招集す延元元年尊氏京師に逼まる則村之に會す尊氏則村に授くるに播磨守護を以てす則村等大に官軍を山崎に敗ぶり退ひて京師に至る尊氏の兵庫に敗走するや則村密に説きて曰く士卒疲弊せば功を濟す可らず宜しく暫らく筑紫に逃れて息を休め銃を養ひ以て徐るに再舉を議すべし臣播磨に在りて中國を控壓せん(中略)今官軍は毎に錦旗を建つ而して我れ之を設くることを得ず何を以て惡名を免ることを得んや鎌倉滅してより持明院上皇内齋快を懷く若し其院宣を請ひ錦旗を揚げて以て麾かば天下の兵皆な景從せざるなけん是當今の良策なりと尊氏之に従ふ則村乃ち白旗城に城きて未だ畢らざるに江田大館と室山に戦て利あらず新田義貞斑鳩澤に至る則村使を遣はして之を給きて曰く臣は元弘の草創にして恩賞殊に薄し是れ朝廷を憾む所以なり若し臣が罪を咎めず播磨守護を復せしめば願くは重ねて後效を致さんと義貞之を信し馳せて京師に奏す往反旬餘則村城壁を完繕す乃義貞に報じて曰く本國守護は足利將軍已に之を許す復た翻覆の論旨を煩はさざと義貞怒りて圍み攻めて月を陰ゆ則村潛に則祐等を遣し尊氏に説きて曰く城中食乏し滅亡旦夕に在らん若し白旗破れば中國の咽喉悉く敵有とならん云々と尊氏乃ち兵に將として發す義貞遂に圍を解きて去る見高範長義貞の軍に赴く則村那和に要撃す範長自殺す往きて尊氏に室津に會し足利直義に從ひて補正成と漢川に戦ひ之れを破る正平五年死す年七十四法雲寺と稱す(大日本史)

アカマツ ハルマサ

アカマツ ハルマサ 赤松晴政は本名は政祐父義政其の舊臣浦上村宗に就せらるる政祐小寺政職、浦上村國、兵栗心有等の爲に保護せられて淡路に赴き後播磨に還りて兵を擧ぐ村宗乃ち兵を率めて之を攻む享祿五年村宗細川常恒を援けて天王寺に陣し以て細川晴元を伺ふ政祐父の警を復せんと欲して密に晴元に應ず而して陽はに常恒を援くと稱す時に村宗の陣中風説すらく政祐晴元の兵を救ふと是より播磨人往々浦上氏に叛きて赤松氏に屬す六月晴元常恒と天王寺、今宮、及び木津に戦ひて大に之を破る殺傷頗る衆し敗兵の亡くる者又多く水中に陥る村宗亦溺死す天文七年政祐置鹽山に在り尼子政久山名豊治と謀りて但馬より入寇す國人弘岡某叛きて之に黨す小寺、明石等又叛きて高砂を襲ふ政祐淡路に走り馳せて阿波に入り細川晴元に懇る八年四月還り來りて明石城を陥れ往りて三木城に居り十一月大將軍義晴諱字を賜ひ名を晴政と更む初政祐從五位下に叙し左京大夫に任す後下野守と改む尋て別所氏の尼子氏に通ずるを聞き遠に界浦に徙りて海會寺に入り九年正月播磨英賀に到る後館野に徙る晴政に弟あり佐用中書と稱す晴政竊に其の邑を奪はんと欲し中書を館野に迎へて招諭す其の醉臥し傍ら入なきを見て之を殺す中書の臣佐野十兵衛尼子晴久に従ひ播磨を伐つ先導たらしむと請ふ晴久山中幸盛を以て將として播州を伐ち駒山城を拔きて之に據る尋て幸盛毛利氏の北討を聞き兵士を十兵衛に託して出雲に歸り再ひ出るを得ず駒山孤旅たり晴政和を乞ひ城を取りて十兵衛に縁すと云ふ子義祐あり(野史)

アカマツ マサノリ

赤松政則は性存國史實錄に雅存に作る赤松政則の子にして義則の孫なり嘉吉の亂に僅かに九歳家人石見雅助晴光に携へて京師に逃れ建仁寺の僧天隱龍澤に託して從弟と爲す髪を削りて勝嶽と號し性存房と稱し以て免かるゝを得たり一に雅存と號す後ち還俗し政則を生む雅助左大臣藤原實光に筮仕し密かに赤松氏を再起せんことを願ひ累

アカマツ ミツスネ

世の舊記を出たして懇請すること多年なり實光其の意を憫み爲めに足利幕府に請ひ且つ雅助に告ぐるに先づ一の功を建つべきを以てす雅助乃ち間島雅光、中村貞友と相ひ議して南朝に適きて詐りて任を求む長祿二年六月雅光等終に南帝を弑し神璽を奪ひて還る是に於て大將軍義政舊科を赦して政則を召し加賀の半國及び勢州高宮、雲州宇賀、備前新田等の莊を賜ふ山名持豊患りて潜に人をして雅助を刺さしむ三年六月舊故の兵士備前三箇保に入る守護山名氏の代官禦き戦ふ兵士多く死す事幕府に聞ゆ山名教之非據に處せられ三箇保終に赤松氏の有と爲る十月政則の兵士加賀に入る富樫成泰成作の臣岩室某兵を聚めて拒き戦ふ幕府詰問して嚴に争戦を禁し加賀の半國を割きて政則に與へしむ寛正六年十一月元服す大將軍義政諱字を授けて政則と稱す政則字は二郎後ち兵部少輔に任し伊豆守を兼ね大膳大夫左京大夫となる細川勝元の女を娶る應仁元年勝元に黨す五月勝元政則をして播磨を平けしむ政則營を姫路に構へ兵を率めて京師に入る山名教之支へ戦ふ互に傷死衆し二年十一月政則所別當となる浦上則宗を以て所司代と爲す文明元年初じめ政則の留後中村五郎左衛門功を建てんと欲して朋友十許人と胥議す丁亥の年十月兵を起して院莊に入り零々勝利を得敵東郡妙見及普薩寺和介山等の寨に據りて之を拒ぐ政則廣岡祐貴をして赴き援けしめ進んで美作に入り山名掃部頭と戦ふ既にして掃部拒き死す五郎其弊に乗して掃部の子彦房を盡期山に攻めて之を敗る是に至り播磨作三州悉とく政則の有となり勢威圓心則祐存するの日に成せす五年閏二月將軍義高奏し請ひて政則を從三位とす四月坂田に特し病發し久廣寺に入りて薨す歳四十一、三子あり長義村、次は晴定入道して性傳と號す次は元祐孫二郎と稱す(野史)

アカマツ マサムラ

赤松政村は左京大夫義村の實子なり幼名を才松丸といふ父義村の時老臣浦上村宗逆威を國中に振るひ主人義村を警居せしめて才松丸(當時七歳)を立て嗣と

アカマツ ハルマサ

なし後ちに刺客をして義村は逆す才松首服して政村といふ年少といへとも父の横死せる浦上の所爲なるを知り深く之を憤り恩顧の志士と誓ひ浦上村宗を襲ちこれを殺す時に之應永中なり政村の没する年詳ならず(約成錄)

アカマツ ミツスネ

赤松滿祐は大膳大夫義則の長子なり滿祐左京大夫に任せられ父卒して播磨の守護職を襲ふ初め滿祐の祖父及び叔父貞範并に軍功を以て攝津、因幡、備前、播磨、美作、五州の守護職に補せられ父義則播磨の封を襲へり時に貞範の孫持貞支屬なりと雖も將軍足利義持の寵遇に因りて備前二州の守護職に任せられ驕傲不禮にして而して更に滿祐の播州守護を奪はんと欲し屢々之れを義持に請ふ義持意に之れを許可して未だ發せず應永三十四年十月滿祐義持の持貞に左袒するを聞き火を其居第に縱ちて播州に還り白旗城に據りて叛す義持怒り細川持元及び山名時照をして之れを伐たしむ是時に當りて持貞寵恩に憑りて益々悖禮なるを以て列侯群將痛く之を忌み胥議して幕府に至り滿祐を赦さんとを請ひ十二月に至り群將強請して已まざる義持亦稍々持貞を厭ひ終に命じて自殺せしめ持元等の軍を回へす是月十七日滿祐京師に入り尋て髪を剃り入道して性具と號す貞範の孫に傳へて三州の守護に封せられ龍を侍りて是に於て諸士目を過つて其の君に因るを以て衆長擧りて未だ殺せず滿祐之れを地宗族諸將と胥議して政則に自殺す義持乃ち之れを懲る滿祐因りて永享元年大將軍義教繼きて立ち性具故の如く幕府に任へ備、播、作、三州に封せらる四年八月幕府命して性具を禁錮す是れより先き幕府の侍女三人罪ありて死を賜ふ性具の妹女亦た其の中に在るを以てなり性具之れを怨憤し密かに上杉禪秀の餘黨と通して亂を謀り國に就く十一月幕府命して來り討つ性具拒戦して兵士數百を傷け竟に降を乞ふ九年九月性具七條袈裟を義教より賜はる此時に當り族人貞村と云へるもの美見を立て美教に嬖幸せらる義教謂らく貞村は貞範の嫡長孫なれば以て、族長と爲す誰れか以て非義と爲さんやと是に於て密に貞村を以て性具に換ふるの

アカマツ ミツスネ

意あり嘉吉元年六月義教意決し將に備、播、作の三州を割きて貞村に與へ以て性具の勢を滅せんとす而して性具の子致祐之を漏れ聞き以て性具に告ぐ性具乃ち族を聚めて謀叛す上原對馬と云へるもの諫止すれども聽かず 後史後編に赤松記云、性具の孫に傳へて三州の守護に封せられ龍を侍りて是に於て諸士目を過つて其の君に因るを以て衆長擧りて未だ殺せず滿祐之れを地宗族諸將と胥議して政則に自殺す義持乃ち之れを懲る滿祐因りて永享元年大將軍義教繼きて立ち性具故の如く幕府に任へ備、播、作、三州に封せらる四年八月幕府命して性具を禁錮す是れより先き幕府の侍女三人罪ありて死を賜ふ性具の妹女亦た其の中に在るを以てなり性具之れを怨憤し密かに上杉禪秀の餘黨と通して亂を謀り國に就く十一月幕府命して來り討つ性具拒戦して兵士數百を傷け竟に降を乞ふ九年九月性具七條袈裟を義教より賜はる此時に當り族人貞村と云へるもの美見を立て美教に嬖幸せらる義教謂らく貞村は貞範の嫡長孫なれば以て、族長と爲す誰れか以て非義と爲さんやと是に於て密に貞村を以て性具に換ふるの

アカマツ ミツノリ

アカチ イヅ

と爲り以て時を俟つべしと是に於て教祐辭して去り性具終に自殺す時に歳六十一なり親族六十九人之に從死す四子あり教祐、則尙、若松丸、乙松丸と曰ふ(野史)

アカマツ ミツノリ 赤松光範は範資の長子なり從五位下

に叙せられ檢非違使信濃守と爲り攝津守職を襲ぐ正平中足利義詮に從ひて吉野を犯し還りて佐々木高氏に阻害せられ守護職を罷めらるる後細川清氏と官軍を畷田村に拒ぐ(大日本史)

アカマツ ヨシノリ 赤松義則は則祐の長子なり佐々木高氏の外孫を以て足利義満の爲めに寵せらるる則祐死して播磨備前守護を襲ぎ左近衛將監上總介兵部少輔を歴て從四位下大膳大夫に至る義滿赤松及び山名一色京極氏を以て侍所と爲し

京師に居て詔獄を聽断せしむ因て四職と稱す元年中山名氏清と京師に戦ひて之を敗ぶる功を以て美作守護を加授せらる美作服せず兵を率ゐて擊ちて之を平らぐ天皇勅して鳳凰桐の章を賜ふ幕府亦二引兩の章を授く又因州知頭郡、但州朝來郡、攝州中島等の地を賜ふ髪を剔りて性松と號す法名は圓齋義則

人と爲り短小因て世に三尺入道と稱す應永卅四年九月卒す年七十義則五子あり長は滿祐次は祐元常陸介と稱す次は則友出羽守と稱す次は則繁二郎と稱す入道して性通と號す季は義雅伊豫守となる義雅滿祐と城山に自殺す孫政則あり(大日本史、野史)

アカマツ ヨシムラ 赤松義村 中國太平記に政村に作る姫路城主小字は才松丸政村の長子、明應八年播、備、作三州亂れ東西黨を樹て、相ひ戦ふ浦上村宗才松丸を擁して鹽屋城に入る幕府命を下して東西和睦す是に於て義村二郎と稱し上總介に任

じ下野守民部少輔、播磨守を兼ね永正四年九月枝屬播磨守異圖を懷く平源二等之れに黨す義村兵を率ゐ撃て播磨餘黨永忠、永清を獲永正八年八月細川澄元を援けて兵庫浦を経て河原の林正頼を鷹屋城に攻む十五年十一月又兵を發して浦上村宗を三石城に攻む勝たす十六年義村松山城を攻む城主衣笠村氏城を棄て、走る十七年作人中村五郎左衛門村宗に通じ岩屋城に據りて兵を擧ぐ義村小寺則職をして赴き撃たしむ岩屋危急なり村宗陰に下野守村秀の弟中務丞五郎と謀を通じ急に則職を襲ひて之を殺す是に於て村宗強て義村をして退隱せしめ七歳の兒を立て、家督となす義村髪を剃りて常印と號す是より先き大將軍義澄其子義晴を義村に託す十二月義村義晴を奉り潜かに置鹽を去りて榛谷に到り族人衣笠五郎左衛門、會弘岡左京進、別所則之等に頼りて兵を五著に起す村宗和を乞ふ大永元年七月村宗義晴を奉りて京師に入り義村を室津實佐寺に幽す二年九月義村村宗の刺客菅野、花房、岩井彌六等の爲に弑に遇ふ法名は了堂姓圓禪光院と號す子晴政あり(野史)

アカマツ ラムダイ 赤松蘭臺は播州赤穂の儒者なり字は大業、蘭臺は其の號、太郎平と稱す滄洲の長子幼より詩文を善くす其の名稍々顯る天明中父に先て歿す年五十一著書赤城風雅集、赤城文獻志、弊帚集あり(續近世書目録、續諸家人物誌)

アカマツ ロサイ 赤松魯齋は播州赤穂の儒者なり字は大經五郎と稱し魯齋と號す滄洲の二子、出て、河野氏を嗣く詩を善くす須磨懷古七言律詩三十首を作る二十三歳にして歿す魯齋詩鈔を著せり(續近世書目録、續諸家人物誌)

アカマツ エンシン 赤松圓心「アカマツノリムラ」佐に任ず天正二年九月廿九日土寇と勢州長島に戦ひ敗る信長危急に迫る春光大隅守信廣と共に奮戦して死す(信長史)

アカイ アクウエモム 赤井悪右衛門は勇猛の士なり家清の弟、名は直正、右衛門尉と稱す丹波人、兄家清水上矢

アカマツ ミツノリ

アカチ イヅ

田船井の三郡を領す悪右衛門年甫て七歳怪物あり夜人を惱ますと聞き潜に往て之れを斬る熱視するに石佛像なり衆目して悪右衛門尉となす外舅某野某野直正怒て某を殺し族某野を稱す永祿十二年織田信長明智光秀をして來伐せしむ悪右衛門之に降る天正七年光秀波多野氏を滅し郡邑を侵掠す直正孤立城に墜りて固拒す六月光秀城に迫る炎暑甚きを以て軍を收め八月再び來る秀吉脇坂安治をして光秀を加援せしむ光秀兵を併せて圍攻す是の時直正疔を患ふ布を以て腫をつゝみ遠兵を率ゐ出戦す士卒皆な死す直正安治と槍を接し遂に戦死す(野史)

アカ井 イハキヨ 赤井家清は丹波の人、右兵衛と稱し天文申上矢田船井三郡を領し波多野氏に屬して幼より戰爭に臨みり弘治元年國人葦田某等亂を起す家清兵を率ゐて之を撃ち葦田等を擒にして之を平く是の時創傷を受け三年を歴て弘治三年二月に卒す年三十三子忠家尙幼なり叔父悪右衛門之を輔く後忠家秀吉に仕へて采邑千石を賜ふ慶長庚子の亂家康に從ひ千石を加賜す子孫幕府に仕ふ(野史)

アカ井 カゲトシ 赤井景俊は勇猛の士なり藤太郎と稱し丹波國の住人、臂力衆に超ゆ一の谷の戦ひに九郎判官源義經に從ひて奮闘數刻敵二十餘名を斬り更らに進みて能登守教經を刺さんと欲し露はれて戦死す(本朝武功正傳)

アカ井 キヨム 赤井龜年 是は俳人なり阿波徳島の人、龜年は其の號、一に優然亭の號あり通稱祐助と云ふ弘化中の人其の俳歌に曰く「散出して休みの見をぬ紅葉かな」(俳歌海内人名錄)

アカ井 トウカイ 赤井東海は高松藩士十郎左衛門名は直道の子母は内田氏なり名は細字は士異小字秀之助嚴三と改む別に東海と號す驅幹雄偉少より武を好み十字槍を善くす年甫めて弱冠小技の爲すに足らざるを知り遂に家を弟吉兵衛に譲り古賀精里に昌平齋に從ひ戸を鍵して力學すること五年嘗

て嗜血を患ふ衆醫之を危む東海意とせず暇れに稗史を著し以て自から還る坊間中井履軒の名を冒して刻する所の昔々春秋なる者其一也精里嘗て餡糰汗を諸生に與ふ東海食はす精里性み問ふ對て曰く東海生れて武門に長し酒を嗜みて甜きを忌むと精里憤然語らず然れども此れより東海を待つと厚きを加ふと云ふ文化祭酉年齋を辭して卜居教授す東海時に二十有五文政十二年藩侯召して十口俸を賜ひ世子に侍讀せしむ爾後屢々祿を加へ秩を陞せ遂に使番に班し米百石を賜ふ文久壬戌年十一月十四日病むて没す享年七十有六谷中妙福寺先塋の次に葬る(事實文編)

アカ井 ヒロカゲ 赤井熙景は上野の人、山城守と稱し別髪入道して緒蓮と號す又但馬入道と稱す弘治二年正月館林の城を築きて之に徙居す火袋稻荷を外郭に祀り是を尾曳郭と名く蓋し此地火袋稻荷神の神託によりて築きしものなればなり永祿二年十月死す子勝連勇力を以て宇都宮廣綱に愛せられ五百貫文の地を予へらるる後ち故ありて自殺す(野史)

アカ井 メイケイ 赤井明啓は書家なり文次郎と稱し明得水と號す加賀の人書法を佐々木志津摩に學びて頗る其の風を善くす著はす所筆法彙引、時用文案、俳諧園梅あり又遺蹟に眞字千字文、草字千字文、八景詩歌、同文異辭、四箴、獻壽法帖勸學文、字府永凝帖あり(鑑定便覽、續近代名家書目録)

アカ井 イヅ 赤井伊豆は武勇の士なり父を美作と稱す、淺井長政に仕ふ長政亡ひて、美作之に死す、時に伊豆幼にして僧となり、多賀邑に匿る、十二歳の時、偶々外に遊ぶ武士其の前を過く伊豆誤まちて之に觸る、其士怒り、拳を擧て其の頭を毆つ、伊豆其の佩刀を奪ひ、一擊の下に之を殮す是に於て多賀を逃れて赤尾に潜む、年稍々長して、京極高次に仕へ、終に部將となる、慶長中、高次關東に屬し、大津城に籠る大阪黨、毛利元康久留米秀包等、三萬七千餘の兵を擧げ、來り攻む、伊豆城を出て數人を斫り、敵を卻け將に城に入んとし、敵

アカチキ ロギウ

アキツキ タチナガ

に向て足を伸し、寛々として鞋の紐を緊す、退兵其勇威に恐れ、敢て追らず、既にして城内反心者あり高次城の守る能はざるを知り開城して高野に赴む、其時伊豆、高次の駕の脇に立ち、敵中を經過するに、意氣自若たり衆指目して其大膽に驚きたり(義経行状)

アカツギ **ロギウ** 赤萩露牛は俳人なり初め曾湖十に學び花菱と號す後内藤露沾子に從ひて學ぶ(俳林小傳)

アカヲ **シウジツ** 赤尾秀實は江戸の儒者なり字は子毅、關州と號す安永三年五月十二日歿す谷中妙雲寺に葬る(江戸名家一覽)

アカヲ **ヨシツグ** 赤尾吉次は江戸の金工なり權左衛門と稱す父は福井侯の武臣なり同名三人あり

アキカゼ **ニヨウボウ** 秋風女房「カボチャノモトナリ」の傳を見よ

アキノ 明子は太政大臣藤原良房の女にして文德帝の皇后なり清和帝及び儀子内親王を生む世に所謂の染殿后是れなり常に書を好み尤も巧に草花を畫き給へり豊臣秀吉其の畫し所の白菊の屏風を得て之れを珍重すと云ふ昌泰三年五月崩す年七十二或は云ふ七十三と(日本史、本朝書紀)

アキノ **ナオシムウ** 顯子内親王は後水尾帝の女にして東福門院の生む所なり寛永六年八月生る女三宮と稱す新殿を岩倉に建て、徙り居れり岩倉御所と稱す延寶三年閏四月薨す年四十七、妙莊嚴院と號す五月東山光雲寺に葬むる(野史)

アキ **サダトシ** 安藝貞俊は女科醫なり守家の後裔、大膳正たり天正中豊臣氏の召に應じて后宮の醫藥を掌る(皇國名醫傳)

アキサト **リタウ** 秋里籬島は京師の人なり名は舜福字は湘夕、京の水及び諸國の名所圖會を著す

アキ **サミツ** 安藝實光は土佐の士なり太郎と稱す實康の子三十人の力を兼ぬ屋島の役弟次郎と平教經を執へんと

欲し相搏つ教經次郎を抛げ實光と相抱きて海に投して俱に死す(平家物語)

アキノ **ゼンシ** 秋篠禪師「ミナモトノキヨシ」

アキノ **タカコ** 秋篠高子は嵯峨帝の更衣なり承和九年從五位上に叙せられ嘉祥二年從四位下に進む後ち正四位下となる源清を生む(大日本史)

アキ **ダウジユ** 安藝道受は女科醫なり通稱好菴、曲直瀬道三に從ひて學ぶ承應中徳川幕府に擢てらる(皇國名醫傳)

アキヲ **サチスエ** 秋田實季は愛季の子、初め字は下國安東太郎、秋田を以て族稱となす出羽檜山の城に居る實季兵二千餘を率めて角館を伐つ戸塚盛安及檜丘の城主小里原右衛門尉、本堂義親又平勘解由等兵千餘を率めて迎へ戦ふ實季大に敗走し僅かに三十餘人と船岡に入る土崎藩の城主秋田友季實季に呼く實季伐て屢々利あらず後ち援軍を得て遂に之れを抜く天正十八年秀吉東征する時實季初めて請す証明の役兵を率めて筑紫の行營に居り慶長庚子の亂徳川家康會津を征するに及んで實季關東に與みして三成の黨大森宗近等を伐つ七年佐竹義宣封を秋田に貶せらる因て實季兵戸の城を賜はりて邑五萬石を食む十年九月從五位下に叙せられ秋田城介に任せらる大阪の兵起る時秀忠に從ひて功あり寛永八年致仕す後ち故ありて伊勢の朝熊に留せらる髪を剃りて凍刺と號す萬治二年朝熊に卒す法名岳隆梁空と曰ひ高乾院と號す子俊季あり(野史)

アキタ **ジヤウノスケ** 秋田城介「アダチカゲモリ、アダチヨシカゲ、アダチヤスモリ」を見よ

アキタ **トシスエ** 秋田俊季は實季の子、初の字は安東太郎、兵戸城に居り邑一萬石を食む元和元年正月從五位下に叙せられ伊豆守と稱す後河内守と改む大阪の役に關東の軍に加はり天王寺に戦て功あり正保二年封を三春城に徙さる五千石を加賜す子盛季嗣く(野史)

アキヲキ ロギウ

アキツキ タチナガ

アキタ **ヨシスエ** 秋田愛季は陸奥の人姓は阿部氏、陸奥六郡の酋長頼時の二男厨川貞任の後なり初の字は下國安東太郎、同族友季の後ちを繼ぎ秋田藩及檜山の地を併せ領し秋田の城に居り秋田城介と稱す細田信長起るに及んで遙かに款を送り信を通し毎歲絶えず關白秀吉に迄てもこれを變せず天正五年秋從五位下に叙す八年秋從五位上に進む是より先き羽黒山の別當卷敷を國中に配付す天正十年豊島に到る豊島の城主島山重村仁加保舉賊の女婿たり因て浮言あり羽黒山の衆徒豊島と謀を通し秋田を襲はんと欲す故に配せずと於是愛季兵を起して豊島を攻む轉じて高岡の城を攻て之れを下す重村懼れて仁加保に奔る城落て陥る愛季遂に羽黒山の山徒を殺さんとす山徒之れを聞き湯殿月山と議り兵を莊内麻島大山大梵字等に募り海陸を分けて進む愛季の隊長大平八郎五郎赤尾津の境に屯し男鹿の隊長浦本親季と山徒を海上に掩撃す山徒戦ひ敗れて遁走す尋て成らざるを行ふ後數年を歴て金村其の城を復するを得たり十五年九月卒す(野史)

アキ **チムバウ** 安藝椿坊は有力の僧なり父井上與三右衛門就次の子なり幼より出家し椿坊と號す後還俗して武士に復さんと欲す而れ共父以て儒術として許さず然るに十六歳の時尼子經久と藝州に戦ひて敵三騎を突き倒せり是に於て父其勇功に感じて之を許せり(本朝武功正傳)

アキツキ **タチナガ** 秋月種實は本姓大藏氏後漢の孝靈皇帝より出づ帝の子亂を避けて歸化す中子忠孝直播磨の大藏谷に住し大藏朝臣の姓を賜ふ後裔種實と云ふものあり將軍頼朝の時始めて筑前秋月城を築き族を秋月と稱す十五世文種全祖原田筑紫氏と共に毛利氏に通す弘治三年七月大友宗麟秋月を攻む文種子晴種と拒き戦ひ力竭て自殺す種實は晴種の弟なり黒帽子九と稱す家人携て山口に走り毛利氏に投す永祿十年龍造寺隆信勢強盛なり高橋鑑種種實を召し約して父子と爲り師を藝に乞はしむ元就兵二千を遣し種實を將として秋月に入

る臼杵鑑連鑑運鑑理兵二萬餘に將とし來て秋月を攻む八月城陥る種實遁て古所山に據り急を鑑種に告げ援を乞ふ鑑師來り救ひて利あらず種實力窮し臼杵氏に因て田原に降る田原爲めに大友氏に謝す宗麟之を許し種實の弟元種を質とす豊筑の諸族皆大友氏に降る天正五年龍造寺隆信種實及び筑紫廣門と筑前を伐つ大に敗る七年種實又大鶴鑑尙と共に大友氏に叛く志賀道輝高橋紹運伐て之を敗る種實終夜走て彌永に還る八年十一月種實尙は數郡を有つ大友宗麟朽網宗隆を遣り井上城を攻めしむ種實赴き援け大に宗隆を敗る幾くも無く戸次道雪高橋紹運來り攻む種實之と石坂に戦ひ大に敗る十三年種實筑紫廣門と島津に通す巖屋を攻め利あらず種實の卒太宰府の民舍を燒き延て菅公の廟に及ぶ種實深く神を敬す故に放火者を捕て族殺し別廟を夜須郡栗田に建つ是年長門守と更め又筑前守と稱す十四年薩人と筑紫城を攻む十五年關白秀吉西討す種實薩を援け大隈城に據る四月秀吉進て岩石城を屠る種實力竭き大隈を棄て秋月に還る秀吉營を大隈に移す薩軍每戰皆敗る種實免かれざるを知り髪を削り細衣を着す種實をして城を以て降らししむ秀吉諸城を沒取す事平ぐに及び其の舊家なるを憐れみ種實に日向の財部三萬石を與ふ種實宗隆と號す久からずして卒す法名笑翁子種長嗣く二男元種高橋氏を繼ぐと云ふ(野史)

アキツキ **タチナガ** 秋月種長は種實の子、三郎と稱す父と大隈城に據る秀吉營を香春嶽に移し岩石城を陥る種長父と大隈を棄て秋月に歸る次日秀吉進て營を大隈に移す父子終に出で降る九州平ぐに及び財部城を賜ひ從五位下に叙し長門守と稱す文祿三年征明の役黒田長政に屬し王城に入る八月韓の守將を擒す慶長二年八月毛利勝信と香州城を攻め之を援く關原の戦に弟高橋元種及び相良長每と大坂に屬す後西軍の振はざるを見密に謀して守將垣見熊谷木村の父子を殺殺し首を水野勝成に送る本丸の守將福原直高加々江重望の孤子を

アキツキ タチヒデ

逐ひ出て降る尋て城陥る種長因て家祿を全うするを得たり慶長十九年卒す(野史)

アキツキ タチヒデ 秋月種頼は種長七世の孫にして種美の子なり従五位下に叙し山城守と稱す後佐渡守に改む性學を好みて慈仁なり租税を軽くし賦役を減ず衆皆な悦ぶ文政二年卒す年七十六卒する時領下皆悲しみ父母を失ふが如しと云ふ子孫世々俟たり(野史)

アキツキ タチヒデ 秋月種道は對馬守大藏春實の後裔なり筑前權守と爲る建武中刺地、宇治、の族と兵を起して勤王す尋て足利尊氏を多多良濱に拒く軍敗るゝに及んで太宰府に走る敵兵追及す種道其の黨二十餘人と返關して之に死す秋月氏世々西邊に居て門族頗る多し然れども其業遂げず時人之を憐む(大日本史)

アキツキ トウセキ 秋月等碩「トウセキ」

アキトキ ケン 秋時憲は江戸の儒者なり字は智之小丘園と號し辰之進と稱す天明三年七月十八日歿す小石川三百坂慈照院に葬る(江戸名家墓所一覽)

アキナガマロ 商長磨呂は其の傳を詳かにせず和歌を善くするを以て名あり詠歌は萬葉集其の他諸書に出づ(萬葉集傳者傳)

アキノ バウ 秋坊は加賀金澤の人風流を以て名あり嘗て俳諧を以て諸州に遊び湖南を過ぎて幻住庵を訪ふ芭蕉翁口吟して曰はく「我宿は秋の小さきを馳走かな」と秋坊謝して鞋を脱す居ること數日辭して去る翁之を山下に送り別れ臨んで又詠じて曰く「やがて死ぬ氣色は見えず蟬の聲」と其の京を去る郷に還へるに及んでや降雪霽ととして肌を露にさき三衣一鉢の外又之を凌ぐ可きなし因て萬子を訪ふて木炭を乞はんとし乃ち詠じて曰く「寒ければ山より下を飛ぶ鷹に物打荷ふ人ぞ戀ひしき」と萬子答へて「寒ければ山より下を飛ぶ鷹に物打荷ふ人こそやれ」と乃ち木炭を贈くる、其終焉は正月四日

アキヤマ キヨクサム

なり時に友人李東其柴門を訪ふ談笑平生に異なることなし坊忽ちにして曰く余れ新たに曆を作る君請ふ之を聞けど乃ち詠じて曰く「正月四日より此世を去るによし」と言畢つて即ち瞑す李東驚き且つ歎じて曰く「稻つむと見せて失せけり秋の坊」と以て之を傳へず(俳諧奇人談抄、俳林小傳)

アキノフ 章信 「カノアキノフ」

アキノフ 章信 「カノタムセム」

アキノフ 章信 「カノエイリウ」

アキノフ 昌信 「カノキウハクニ代」

アキノフ 昭信 「カノシユムス井」

アキヒロ 秋廣は鎌倉の鍛工なり廣光の弟、貞宗の弟子と云ふ九郎三郎と稱す應永五年八十四歳にして歿す(玉石雜談)

アキモト シス井 秋元子帥は岡崎侯の文學なり名は以正、子帥は其字、喜内と稱す岨夷、淡園等の號あり物徂徠の門人、後ち岡崎侯に仕ふ寶曆中に歿す淡園初稿の著あり(諸家人物名録)

アキモト タカトモ 秋元喬朝は徳川幕府の老職なり初字を甚九郎と稱す戸田忠昌の子にして秋元富朝の外孫なり富朝男子なし因りて喬朝之れが養子と爲る萬治二年十二月喬朝從五位下に叙せられ但馬守と稱し攝津守と改たれ復た但馬守と稱す奏者番、寺社奉行、少老等の職に歴任し元禄十二年冬老中と爲り尋て從四位下に叙せられ侍從に任せらる而して累りに食邑を賜はり武藏河越城に封せられ邑六萬石を領す後ち正徳四年八月卒す歳六十八、喬朝人となり聰明にして士民を惠み禮儀を重んじ平生訟獄を聽きて決せざるあはれは寢食を安せずと云ふ子孫相繼ぎ曾孫涼朝に至り徙りて出羽の山形に封せられ又四世忠朝繼ぎて後ち上野の館林に轉し世々俟に列す(野史)

アキモト ナガトモ 秋元長朝は行朝一本家譜に作はりの子にして初字は孫四郎、越中守と稱す姓は藤原氏、上野の人、長朝

アキツキ タチヒデ

北條氏に隸屬し天正十八年小田原城に據りて之を守る城陥るに及んで國人多く徳川家康に降す長朝亦た井伊直政の勸めに依り赴きて麾下に歸服し食邑を賜はりて上野總社に居る慶長五庚子石田三成の亂に長朝命を受けて會津に赴き旨を直江兼續に達し奥人をして白河關を險ゆるとなからしむ軍平ぐの後長朝再び使を奉して會津に赴く此時に當り深谷の士大沼越後守副使となり豊光寺等亦た從ひ往く上杉景勝降服す慶長六年長朝邑六千石を加賜せられ併せて一萬石を領す後元和八年致仕し寛永五年八月卒す法名は巨嶽元譽、江月院と號す子あり泰朝と曰ふ(野史)

アキモト マサタカ 秋元正忠は初後秋田の鍛冶なり長左衛門と稱す土民より出で好んで刀鎗を鍛す師を江東に求め日夜鍛鍊業成りて歸る文久年中秋田の藩士に擧らる奥羽戦争の時其の作頗る多し之を有するもの皆其の銳利を賞す明治十年六月歿す年四十九

アキモト ヤストモ 秋元泰朝は長朝の子にして姓は藤原氏、上野の人文祿元年泰朝始めて徳川家康に謁見す慶長七年食邑を賜はり八年二月從五位下に叙せられ但馬守と稱す泰朝松平正綱と與に駿府に仕へて親臣と爲る是れを稱して御近習出頭人といふ寛永十八年泰朝甲州郡内の城代と爲り十八年二月甲斐の谷村城に封せられ累りに采邑を増して一萬八千石に至る十九年卒す歳六十三、子あり富朝と曰ふ(野史)

アキモト ユキトモ 秋元行朝一本家譜に作はりの子にして初字は孫四郎、越中守と稱す姓は藤原氏、上野の人なり其の祖宇都宮朝綱の後泰業と云へるもの嘉禄年中上總周准郡秋元莊を領し始めて族を秋元と稱す泰業の八世師朝の後秋元を以て通稱となす其の孫國朝と云へるもの亂を避けて下總に遷居す國朝の曾孫政朝復た秋元莊に住む是れを行朝の父と爲す行朝初め茂兵衛と稱す後ち越中、但馬守と稱し累世管領上杉氏に隸屬し井草、岡庭と共に深谷の宿老とす上野群馬郡總社を食む北條氏武威を山東に震ふに及びて行朝之れ

に屬す後ち天正五年卒す子あり長朝と曰ふ(野史)

アキ モリイハ 安藝守家は女科醫なり貞守の子、守定の孫、大膳亮刑部少輔に歴任す永享中足利幕府の室重子の産を治して功あり乃作州弓削の莊を賜はる(皇國名醫傳前編)

アキ モリサダ 安藝守定は女科醫なり其の先は安藝平氏に出つ因て氏とす延文中室町幕府の室紀貞子の娠を治し養淵を生む其の功を以て尙藥と爲り從四位上に叙し大膳亮に任せらる子孫業を繼ぐ宮中産を治する曾安藝氏に屬す傳へ曰ふ守定春日祠に詣り通宵祈ることあり時に一女子ありて治を求む守定爲に鍼して藥を與ふ女の病頓に癒ゆ乃謝して曰く妾は猿澤の龍女なり君の厚恵を受くるも以て報の爲すべきなし妾に靈方あり願くは以て贈らんと乃一卷を遺して去る明早之を視れば治産方なり傍に龍鱗三片を留む守定之を異とす其の方を試みるに驗あらざるなし遂に女科の名を得と云ふ子貞守刑部少輔たり(皇國名醫傳前編)

アキヤマ キヨクサム 秋山玉山は肥後藩の文學者なり名は儀、一の名は定政、字は子初、儀右衛門と稱す玉山は其の號、又青柯と號す本姓は中山氏、父定勝世々肥後侯に仕ふ叔父秋山需庵醫を以て亦祿を受く玉山出で、其の養子となり夙に其の技を習ふ又學を好み眞水足屏山に從ひて儒を受け博く羣籍を窺ふ發明する所多く人の意表に出つ是に於て藩主靈雲公需庵に命じて更に他子を養ひて醫を嗣かし玉山をして一に儒學を専はらしむ玉山乃ち藩主に從ひて江都に至りて林風岡に就いて業を受く前後留學十年風岡其の才學を奇とす講説の日已れ事故あれば玉山をして代り講せしむ靈雲公卒するに及びて玉山乃ち國に歸る爾後門に入りて業を受くるもの千餘名嗣主隆徳公舉て侍讀とす祿百石を賜ふ公卒して靈威公立つ恩寵甚溥し常に左右に侍りて裨補する所少からず此より公東上すれば玉山必ず從ふ年五十に及んで擢られて鳥銃隊長となる寶曆四年熊本新に學校を建つ名くるに時習館を以

アキヤマ キヨクサム

アキヤマ クワウヘウ

てす玉山の建議に出づるなり玉山之れか提學たり學規十三條を制して學政を整ふ文學の士十餘人を薦めて教員となす功を以て祿を増して二百石となり二十名、鳥銃隊長に進む玉山學をなす極て該博を尙ひ自ら門戸を建るを欲せず詩及び古文詞に長ず嘗て富士山に登りて其の記を作る文勢朗暢、南郭評して富嶽生田以來の記なりと曰ふ而して詩名最も顯はる詩を作るに一字苟もせず其の或は穩かならざるれば沈思累年定まりて後之を出たす嘗て人に語りて曰く天下作者に乏しからず然れども余の如く善く思ふものあらずと玉山江戸に在るや高松公日出侯宇士侯樂山公子等争ひ延て上客とす交通甚廣し護國の徒に於ては服部南郭、同仲英、高野蘭亭、澁井太宰、瀧鶴臺、紀平洲の輩と交り尤も厚し其の國に在るや家老より以下皆待つに師禮を以てす寶曆十三年公東上する時玉山の老たるを憫み命じて家に居らしむ是の冬玉山果して疾む枕に伏する旬日吟哦を廢せず病漸むに及て扶けられて起き端坐紙筆を索め清鏡無底水月似、我の八字を大書し筆を抛て歿す年六十二玉山人と爲り体貌豐腴、眉宇秀發、巍然動かさるの勇あり然れども平居溫柔にして人と争はず人に語りて曰く吾少うして三の願あり富士山に登り學校を建つ二願既に遂げたりと人其の一を問ふ笑ひて答へずと云ふ著書玉山詩集、玉山遺稿あり校正の書は校正墨子全書あり(先哲叢書、近世叢書、近世名家著述目録)

アキヤマ

秋山義時 秋山義時は揚心流柔術の祖なり四郎左衛門と稱す長崎の人初め武官と云ふ者に學ぶ後自ら

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ

研究して一派を立つ(武術叢書)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アケチ ミツハル

て嗣なし家康萬千代をして其の家を繼ぎ氏武田を冒し信吉と名づけしむ十九年津摩病んで其の采地下總萬飾郡小金邑に死し日上と法名し郡の本土教寺に葬むる墳墓に一松樹あり土人呼んで日上松と曰ふ(津摩甲斐國志)

アキヤマ

秋山信友は武田氏の臣なり新左衛門信任の子なり伯耆守と稱し武田氏に屬す天文十五年信友を友を擢して士隊長となす明年信友東郡を伐つ信友をして侵地を鎮平せしむ弘治二年伊奈郡悉く平々信友高遠城に居り後勝頼高遠に徙るに及び信友飯田城を鎮す是時に當りて山縣昌景駿州山に據り信友と俱に參遠尾濃の地を侵奪す元龜元年十月兵二千を率めて郡邑を侵奪し濃參の兵と美濃の上村に戦ひて之に克ち明智城を抜き遠山入道宗叔父子及び首級四百八十餘を獲たり以て甲府に遣る折野御原等拒く能はず皆な卻き走る味方原の戦に信友家康を獲んと欲し法を犯して之を追ふ果さず天正元年二月信友美濃を伐ち岩村城に薄る城主遠山景任先づ卒し子勝長幼なり故に養婦家人と城を守り險に據り抜けず信友使を遣し養婦を娶り幼兒を撫育し門戸を保つを以て養婦氏許諾す信友城に入り養婦に醜し勝長を執へ甲府に送り織田氏質を納るゝと稱す信長甚し近郡多く信友に屬す三年長篠敗れて後國勢始めて衰ふ信忠師數萬を督し來國守信友兵二千を率めて險に據り拒守す敵水島山に陣し壁に薄る城中糧乏し月を歴て救援至らず糧食殆んど竭き兵力衰耗す信友圍を衝て走らんと欲し果さず城中益々困む信友人に懇りて信長に請ひて曰く衆の死を救さば余爲元貞房と共に城を致して去らんと信長併り諾す三人城を出つ信忠兵を伏し之れを路に要し悉く捕へて長良川に磔殺す信友死に臨み誓りて曰く我れ信長と姻族たり何爲れ此の如く殘忍なるやと切齒して又曰く彼の終を觀るべしと乃ち瞑す(野史)

アキヤマ ヨシトキ 秋山義時は揚心流柔術の祖なり四郎左衛門と稱す長崎の人初め武官と云ふ者に學ぶ後自ら

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

アキヤマ ツマ 秋山津摩は越前守虎康の女なり下山と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後徳川氏に仕へ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山支番家康に屬して忠あり不幸にし

アキヤマ ソム 秋山遜は熊本侯の備員なり孫太夫と稱す玉山の子(鑑定便覽)

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪は豊前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む莊兵衛と稱す荷田春海の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる(鑑定便覽)

しと光秀驚きて曰く何を以て我が大事を知ると光春曰く何ぞ君が問の奇なるや君常に信長に擁護は臣の能く知る所なりと光秀曰く然り今將に信長を討んとすれ共汝が力を假らざれば能はず但恐る汝が之に従はざらんとを故に汝若し拒まば汝が生命を得んと欲せしなりと光春曰く先づ臣一人に暗らるれば臣當に諫争すべし然れ共今既に事他に聞ゆ唯其の廣く泄れざるに及んで當に事を擧ぐべし猶豫機を誤らば臍を噬む共益なしと夜半俄かに軍兵を出だし桂川を濟るに及ひて光秀策を擧げ大呼して曰く我が仇本能寺に在り努力する者は重賞あらんと衆始て其反せるを知る光秀兵一千を督して三條堀川に屯し光春騎兵三千五百を以て進んで本能寺を圍み鼓譟して登る信長の近侍森蘭丸長定兵馬の聲を聞き出て望めば水色結梗の旗幟已に寺門に逼れり信長長定を召し其敵兵の誰たるを問ふ長定對て曰く光秀なりと言未だ畢らざるに前隊已に殿庭に亂入す信長白單衣を着て以て敵を射しに絶絶乃侍女十文字の鎧を呈す信長之を以て暫く防ぎしが事の爲す可らざるを察し内に入りて障子を閉つ然れども銀燭未だ滅せず信長の影映するを見て天野源左衛門鎧を延ばして刺し殺せり光春其の屍を隠して出さず光秀之れを求めて得ず快々として樂しまず齋藤利三白綾衣の焦餘を搜得て之れを刺して勝賊を殺すと言ふ明智光忠兵四千を率ひて二條城を襲ふ信長の長子信忠火を縱ちて自殺す是の夜光秀妙心寺に入る意刺髮せんと欲す光春等諫めて曰く古今先蹤なきにあらす請ふ旗を京畿に掲げて禁闕を護衛し以て武名を後世に傳ふべし亦愉快ならざるやと老亦諫む光秀遂に坂本城に入りて更に湖橋を修め尋て安土に入りて悉く舟金な取め以て與黨を賞す時に朝廷光秀の威唐を憚り詔して使者を賜ひ安土に到りて慰藉す光秀傲然將軍を以て自ら居る而して之に應ずる者は市井無頼の徒若くは亡命の姦兒のみ列侯世族に至りては一も至る者なし細川忠興、織田信澄、光秀の女婿なりと雖も使者を逐ふて絶を示す蒲生野秀日野

アケチ ミツヨシ

アケチ

と稱すと云ふ光秀和歌を善くし嘗て志賀唐崎に松を植を歌を作りて曰く「我ならで誰かはうらまんひとつ松心して吹け志賀の浦かぜ」と又茶道に通ず三男三女あり長は光慶次子字は自然、季子字は乙壽丸、女は明知光忠、細川忠興、織田信澄に嫁す(野史、常山紀談、茶人系傳全覽)
アケチ ミツヨシ 明智光慶は日向守光秀の子なり十兵衛と稱す英才にして孝徳あり行年十四歳天正十年の春より病に臥して丹州龜山に在り同年夏五月父光秀俄かに隱謀を企つと雖も光慶が賢才に恐れ必す諫諍せん事を憂へ深く秘して此を告げず親族隠岐守をして附人とし偽つて西國出陣と號し遂に兵を催ふして京都に至り遂かに主君信長を殺し頓て勅宣を受て將軍に任す乃ち將軍宣下の事を早く光慶に告げて彼れが心を悦ばせんと飛檄を以て之を告ぐ光慶一たび此を聞き却つて大に悲泣し鬱氣胸に逼て遂に卒せり(約史)
アケチ ミツヨシ 曙庵秋舉は三州岡崎の俳人なり文政天保の人(萬葉人名錄)
アケチ ミツヨシ 總角は京都島原里の娼妓なり元和中京師に助六といふ者あり在俠を以て聞ゆ其の姓氏を詳らかにせず或は云ふ貴族に出つと蓋其魚葉牡丹を用ひ記號と爲すを以て也島原里丹波屋といふ青樓に畜ふ所の妓名は總角色藝千里に甲たり助六深くこれと相馴しむ人因て總角助六と號す四條街に家す僕を善ふ五六人居るに恒産なく亦兄弟妻子なし人と爲り清秀にして鄙ならず内剛にして外柔志を高くして義に任じ強きを挫き弱きを援け以て俠を世に立つ又藝事に多能なり常に高門に出入して他の俠者と伍するを屑しとせず時に陶器人浪遊して京に寓す初め朝倉義景の臣眞柄晴俊(門下)と稱す勇天下に著らる義景の亡ふるや其役に死す子に某(七郎左衛門)と曰ふ家康其の名士の子たるを以て祿して以て麾下の士と爲さむと欲す未だ命せず病むて卒す子なし前に其妻の從弟陶七郎を養つて嗣とす七郎舊と大内氏に仕へ既に眞柄氏を冒かし改めて主馬と稱す

アケチ ミツヨシ

アケチ

に據りて敵を四境に傳へ嚴に守備を設く是に於て光秀始めて懼心を生ず既にして光秀荒木行重に佐和山を妻木範賢に長濱を守らしめ自ら京師に往き入朝して禮を行ひ三宅秀朝を所司代に溝尾茂朝を町司監と爲して京師を鎮衛せしむ又人心を收めんと欲し筆殺の戸税を蠲き祠堂金と五山及び大徳、妙心二寺に寄附す天皇詔して其戸税を蠲くを嘉す光秀復た安土に往き將に日野を攻めんとし織田信雄の土山に次するを聞きて前むと能はず光秀初め以爲らく柴田勝家北越に在りて上杉氏と對抗し羽柴秀吉毛利氏と中國に相接し徳川家康界浦に在りて國城遠隔す而して信孝及び長秀は將に四國に濟らんとす筒井順慶は莫逆にして信澄は忠興の女婿たり此時に乘して織田信長を弑殺せば天下圖るべきなりと而して意を遂ぐるに及び人を馳せ毛利氏に報ずるに其の人懇りて秀吉の蛙鼻陣中に到りて虜にせらる秀吉移文を見て乃ち喜悲交々至り遂に毛利氏と成きを行ひ長秀、勝入等と東上す又家康變を聞きて國に就き信澄は長秀の爲に殺され順慶、忠興亦來り會せず是に於て光秀安土を發し京師に適き預め守備を議す入朝して天顔を拜せんとを請ふ終に聽され乃ち歩騎兵一萬八千を率ひて洞檜に次し大に秀吉と山崎に戦ひ敗走す光秀遁れて青龍寺に入らんと欲す會ましく土寇群起して道を遮り漸く間道を経て青龍寺に入る時に見兵猶一千餘あり而して遁れ去るもの多く忽ち兵値に數百を餘すに至れり城代三宅綱朝對て曰く臣請ふ此に戦死せん宜しく疾く坂本に逃るべし是の夜二更光秀及び村越三十郎、堀與二郎、進士貞連等潛に青龍寺を出て伏見深草を経て四更小栗栖を過ぐ土寇路に要し藪中より竹槍を以て之を刺して光秀の右腋を洞す光秀急に馳する數百歩にして馬より墜つ茂朝馳せ到る光秀切齒して曰く疾く首を刎ぬ以て密藏すべしと乃ち眼す是に於て從者皆な自殺す茂朝光秀の首を取りにて之を籠に裏み泥中に埋めて之に殉死す光秀歳五十七光秀旗を擧げてより僅かに十有三日なるを以て世に之を十三公方

す妹あり色美に書を能くし忠輝に宮事す忠輝は家康の第六子にして秀忠の弟也妹幸を得て側室と爲り盛寵あり主馬因て忠輝に出仕するを得乃ち本姓に復し更に要人と稱す要人慧敏俊便常に忠輝に事ふるに其好む所を勸め稍以て寵を取る夙夜忠輝に侍し大に威福を作す故を以て藩士これを怨む傳相山田某(門下)に深く之を愛ひ屢々忠輝を諫めて之を退けしむ諷かす要人懼れて某を讒す某知らず又顔を犯して諫む忠輝大に怒り侍臣に命して之を前に戮せしむ秀忠これを聞き大に悦びしして曰く山田某は神君が擇んで以て弟に傳する所なり今弟擢まに之を誅する我其意を知らずと近臣高島伊織をして往て忠輝を責めしむ忠輝素と剛暴驕蹇既に使命を賜き忿氣沸然伊織に謂つて曰く汝が我が爲めに幕府に謝せよ某已に弟が家に相たれば即ち弟が臣也今臣罪ありて弟これを誅す何ぞ幕府に關せむ幕府尙は弟を怒りて横虐と爲さば弟請ふ腹を刎り以て罪を謝せむ且汝が之を思へ我神君に於ける亦子也特に其後生の故を以て幕府に臣たる耳今小事必ず諫む何ぞ寛らざるの甚たしきと言多く忌諱に觸る伊織己に退き謂らく是以て復命す可からず恐らくは其親を問する有らむかと徑ちに歸りて家康の三日幕府執政土井利重を召して之を問ふ利重乃ち退き伊織を其邸に召す伊織至り侍士を屏そけむと請ひ密に告ぐるに狀を以てし且曰ふ僕不幸にして此際に在り唯一死あるのみと直ちに刀を執り自から其腹を刺す利重驚きて之を支ふ遂はす遂に死す利重復た殿に上りて具さに聞す幕府之を悼み其の弟を以て嗣と爲し銀卅枚を賜ふて厚く屍を斂めしむ又利重に命して山田某の後を存せしむ忠輝の傳相皆川某遠山某共に忠輝を諫めて曰く往日伊織反命せずして自殺す幕府終に復た問はず是親に教き也君何ぞ獨り大兄に負て幕府に抗するか願くは死臣の忠言を思ひ速かに要人を退けて之を遠ざけよ臣等敢て死を以て請ふと忠輝亦頗る悔い乃ち陰かに厚く資斧を賜ふて之を逐ふ要人竊かに意ふ今國家太子猶は幼なり幕府若し不諱あ

らは當に嗣て大位に即くへき者は吾か公に非らずして誰そ公に社を獲ば我將に大に用ひられむとす遂に大逆を謀り京畿に往來して陰かに浪士暴客に結ひ忠輝の命を偽はり以て黨徒を誘ふ同九年癸亥將軍秀忠入朝して二條城に居り大に散樂を張る數日士民をして之を縱覽せしむ遠近來り聚り京中維魯す要人黨人に約して曰く風烈しき日を俟ち上風より火を市家に放ち延いて城に及へば則將軍必す之を他方に避けむ是時に當り我が徒爲めに奔馳して火を救ひ遠かに御馬に逼りては一月の下に必ず志を得るおらむと京商越前屋源八亦謀り之に與かる助六素と源八と友と善し相親ると親戚の如し一日之を訪ふ會々家に在らず老僕請て曰く主郎弱齡にして父母を喪ふ親信する所は獨り君あるのみ近日豪暴の徒と相結ひ飲酒是れ耽り驕傲自ら高うす奴數々之を諫むれば輒ち曰く爾何をか知る我將に侯たらんとするのみ爾後復た言ふ勿れと奴弱かに感ふ伏して請ふ君警戒し之をして禍敗を免かれしめよと助六曰く諸是れ無少年の爲めに誤まらるゝのみ次夕我將に爲めに來り言はむとす郎をして門を出づる無からしめよと期に及むて助六至る源八酒肴を具へて且飲み且話す助六源八に伴はり勤めて曰く方今大亂始めて定まり天下未だ安すからず野士精客猶ほ或は劍を磨き眼を張る若し貴豪の士あり大呼して起らば諸侯豈に應ずる者無らざらむ人生一世間安くむそ能く終に草木と同く朽ちむ余嘗て陰かに士に結ひ己に數人を得たり嗚呼商人より起つて列侯と爲る者近こる小西行長あり卿獨り意無き耶と源八大に悦び悉く謀りとを告ぐ因て曰く卿の志此くの如くならは我れ請ふ爲めに陶君に介せむ且傍近に黨士六七人あり招き請ふて俱に酌む亦よからずやと遠く僕を馳す黨士尋て至る是に於て樽を換へ肴を薦め露飲歡を盡す助六乃ち衆を爲し黨已に聚まる事宜しく成るべきに似たり然りと雖ども竊かに謂ふに今將軍新に入朝して人民太平を祝す政令の及ぶ

所恩威樹立し諸侯異心なく百姓怨氣なし此の時方編戸の低小臂を擧げて大事に當る恐らくは百一も成る無からむ且僕諸君と朝食して夕飲し居に屋あり跡に衣あり分に分に於て亦足れり何そ遞かに封侯を以てするを爲さむ今の計を爲すは陶某を捕へて狀を官に首するのみ當に禍を免かるゝのみならず誠に國家の爲めに忠ならむ諸君試みにこれを圖かれと衆肯て言ふなく色相充し目相瞋らす俄にして一人突起し助六を攫み撃つて之を斃す五人急に刀を抜く助六前後相向ひ二を殺し三を傷つく某一人牆を踰えて逃る途に傷つく者二人を縛り因て源八に諭し市尹三枝氏の廳に詣りて首せしむ久頃らくありて吏來り引き捕へて去る官大に助六源八を賞し各銀五十枚を賜ふ初め傷つて逃る者往て要人に告ぐ要人懼れて近邑に匿くる官某跡忠輝に涉るの故を以て置て究訊せず而して要人自から安むせざんは一計を作り禍を助六に加へ其身を全うせむと復た京に入り潜かに馬街に住す時に助六銀を賜ふを以て酒食に易へ毎夕友を延きて宴を張り或は寅夜に至る要人これを謂かひ知り一夕助六の宅に抵り急に戸を叩く僕應して曰くいづれよりぞと要人伴はり答へて曰く市尹の邸より尹公遠かに助六を召す宜しく與に俱に來るへしと戸開けば隨つて入る時正に丑の下刺客已に散し助六沈酔して厨口に假寐し鼻聲鼾然要人刀を脱し官命と呼び直ちに助六を撃つて額に中る助六驚き起ち枕頭の刀を執つて之に應ず流血眶に入り器に墮つて仆る要人隨つて之を刺し殺す一僕棒を提げて其の背を撻つて燈滅す要人暗に乗じて逃れ去る頃らくありて衆僕燈を點して鄰を呼ぶ而して助六死せり墮簡を得たり衆俱に絛を開らいて之を讀む文に曰く僕陶氏要人と稱す奮と忠輝公に仕ふこのころ病を告げて骸骨を乞ひ來りて病を此の地に養ふ爰に助六といふ者あり多く凶徒を聚め敢て大逆を謀る何ぞ料らむ切りに僕を稱して謀首と爲し遂に事忠輝公に出でて以て廣く其黨を結ひ期するに萬一を徵幸するに至る天網之を漏らさずと雖ども恐らく

は禍基漸く大ならむ僕謹じむて國家の爲めに之を誅し且以て忠輝公の爲に冤を雪がば僕亦冀くは以て難を免かるを得む取て擅まゝに闘を作すに非ざる也伏して乞ふ明官の之を察せむとを衆書を携へて官に訴ふ官書を納れ僕をして助六の屍を收めしめ竟に究訊せず妓總角助六死すと聞き慟哭哀傷殆むと生くるを欲せず恨々將に疾を成さむとす己にして奮然自から謂ふ吾不幸にして勾欄に入り路柳梅花人の折取に任す然れども青心芳意未だ嘗て君の所に在らずむばあらざんはむや己に同穴を約して未だ合意に及ばざるも猶ほこれ夫妻の如き也汝陶奴、情に義に共に天を戴かず楊枝纏ひ風に勝ふるに力無くとも蕪葉猶ほ雨を捲くに心あり女亦人なり具に手足眼口あり苟しくも其志を一にせば豈に天祐なからむ然りと雖ども身勾欄を出づるに非らずされは事或は成すに難からむと乃ち其主に請ふて曰く助六の婢に於ける愛渥く恩重し郎親て妻と爲し婢仰て夫と爲す固より他客の比に非らず是れ主の知る所也今不幸にして賊の爲めに殺さる婢か心將に何如せむとす且郎衆と孤獨今より後落葉墓に堆するも人の之を掃ふなけん伏て祈る主公恩惠の餘婢に賜ふに其身を以てして虎尼を曾我君に効すを得せしめは婢死すとも朽ちすと涙下りて仰かず主感傷して之を許す助六の友に難波屋治助といふ者あり屢々丹波屋に遊び總角の操心あるを知り嘗て約して云く汝樓を出つるの後我汝を以て吾か妹と爲し助六の爲めに柯を執らむと是に於て往て之を弔す總角悽然涙を揮ひ告ぐるに其志を以てす治助嘆賞し久うして曰く汝苟しくも報仇を志せば我將にこれを助けむとす然れども圓頂して樓を出つるは俱に其計に非らざる也吾聞く要人年なほ壯且修行の士に非らず豈に其時に來りて花柳を訪ふと無らむや此の時を以て圖らば則志得易き耳と乃ち樓主に謝して曰く我嘗て助六と兄弟の交を爲す助六總角を妻視す我亦應に之を嫡視すし嫡已に身を乞ふを得たり理宜しく携へて我が家に至るべし獨り艶なる彼の女子の我に

在るをいかむ嫌ひを避けざるを得ず、請ふ且らく之をして卿か所に在らしめよ衣食の資は我敢て卿を煩はさずと主曰く敬て命を奉せむ請ふ多く慮を勞すること勿れと居ると數月要人しばしば衆を率ゐて某樓に遊ぶ漢屋の妓吉野と狎る總角之を察知し以て治助に謀る一夕要人單身樓に登る治助これを時と一妓を携へて其樓に登り就て並局に宿す總角亦來り遊び伴はりて治助に邂逅するまねを爲し妓と俱に局に入り談偶と寅牌に至る頃くありて要人圍に如く、治助起つて之を尾し僅かに懸燈の下に抵り後より之を擁し急に總角と呼ぶ總角馳せ應じ劍を脱き要人に向つて曰く夫助六の爲めに誓を報すと徑ちに其脇を刺し力を究めて之を別る妓も亦治助の刀を執りて之に擁す要人痛みを忍び嘆して曰く烈なる哉婦や請ふ禮まいに甘心せよ但問ふ後より擁する者を離れどか爲ると治助答へて曰く商人治助なり嘗て助六と友たり義因て此に及ぶ君己に女の志を感して安死す僕獨り情無からむ哉若し屬せらるゝと有らば請ふ試みに言へと要人謝して曰く我已に此に至る復た何をか言はむ特に一事あり我家宗丸の青、千代鶴の刀を藏す是れ義景より真柄暗俊に賜ふ所なり我嘗て其家に養はる故を以て之を傳ふ我死せば恐らくは此の物他氏に移らむ越前不老邑に暗俊の從弟仁兵衛といふ者あり豪農なり卿請ふ家僕をして二器を彼れに致さしめよ是を至屬と爲す凡そ有る所の家什資財は僕等の分取に任す我荷包中に齎らす金少許あり請ふ之を用ひ吾か屍を收め衆をして其醜を嗤はしむるとなれば感涙からずと因て總角を顧みて曰く汝刀を斜めにせば吾か吭抉りて死せむと治助傍らより之を助く遂に死す初め治助の要人を擁する要人賊と呼ぶ吉野懼れ伏す是夜會々風雨甚たしく應ずる者なし已にして一家擾々近鄰並ひに至り馳せて諸司代板倉宗重に告ぐ廳吏來りて二人を引く宗重廳に陞り備さ其狀を訊ひ大に二人を褒賞し總角に銀五十枚を與へて曰く是れ官賜に非らず余甚た汝が義烈に感す因て私に之を與ふと又治助に

アゲヤキ

大小二刀を帯ふるを許して其義を旌らばす更に奉行私邸の諸役に命し要人を論して反逆と爲し將に屍を日の岡に曝せむとす治助請ふて曰く要人死に臨み僕に屬するに屍を斂むるを以てす言猶ほ耳に在り僕負くに忍びす伏して願ふ君公大仁を垂れ屍を以て僕に賜はらば幸甚と宗重其志を感じて之を許す但罪條を掲げ著はして之を日の岡に建つ蓋し以て忠輝を警しむる也既にして總角治助に請ひ強髪して尼と爲り以て助六に香花を奉せむと治助曰く姑らく是を置け我將に汝の爲めに親に讒せむとす我汝を諒とせざるに非ず然れども此に一あり我が妹幼時痘瘡を患ひ首髪少く膚漆の如く斑痕額に滿ち醜此すへきなし助六嘗て我に謂つて曰く令妹己に笄するも恐らくは終に售れざるを我當に乞ふて以て妻と爲すへしと時に我之に答へて曰く醜惡彼れの如し安くむる巾櫛に侍せしむへけむと助六又曰く令妹の資性柔順貞淑、己に針機に巧みに兼ねて絲竹書詠を能く其容貌醜くしと雖も其徳甚だ美なり且妻何そ美醜を擇らばむ徳何如を顧みる耳と我心に之を感荷す然れども敢て嫁せす妹之を聞き感泣して曰く人の棄つる所にし之を納るを許す惠義の厚き三生報し即ち笑箒を執らざるも妾に於て足れり且其死を聞くに及むて哀感生意なし今汝夫の爲めに仇を報して己に一節を立つ汝にして尼と爲らば妹は則身を以て殉ふるならむ我甚だ之を憐む汝請ふ其事を以て之を妹に譲り其れをして因て以て身を終へしめは則妹亦一節を立て而して我助六と幽明に相喜ふを得む況はむや汝は即ち別に琵琶を抱き改め嫁する者と大に異なるをやと總角曰く己に請ふ所を得されは寧ろ死あらむのみ但事實妹に關る且君の厚意に背くも亦忍びざる所也事已に斯くの如くなれば唯命是れ從はむと是に於て治助總角を以て己れが妹と爲し其從弟野口甚兵衛に縫綴の里に嫁す妹祝髪して浮圖尼と爲り亦庵を其里に結ひ垢衣糲飯日夕佛に事へ専ら助六の爲めに後福を祈る後總角男を生む而して夫病むて歿す遂に比丘尼と爲り來て庵

アサカ キサイ

アサカ タンバク

氏とす伊藤東涯の門に學ぶ能く華音に通し小説を解せり(墨定傳名案全書)
アサカ カクベエ 安積覺兵衛は小笠原藩に仕へ雙なき軍功者なりなければ侯音を更ためて訓とし呼て覺兵衛とす關原の戦殊に大功を取たり大垣兵出で戦ふ日覺兵衛三人に疵を負せ五首を取て主君に示し再び槍を執て出づ敵六騎前後より夾撃す覺兵衛屈せず戦數合ならざるに二人を撞伏せたり時に敵丸流れて其一人を履す三人驚駭し覺兵衛を捨て其傷者に集まる覺兵衛亦藥を出して之に與へ俱に扶けて其營に送り又三人と戦ひ又三首級を擧ぐ一日八級を得たるを以て入賞して唯一人の覺兵衛と稱せり前後比類なきの謂なり治平の後覺兵衛侯の無禮を怒ることありて辭せずして其國を去り姓名を飯土用總内と改ため京師に寓止す侯怒て永く仕進の道を絶す水戸藩徳川氏其英名を稔聞し收用せんと欲す乃ち使者を遣はし侯に謂はしめて曰く聞か飯土用總内と云へるもの足下の寵賈を受け沈淪年を累ぬと其罪の輕重を知らされども請ふ我が爲に赦し以て我面目を起さしめよ侯對て曰く吾家嘗て飯土用某なる者を扶持せしこと無し無ければ罪に處せん事もなしと水戸徳川氏乃ち召して臣とす謂を執るの日原名に復せしむ其孫は即ち水滸有名の儒安積澹泊(參看)此なり(案雄行録)
アサカ キサイ 安積希齋は水戸の人なり名は貞吉介之丞と稱す寛永七庚午歳生る性學を好み頗る詩に嫻ふ希齋と號す是時府下學に志す者少し義公故に貞吉を賞す父正信の幼なるや安積と淺香と邦音相通するを以て人誤りて淺香と書す竟に誤を傳へて改めす公其眞を失するを以て貞吉に命して其正に從はしむ年三十七寛文六年丙午七月十七日を以て歿す希齋詩集あり(盤龍録)
アサカ ゴムサイ 安積良齋は字思順通稱は祐助良齋は其の號別號は見山樓奥州二本松の人徳川氏の儒臣なり幼にして學を好み穎異にして奇才あり慨然として奮ふて曰く僻鄉師

アサカ キサイ

アサカ タンバク

に入り亦亡夫及び助六の爲めに浮圖道を修めて庵中に終ふ治助が妹善く佛經を讀み深く其旨を領し遂に一寺を創し寂するまで終身人道を知らずと云ふ(事實文編)
アサカ キサイ 揚屋喜齋は絃家なり頗る三絃の道に深し特に六筋懸に長す慶安明暦の間其の名最も著はる天下第一平左衛門、庄左衛門等と名を齊うす(盤龍録)
アサカ キウカミ 明浦宮鑑は勢州の番人なり墨梅を畫きて甚だ清奇あり遠く補之の風を學びて尋常畫家の流に非ずと云ふ(本朝畫史)
アサカ クワンカウ 朱樂善江は有名なる狂歌師なり姓は山崎名は景貫字は道交通稱稱助といふ牛込二十騎町に住す幕府の先手與力なり内山樗軒の門に入りて廣く和漢の學に涉り最も和歌を能くす後蜀山人等と共に狂歌をもつて名譽世に聞ゆ菅江の名は初め俳名を貫立と云ひしを以て人皆貫公々々と呼し菅江と書きしといふ中頃菅江の名憚ありと爲して漢江と改む日光宮公遠親王之を聞て曰く菅江何ぞ妨げんと因て後菅江に復す是れに朱樂の二字を加へしは安永の頃人と酒を飲み戯れに行燈の紙に「我のみひとりあけら菅江」と書しを初めとす又淮南堂一に芥陀利華庵と號す著書に大抵御覽狂歌大勢等あり斯道の虎の卷なり元文三年十月廿四日に生れ寛政十年十二月十二日歿す青山青原寺に葬る(狂歌師人傳、狂歌師傳)
アサカ アゴ 阿巳は尾張國の妓なり其の歌新續古今集離別の部にあり世に傳ふる景清が愛妓五條坂の遊君阿見耶は是なる乎
アサカ アゴヤシム 安積院淨俊は梶井宮の執事にして律師に任す讓良親王を補佐し殿法印良忠と同勤たり中興の大業成るに及び足利尊氏兄弟の讒言により良忠と共に獄に下され建武元年十二月十二日殺さる(太平記)
アサカ アサエダ 朝枝玖珂は防州吉川侯の儒臣なり名は世美、字は徳濟、善次郎と稱す玖珂は其の號、自ら脩して異

友に乏し豈に志を成す可けんやと乃ち笈を負ひて江戸に來り佐藤一齋の門に入る良齋家固と負し學資給せず因て一齋に請ひて薪水の業に服し以て大に學ぶ時に年十七遂に祭酒林述齋の門に入り名聲鬱然として都下に震ふ嘗て良齋問話二卷同續編二卷を著はす議論切實未だ嘗て間言語あらず良齋固と文章を以て鳴る嘗て文を論じて曰く凡そ文を作くるの法は必しも六經ならず必しも秦漢ならず必しも唐と宋と元明とならず辭達するのみ吾か所謂辭達するとは能く自ら胸臆を慮り機軸を出して一家言を出す者なりと又詩名あり嘗て十二屬詩を作る命意奇拔頗る人口に膾炙す天保の末幕府令を下して學政を振興す是に於て諸藩風靡し絃誦の聲殆ど天下に遍ぬし二本松藩亦學館を起し良齋を擧げて教授と爲す既にして將軍召して賜を賜ひ幾くもなく特首擢んで昌平齋の教官と爲す人以此と數とす晩年に學術文章卓乎として後進に仰かれ書を挾みて隨る者陸續として門に盈ち列侯以下相延て講經を開き殆ど盧日なし萬延元年十一月歿す年七十一著はす所論孟衍旨、南柯餘篇、見山樓集、論語埤註、東省錄、豆遊記、車輿考、良齋文畧正續、同詩畧數十種あり(近世先哲叢談、名家全書、香雪齋)
アサカ シムウツ 安積親王は聖武天皇の皇子也母は夫人縣犬養廣刀自、天平十六年閏正月帝に從て難波宮に行く途次脚氣を患ひ京に遷りて歿す年十七
アサカ タムパン 安積澹泊は水戸藩の碩儒なり名は覺字は子先覺兵衛と稱す澹泊は其の號、蓋し諸葛武侯が澹泊に非れは以て志を明すなしの語に取るなり又老圃常山の號あり晩に老牛居士と號す祖正信覺兵衛と稱し元和乙卯大坂の役、小笠原秀政に屬して戦功あり後水戸侯に仕ふ父貞吉繼て其の祿を食む澹泊生れて十歳朱舜水を師として江戸に來る明年父死したるを以て歸り十三の時復た舜水に江戸に從ふ舜水甚た其の才を愛して特に教授す居ること三年道を疾みて還る故に親しく句讀を受くるものは權に孝經小學論語其の他數部の

書のみ而れども長するに及んで博學能文にして尤も史學に長せり初め義公四方の英俊を招集して日本史編修の事あり瀧泊之れが總裁に任せらるる享保中幕府屢に促かして史を獻せしむ時に論贊未だ成らず義公乃ち瀧泊に命じて之を撰せしむ是より先き瀧泊新井白石室鳩巢と交りて互に學事を切磋す瀧泊虛心物を容れ能く人の善に服す然れども事に遇へば一に義を以て斷心凜乎犯す可らざるの節あり是を以て二子稱して益友とす論贊を撰むに及びて屢々鳩巢に示す鳩巢曰く安倍仲麻呂は關旅の臣を以て唐の諸名家と交はり名譽を天下に擅にす而して論中一語の褒稱なきは何ぞや瀧泊曰く仲麻呂は異朝の官爵を受け大義闕くるあり世人其の才に眩して其の罪を知らず甚九開れなし鳩巢深く愧服す史享保庚子の歲初めて稿を脱す全編二百四十六卷、前後之に與るもの數十百人而して瀧泊の功多きに居る史成りて義公之を幕府に進む將軍吉宗有馬某をして之を褒賞せしむ義公大に喜ひ物を賜ふ差あり瀧泊亦鳩巢の功を上進す乃ち亦物を贈りて其の勞を謝す人滋々瀧泊の其の功に伐らざるを歎す初義公の世に當りて史館人を得る尤盛なり公薨するに及びて一時の名彦相尋て凋喪す瀧泊獨存して世に仰がる老に至りて氣力衰へず其の命を奉じて烈祖成蹟を著す時七十二歳なりと云ふ元文二年病を以て家に終ふ年八十二瀧泊本と角兵衛と稱す俊才にして學を好む義公以爲らく其の器乃祖に減せずと乃ち命じて覺兵衛の稱を襲はしむ既にして麻屋々増し職番頭に至る瀧泊學は伊洛を主とす然れども敢て之に拘泥せず又華音を善くす其の通鑑に於ける温公の書を喜ひて朱子の綱目を喜ばす曰く綱目書法發明は議論劃切なりと雖も頗る苛酷に過ぐる者あり其の人をして面あり之を聞かしめは必ず之れが辭あらん豈に心服せんやと瀧泊性甚た菊を愛す凡諸家の奇品集めて園中に栽ゆ尤も種藝に精し秋時に至る毎に五色燦爛人目を奪ふ其の芳國中に聞ゆと云ふ著はす所烈祖成蹟の外瀧泊齋文集、湖亭筆、老圃詩、朱文恭

アサカ トモミツ

アサガハ ドウサイ

て、相田氏を嗣ぐ次は格字は天壽本姓に復し片山氏を稱す夙世す第三子彌す因て大聖寺藩横江成美の子を養ひて嗣と爲し次女を以て之に配す長女は各務氏に適く第三女は堀川氏に適く善庵帷を下し教授あり初め篋仕に意なし松浦侯の舊契あるに感し幡然釋きて起つ是に於て侯待するに大臣の禮を以てし政事に參與せしむ資する所甚だ多しからず善庵の長崎に遊ぶや太宰府を過ぎ籠を買ひて客舎に至り主人をして之を解かしめんとす主人天満神の祭日たるを以て辭す善庵止むを得ず之を薦に包み臥床に置く籠夜半に至り薦を破りて縱横爬行し衣衾盡く汚す後善庵之を十返舎一九に歸る一九之を借りて膝栗毛に作る云ふ(愛日樓集)

アサカ トモミツ

アサガハ ドウサイ

大聖寺藩横江丈左衛門成美の子なり名は彌、字は土修通稱晋四郎同齊は其號なり嘉慶、眠雲山房、小泉漁夫等、皆その別號なり年十五江都に遊び市河米菴の門を叩き請ふて塾僕と爲り一意に書法を攻む刻苦數年既に諸體に通じ筆力氣韻殆ど師に迫る米菴甚愛し其成立をまじ産を分たむとするの意あり時に都下の儒朝川善菴齋を求む同齊の人と爲りを聞き其の意を通す同齊米菴に謀らす直ちにこれを諾し約既に成て告く米菴絶然として叱して曰狡奴何ぞ吾に負くと机上の鐵鎖を取て擊むとす同齊若皇俯伏罪を謝す米菴また迫らす禁爾として坐して曰く書法義獻に獨すと雖も亦徒爲のみ我畢生の精力を書き寫す然れども他人の器具たるに過ぎず儒人は人を濡し邦家に益す豈書家者流と同日に論す可むや汝これを勉めよと時年二十五既に齋に専ら家學を究め數年にして善菴に代て教授し兼て書法を授く一日米菴齋を致して召て曰く頃日一農人村社の祭職二旗を擲て來る布長さ二丈餘字の大さ方三尺左右の〳〵七字を書す曰く昔者請ふ所の社職なり年久しく布汚る今之を新にせむとす更にまた書せむことを請ふとこれを閱するに字は則我の書なり印も亦常に用ふる所なり然れども吾心にこれ

遺事、大日本史論贊、大日本史叢書、神祖遺事あり(甘雨亭叢書、先哲叢書、近代名家著述目録)

アサカ トモミツ 朝香朝光は西村流の砲術家なり四郎左衛門と稱す種田木工助の門人慶長年中の人(本朝武藝小傳)

アサガハ ドウサイ 朝川善庵は松浦侯の儒官なり名は鼎字は五鼎江都の人父名は世璠字は叔瑟兼山と號す其の先は北條氏後ち片山氏と稱す世々上毛縣野郡平井村に居る叔瑟に至りて始て江都に來たり業を服部南郭に受け専ら漢學を攻め都に教授す原氏を娶る三男一女を得る叔瑟多病にして中年に没す三子尙ほ幼原氏依頼する所無し乃ち遺孤を擲へて醫人朝川默翁に適く默翁四子を撫育する所生の如し最も其の季を愛し親ら句讀を課す季は即ち善庵なり年甫めて十二に及び學に山本北山に就く北山一見之を偉とし呼んで神童と爲す既にして默翁善庵を拉し京攝間に遊び交を諸名彦に結び居る三年にして歸る寛政戊午長崎鎮臺肥田豊洲に從て山崎に赴き又南肥薩摩を遊歴す五年を経て歸る學益々博く經業尤も精し時に松浦侯其の名を聞き之を延て厚く禮遇す列侯贊を取て業を受くる者十數藤堂氏大村氏尤も親昵する所なり文化十一年默翁即世す歿するに臨み遺言して曰く汝は吾か生む所に非ず實に兼山遺腹の子なり今汝ち三十餘歳學既に成る汝當に本姓に復し以て先業を續く可しと善庵之を聞て愕然始めて其の生む所の父あるを知るなり然れども默翁撫育の恩生む所に過ぐ遂に固く請ひて終身朝川氏を冒す乙亥の冬清國海船漂ひて豆州下田港に到る異俗言語通せず下田は韭山縣令江川氏の管する所なり善庵縣令の招に應じて筆語贈答し國體を辱しめず帛金若干を賞賜す弘化三年丙午閏五月幕府の召を辱しし調を賜はる世之を希世の榮と謂ふ嘉永紀元十二月病に墜り翌年二月七日を以て終る天明元年辛丑四月八日を距ると六十九年遺屬して北總葛飾郡小梅村常宗寺に葬る遺孤及び門人胥議し私に之に諡して學古先生と曰ふ配春田氏男女子六人を擧ぐ長は正準出

アサギノ ウラナリ

記、紀効新書秘解、天正本孫子曹註輯補、征韓實記、長政暹羅戰記等あり(中根香亭通観)

アサギノ ウラナリ 淺黄裏成「シヤクヤクテイナガチ」

アサクサアム 淺草庵「セムサウアム」

アサクシラ カデヒラ 朝倉景衡は日下部孫右衛門と稱す。號は南山字は君采新井白石の室の弟なり。著書數十部あり。鐙着用次第、愚得隨筆、定西法師琉球物語、本朝軍器考圖式、及ひ遺老物語等なり(近代名家著述目録)

アサクシラ トシカダ 朝倉敏景は日下部孝徳天皇の皇子日下部公袁采より出づ。後世廣景に至り。斯波氏に屬す。元中越前坂南郡本郷黒丸城に居る。敏景彈正左衛門尉と稱す。斯波氏三老臣の一となる。長祿二年斯波氏衰へ、其の臣甲斐某家事を恣にす。敏景擊ちて之を滅し、一乘谷に住む。應仁元年五月京極持清と戦ひ、之を取る。島山義就敏景の勇を稱し、山名宗全に薦む。宗全之に甲刀及び馬を賜ふ。文明二年五月大將軍足利義尚敏景を越前の守護となす。是の歲敏景義尚の命を奉り、甲斐入郎及び斯波氏の族を伐ち、之に克つ。尋いて髪を削り、宗雄居士と號し、英林寺と稱す。久しからずして卒す(野史)

アサクシラ ノゾマサ 朝倉宣政は義景の再從兄弟なり。初の名は藤十郎父を在重と云ふ。宣政豐臣秀吉に仕へ、天正十八年使番となり。小田原に從ふ。慶長庚子の役、徳川秀忠に從ひて上田城を攻む。鎗を把て城門に薄る。敵樓上より之を射る。宣政鎗を延はして之を刺す。後從五位上に叙し、筑後守と稱す。秀忠の三子忠長に附屬し、掛川城邑二萬五千石を賜ふ。寛永九年郡山に流さる。十四年二月卒す。年六十五。子孫世々幕府に仕ふ(野史)

アサクシラ ノリカダ 朝倉敏景は敏景の子、小太郎と號す。兄を孫五郎景綱と云ふ。妻腹の子なり。故に坐次毎に敏景に下る。文明十五年七月景綱敏景を武藏場に殺さんとす。敏景遁れて髪を削り、宗滴と稱す。敏景の母二位尼之を憤る。景綱京師に走り、細川氏に憑り、名を元景と改む。敏景の弟遠江守勇にして力あり

アサダ ガウリツ

人呼て朝倉の小天狗と稱す。其の子孫四郎景豐竊に宗家を滅さんと計る。元景之を扶く。敏景の孫貞景(即ち宗宗宗)等をして之を伐たしむ。文龜三年四月朔日、其の不意を襲ひ、急に敏景を圍み、景豐等を殺す。元景歩騎一萬八千を率ひ、越前に入る。貞景伐ちて之に克つ。永正二年四月元景死す。宗滴功を以て、敏景の郡司となる。三年七月、越前一向宗の賊兵三十萬を囂聚し、河北を侵し、邑里を燒く。宗滴馳て根點寺に入り、僧を擒にし、率て一乘谷に到る。貞景悦び、宗滴及び山崎入道祖桂等をして、遼へ戦はしむ。遂に之を取る。其の脱し、歸る者三分の一に過ぎず。享祿四年八月、宗滴子景紀等と兵八千餘を率ひ、能越賀の漂客及び遊佐神保等と戦ひ、首を獲ると八百之を河岸に爲す。十一月、宗滴越前に歸る。天文二十一年、宗滴年七十九、勢力尙衰へず。兵を率て加賀に入り、津葉を攻て之を拔く。八月、宗滴病甚しく、尋て卒す(野史)

アサクシラ マスヒト 朝倉益人は和銅寶龜間の人なり。位外從五位下に至る。性和歌を好み、頗ぶる。其の遺興を究はむ。詠歌は載せて萬葉集其の他諸書に在り(萬葉集作者傳)

アサクシラ ヨシカダ 朝倉義景は越前の領主なり。世々一乘谷に居る。彈正左衛門孝景の子、孫二郎と稱す。初めの名は延景。二十一年六月、大將軍義輝諱の字を賜ひ、左衛門督に任ず。永祿二年十二月、義景從四位下に叙す。五年八月、大覺寺の門主義俊越前に來る。義景爲に曲水の宴を設く。皆以て亂世の一興となす。是より先き、加越の土賊越前の一向徒と謀を合せ、囂集亂を作す。義景兵を遣はして之を伐ち、賊と約して手取川を境となし、以て半州の租税を收めしむ。尋て將軍義輝の命を受け、之を和して、女を本願寺教如に妻はす。悉く加賀の地を以て本願寺に附す。之を暫くして、加賀の賊盟約に背き、本願寺の貢米を抑留し、又郡邑を侵し、行旅の資財を奪ふ。是に於て、義景人を遣はし、賊を諭さしむ。賊伴り、附す。九月二十日夜、又急に來り、月津御幸塚を襲ふ。勝連華景基等力め、禦之を取る。賊首坪坂伯耆力盡きて、來り降る。是に於て、義景の兵威大に振て、近江以北盡く服す。九年九月、足利義昭來

アサギノ ウラナリ

て、義景に投す。義景親族群臣と謀りて、其の恢復の計を議す。會々義景の長子阿若死す。義景之を悲しみ、稍武事を怠る。義昭去て、美濃に行く。義景文を好み、和歌を詠ず。嘗て細川氏の女を妻り、卒す。近衛氏の女を迎ふ。又小宰相を愛し、近衛氏を送り、歸へず。又齊藤兵部少輔の女を納る。小將と名く。一男を生む。之を愛王と名く。家政漸く衰へ、婦女口を出す。又老臣相尋で、没し、諺間大に行はれ、賞罰當らす。十一月、九月、織田信長義昭を擁立して、京師に入る。畿甸の諸侯皆服從す。獨り義景疑て、行かす。元龜元年、信長家康と兵十萬を帥ひ、敦賀に到る。金術手筒山の諸城遂に陷る。信長猶進で、一乘谷を攻んとす。淺井長政義景と謀を通過して、信長の歸路を斷つ。義景兵を出し、之を追ふ。信長夜に乘り、京師に奔る。六月、信長長政を攻む。義景族景健を遣はして、之を救はしむ。二十八日、景健家康と姉川に戦ひ、大に敗れ、僅に免れて、歸る。九月、信長兵を攝津に用ふ。長政義景と合し、其虛を伐たんとす。一向の宗徒亦義景等を助けて、信長の歸路を遮る。信長兵を遣し、京師に入る。十一月、彼我勢屈し、且北地雪深きを患ひ、義景等義昭に因り、信長と和す。三年七月、信長虎御前山に城く。義景人を遣り、小谷を援け、自ら兵三萬餘を率ひて、梁瀨に陣す。此に於て、和復た破る。天正元年七月、信長兵を率ひ、虎御前山に陣す。八月、長政の將叛く者あり。長政援を義景に乞ふ。義景兵を出して、之を救ふ。十日、信長大嶽下野を攻め、降す。義景の兵敗を聞き、稍や脱し去る。義景狼狽甲を棄て、走る。信長の將佐々成政前田利家等追ひ到る。義景の兵死傷頗る多し。十五日、義景僅に數騎を從へ、一乘谷に歸る。信長勝に乗し、連りに諸城を降し、敦賀に入る。義景の族景胤、景健等皆信長に降る。義景朝倉景鏡、高居景近等と謀りて、母廣徳院及び愛王を、亥山東雲寺に匿し、書を平泉の僧徒に送りて、救を乞ふ。増徒從はず。十八日、信長府中龍門寺に入る。僧徒火を一乘谷に縱つ。朝倉氏累世の貨物悉く灰燼となる。景鏡素より反心あり、乃ち義景を勧め、母子と山田

アサダ ガウリツ

六坊に徙らしむ。從者僅に八人、景鏡兵二百を率ひ、急に六坊賢松寺を圍みて、之を燒き、人を遣はし、義景に謂て曰く、運命既に盡く、請ふ自ら計をなせと。義景怒て曰く、姦慝憎む可し。設令我死すと、三年を出て、誓を復せんと。言未九終ら、兵卒亂入す。義景劍を把て、自殺す。年四十一。鳥居景近、高橋景信、殉死す。景鏡、義景の首及び母子を信長に呈す。或人景鏡の不義不道を惡み、之を誅せんと。請ふ秀吉曰く、彼無道と雖も、我に忠あり、之を殺すは來降の路を塞ぐ也。乃ち之を宥す。信長義景の首を京師及び岐阜に賜ひ、母子を殺す。景鏡に命し、族を土橋と改めしむ。四月、景鏡土寇の爲に殺され、二子皆屠らる。實に義景死後、數月を出ず(野史)

アサクシラ アリシダ 朝倉在重は仁左衛門と稱す。朝倉六兵衛在重の二男。元和元年、大阪の役、牧野忠成に屬し、敵士の首を獲たり。使番目付を経て、町奉行にす。み從五位下。石見守に叙任す。慶安三年十一月十九日死す。年六十八(寛政重修諸家譜)

アサコ デヨウウ 淺子女王「アサノミヤ」

アサダ ガウリツ 麻田剛立は天文家なり。名は安彰、綏部綱齋の次子。幼より穎悟人に負はれて、外に出る毎に仰て、列宿を視、其名を問ひ、悉く之を記應して、忘るゝと無し。漸く長ずるに、及びて、深く天文曆術の學を好み、又醫術を究むるを喜ぶ。二事を修むること二十餘年。の長きに及べり。家貧しくして、師を他郷に求むると難く、又求むべき師なかりければ、少しも師に據りて受くる所なく、獨學を以て、遂に大に其道に通じ、當時の學者未だ思はざるの發明をなすに、至れり。明和末年、杵築侯に擢てられ、侍醫に列し、駕に從つて、江戸に赴く。然れども、剛立は更に之を喜はず。反て、我が學を妨ぐるものとし、郷に歸る。や否や、書を上りて、仕を辭せんとす。三度遂に容られざるを見て、藩を脱して、大阪に至る。時に年三十八。姓を麻田と變して、醫を活業とし、心を星曆に潜め、空理を論せ、測量實驗を本とし、日夕磨磨すること、又二